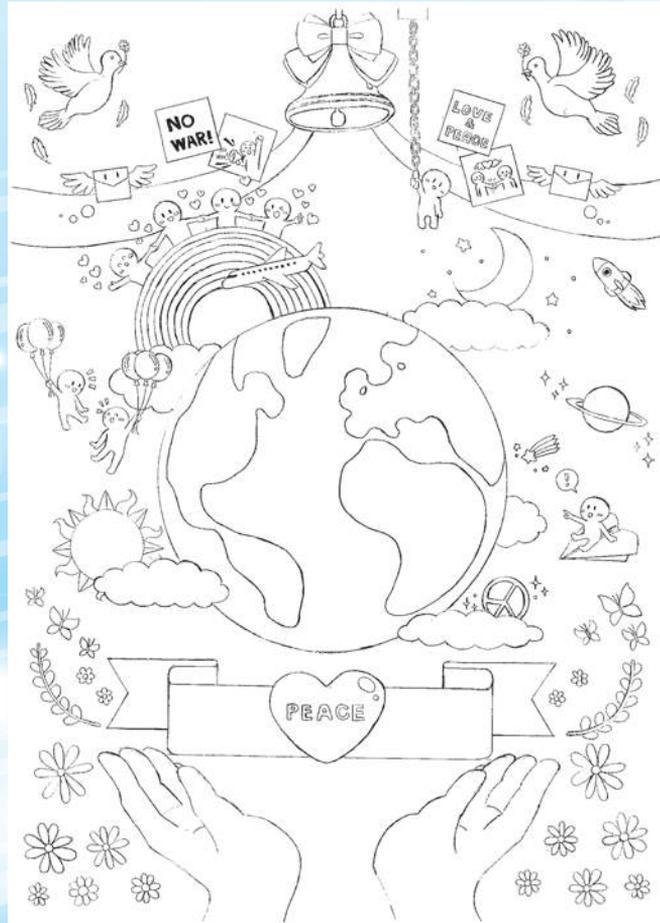


第61回

# 全国国際教育研究大会宮城大会報告書

## —国際教育インフォメーション—



# 目 次

巻頭言 全国国際教育研究協議会会長（東京都立昭和高等学校校長）	大泉 昌明	2
<b>第61回全国国際教育研究大会 宮城大会</b>		
○大会概要		
○大会会長挨拶	宮城県仙台東高等学校 藤垣 庸二	7
○開会行事主催者挨拶	東京都立昭和高等学校 大泉 昌明	8
○開会行事共催者挨拶	独立行政法人国際協力機構（JICA）東北センター所長 花立 大民	9
○開会行事来賓挨拶	外務省国際協力局審議官 日下部英紀	10
○開会行事来賓挨拶	文部科学省初等中等教育局教育課程科外国語教育推進室 教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 富永 幸	11
○宮城大会高校生英語・日本語弁論大会		
英語弁論	宮城県仙台二華高等学校 齋藤 汐音（外務大臣賞）	13
英語弁論	鳥根県立松江北高等学校 小澤 実里（文部科学大臣賞）	14
英語弁論	愛知県立岡崎高等学校 加茂 拓真（国際協力機構理事長賞）	15
英語弁論	八戸聖ウルスラ学院高等学校 岩淵 匡花（国際交流基金理事長賞）	16
英語弁論	茨城県立下妻第一高等学校 小口 姫由（日本国際協力センター理事長賞）	17
日本語弁論	東京都立科学技術高等学校 アラ・カシム（外務大臣賞）	19
日本語弁論	千葉県立幕張総合高等学校 寺内 アンヘル サクヤ （文部科学大臣賞）	20
日本語弁論	宮城県松山高等学校 アブラル ラタジ （国際協力機構理事長賞）	21
日本語弁論	東京都立科学技術高等学校 エスパナ・マルカ・アルティア・フロレス （国際交流基金理事長賞）	22
日本語弁論	広島県立瀬戸田高等学校 デントーン・アンシャリー （日本国際協力センター理事長賞）	23
英語・日本語弁論講評	外務省国際協力局審議官 日下部英紀	24
○高校生国際理解協力研究発表		
研究発表	八戸聖ウルスラ学院高等学校（国際協力機構東北センター所長賞）	26
研究発表	愛媛県立東温高等学校（国際交流基金賞）	29
研究発表	都城聖ドミニコ学園高等学校（日本国際協力センター賞）	33
研究発表	千葉県翔凍高等学校（全国国際教育研究協議会会長賞）	37
研究発表講評	独立行政法人国際協力機構（JICA）東北センター所長 花立 大民	38
○教員発表		
教員発表	青森県立大湊高等学校 南澤 英夫	40
教員発表	石川県立小松高等学校 福岡 輝樹	44
教員発表	兵庫県立神戸商業高等学校 藤井三和子	48
教員発表	岩手県（私立）岩手高等学校 田中 佳恵	52
教員発表	宮城県宮城野高等学校 鈴木 幸恵	56
教員発表	愛媛大学附属高等学校 上床 孝樹	60
特別寄稿	日本語を話す子供の会ウィーン補習授業校 横松 彩美	62
<b>各地区からの研究報告</b>		
○国際教育		
四国	高知東高等学校 野村 道生	66
	高知国際高等学校 山本 直子	66
九州	宮崎南高校 近藤 明子	70
<b>各団体紹介</b>		
○独立行政法人国際協力機構（JICA）国際理解・開発教育支援事業紹介		72
○一般財団法人日本国際協力センター（JICE）事業紹介		74
○独立行政法人国際交流基金（JF）事業紹介		76
○NPO 法人全国国際教育協会事業紹介		79
全国国際教育研究協議会紹介	東京都立五日市高等学校 中村 俊佑	81
あゆみ		86
各県事務局名簿		87
○第62回大会案内	栃木県立足利南高等学校 亀山 雅弘	88
あとがき	NPO 法人全国国際教育協会 木村 光宏	89

## 【国際教育インフォメーション 巻頭言】

全国国際教育研究協議会  
会長 大泉 昌明  
(東京都立昭和高等学校)

日頃より全国国際教育研究協議会の活動に御理解と御協力をいただきありがとうございます。

本研究協議会は高等学校の教職員を中心に、国際理解教育や国際協力に関する研究と実践活動を広く推進しています。また、参加いただいている教員の教科は多岐にわたっており、それぞれの視点から意見を出し合い、学校における国際理解や国際教育の充実を図るべく活動を展開しています。

令和6年度は、第61回全国国際教育研究大会宮城大会を実に5年ぶりに対面形式で開催することができました。開催に向けて御尽力いただきました関係者の皆様に、改めて御礼申し上げます。

さて、変化の激しい予測困難な時代と言われる昨今、世の中では本当にこれまでに予想だにできなかったことが起きています。予想や期待を上回る「うれしい誤算」ならばまだしも、残念ながら望ましくない方向で期待を裏切られたり想定を超えたりするケースが増えているように感じます。少々手前味噌な意見になりますが、そのような時代だからこそ、教科の枠組みを超えて、様々な視点や知見から意見を出し合うことができる本研究協議会の存在意義は、今後ますます高まっていくべきであると考えます。

また、地球規模で貧困の根絶や格差是正、働きがい、環境保護など17分野の目標を2030年までに達成することを目指し、2015年に国際連合で採択された、Sustainable Development Goals (“SDGs”：「持続可能な開発目標」)は皆さんも御存じのとおりですが、世の中を、そして地球を持続可能なものにするために各自ができることに取り組むということは、地球に生きる者として私たち一人一人に課せられた責務であると思います。この“SDGs”に関して、ある新聞社が以前実施したアンケートでは『『きれいごと』が並んでいる』という意見もあったようですが、意識して取り組むことが必要であろうと思います。何もやらないより、まずは自分にできることから始める、という姿勢も大切な視点と言えるでしょう。

ところで、各地区では、多忙感や後継者不足等の理由により、本研究協議会の活動が停滞しているところもあると聞いております。会の持続可能な活動についての方策を探るために、小さな取組でも結構ですので、まずはできるところから始めていただきたいと思います。

結びになりますが、このような社会情勢の中、本研究協議会の活動に御理解をいただき、御支援並びに御協力をいただいております独立行政法人国際協力機構(JICA)をはじめ、一般財団法人日本国際協力センター(JICE)などとは今後も引き続き連携をお願いしていきたいと考えております。各都道府県、各校の活動がますます活発になることを切望し、巻頭言といたします。

# 第 61 回全国国際教育研究大会 宮城大会

「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。」  
～曇りなき心の月を先立てて浮世の国際社会を照らしてぞ行く～

## 1 大会趣旨

20世紀に2度の大戦を経て、誰もが恒久平和の実現を望んでいるはずなのに、21世紀になっても主権を巡る争いや経済的な利益の追求で不穏な空気がおさまることがなく、東欧や中東をはじめ世界各地で新たな紛争が勃発し、悲劇は続いている。また、感染症との闘い、地球温暖化への対策も人類に突きつけられた大きな課題であろう。これらの世界情勢や諸課題を前にして私たち教師は、国際理解教育を通じて生徒に対してどのような学習の機会を提供できるのか。また、どのような授業実践や指導が可能なのか。具体的に課題を取り上げてみたい。

本年は、日本でも多くの人々が一瞬にしてその日常を奪われてしまう悲しい大災害でスタートした。同じように13年前に大震災を経験した本県は、苦境から立ち上がるレジリエンスを発信できる県でもあり、2日目午後には仙台市内の震災遺構訪問も用意した。

現代に生き続ける伊達の文化が輝く街、仙台を訪ねていただき、その「粹」を五感で存分に堪能しながら貴重な大会としていただきたい。

2 主催 全国国際教育研究協議会

3 共催 独立行政法人国際協力機構 特定非営利活動法人全国国際教育協会  
東北地区高等学校国際教育研究協議会

4 主管 宮城県高等学校国際教育研究会

5 後援 外務省 文部科学省 宮城県 独立行政法人国際交流基金  
一般財団法人日本国際協力センター 公益社団法人青年海外協力協会  
株式会社国際開発ジャーナル社 宮城県高等学校長協会 宮城県教育委員会  
青森県教育委員会 岩手県教育委員会 公益財団法人宮城県国際化協会  
独立行政法人国際協力機構東北センター 公益財団法人仙台観光国際協会  
公益社団法人ユネスコ協会 公益財団法人日本教育公務員弘済会宮城支部

6 会期 令和6年8月1日（木）から8月2日（金）まで

7 会場 トークネットホール仙台（仙台市民会館）小ホール  
〒980-0823 宮城県仙台市青葉区桜ヶ岡公園4-1  
① 仙台市営バス「定禅寺通市役所前経由 交通局東北大学病院前」行き  
（JR仙台駅前60番乗り場より、約15分）「市民会館前」下車すぐ  
② 地下鉄南北線「勾当台公園」駅下車「公園2」出口から、徒歩約10分  
③ 地下鉄東西線「大町西公園」駅下車「西1」出口から、徒歩約10分

8 参加対象 全国国際教育研究協議会加盟校の教職員および生徒  
第61回全国国際教育研究大会宮城大会に出場する生徒・引率者および保護者  
国際教育（開発教育・国際理解教育等）に関心のある教職員・生徒・保護者等  
国際教育（開発教育・国際理解教育等）に関わる関係団体・企業等の担当者等  
国際ボランティア等に関係する教職員・生徒・担当者等

9 参加人数 来賓18 教員105 生徒111 保護者一般21 計255名  
\* オプションである震災遺構訪問については、41名 教育懇談会40名

10 大会日程

< 1日目 > 令和6年8月1日(木)

9:30 ~ 10:00	・受付
10:00 ~ 10:30	・開会行事 主催者挨拶 共催者挨拶 来賓挨拶 来賓紹介 功労者表彰 北海道教育大学准教授 石森 広美 様
10:45 ~ 12:00	・第44回高校生英語弁論大会 諸連絡
12:00 ~ 13:00	・昼食 / 休憩
13:00 ~ 14:00	・第24回高校生日本語弁論大会
14:20 ~ 16:10	・記念講演 「地球のステージ」桑山紀彦×「国際理解教育」石森広美 演題『平和のために私たちができることを考える』 講師 石森 広美 先生 (北海道教育大学 国際地域学科・地域教育専攻 准教授)
16:20 ~ 16:50	・講評 弁論大会審査結果発表 表彰式 記念撮影
16:55 ~ 17:55	・生徒：生徒交流会 (国際教育脱出ゲーム)

- 17:10 ~ 18:00 ・全国事務局長会議  
19:00 ~ 21:00 ・教育懇談会 江陽グランドホテル 翡翠の間

< 2日目 > 令和6年8月2日(金)

8:30 ~ 9:00	・受付
9:00 ~ 10:40	・第13回国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会
10:50 ~ 12:05	・生徒：交流会／ワークショップ 「平和のために今できること」 ファシリテーター 宮城県宮城野高等学校 齋藤 彰子 氏 聖和学園高等学校 佐藤 漸 氏
	・教員：教員による研究発表 青森県立大湊高等学校 南澤 英夫 先生 石川県立小松高等学校 福岡 輝樹 先生 兵庫県立神戸商業高等学校 藤井 三和子 先生 岩手高等学校 田中 佳恵 先生 宮城県宮城野高等学校 鈴木 幸恵 先生 愛媛大学付属高等学校 上床 孝樹 先生
12:20 ~ 13:00	・講評 生徒研究発表審査結果発表 表彰式 ・閉会行事 主催者挨拶 次期開催県挨拶 諸連絡 記念撮影

- 13:30 ~ 16:00 ・震災遺構 仙台市立荒浜小学校訪問 (希望者)  
\*昼食はバス中でとります。

11 来賓・役員一覧 (敬称略・順不同)

(1) 来賓

日下部 英紀	外務省国際協力局 審議官
富永 幸	文部科学省初等中等教育局教育課程課 外国語教育推進室 教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
佐藤 靖彦	宮城県教育委員会教育長
花立 大民	独立行政法人国際協力機構 東北センター所長

島田	潤悦	独立行政法人国際協力機構 東北センター 市民参加協力課
中村	稔	一般財団法人日本国際協力センター(JICE) 東北支所長
高田	幸一	特定非営利活動法人全国国際教育協会理事長
松本	光正	特定非営利活動法人全国国際教育協会副理事長
幸田	雅夫	特定非営利活動法人全国国際教育協会事務局長
高橋	賢	宮城県高等学校長協会会長
菊田	英孝	宮城県教育庁高校教育課長
菅野	麻美	宮城県教育庁高校教育課 主幹
山口	浩徳	公益財団法人宮城県国際化協会理事長
結城	由夫	公益財団法人仙台観光国際協会理事長
石澤	浩二	前宮城県高等学校国際教育研究会副会長

## (2) 役員

大会顧問	大泉	昌明	全国国際教育研究協議会会長 東京都立昭高等学校長
大会会長	藤垣	庸二	東北地区高等学校国際教育研究協議会会長 宮城県高等学校国際教育研究会会長 宮城県仙台東高等学校長
大会副会長	佐藤	弘人	宮城県高等学校国際教育研究会副会長 宮城県仙台二華高等学校長
	田淵	龍二	宮城県高等学校国際教育研究会副会長 宮城県富谷高等学校長
大会運営理事	坪	宏至	東北地区高等学校国際教育研究協議会副会長 青森県国際教育研究協議会会長 青森県立八戸西高等学校長
	寒河江	和広	東北地区高等学校国際教育研究協議会副会長 岩手県国際教育研究協議会会長 岩手県立水沢高等学校長
大会運営委員	高森	満雄	青森県国際研究協議会事務局長 青森県立名久井農業高等学校教諭
	高橋	慎二	岩手県国際教育研究協議会事務局長 岩手県立水沢高等学校教諭
大会実行委員	大内	一矢	宮城県富谷高等学校主幹教諭
	北村	孝之	宮城県仙台南高等学校主幹教諭
	鈴木	理恵	仙台城南高等学校主幹教諭
	青木	翔平	宮城県仙台二華高等学校教諭
	石垣	葵	宮城県角田高等学校教諭
	泉	賢太	宮城県仙台二華高等学校講師
	齋藤	彰子	宮城県宮城野高等学校教諭
	佐藤	漸	聖和学園高等学校教諭
	田村	勝太	宮城県石巻高等学校教諭
	塗田	宣幸	宮城県富谷高等学校教諭
	八島	美央	宮城県富谷高等学校教諭
	菅	憲史	宮城県仙台二華高等学校教諭
大会事務局長	山口	朋昭	東北地区高等学校国際研究協議会事務局長 宮城県高等学校国際教育研究会事務局長 宮城県仙台東高等学校教諭
大会事務局	曳田	雅史	宮城県仙台東高等学校教頭
	高橋	彩子	宮城県仙台東高等学校教頭
	門田	久美子	宮城県仙台東高等学校教諭
	菊地	聖子	宮城県仙台東高等学校教諭
	鈴木	拓	宮城県仙台東高等学校教諭

12 審査結果

【第44回高校生英語弁論大会】

賞名	学校名	発表者
外務大臣賞	宮城県仙台二華高等学校	齋藤 汐音
文部科学大臣賞	島根県立松江北高等学校	小澤 実里
国際協力機構理事長賞	愛知県立岡崎高等学校	加茂 拓真
国際交流基金理事長賞	八戸聖ウルスラ学院高等学校	岩淵 匡花
日本国際協力センター理事長賞	茨城県立下妻第一高等学校	小口 姫由
全国国際教育研究協議会会長賞	愛媛県立松山南高等学校	一宮 もこ
全国国際教育研究協議会会長賞	兵庫県立青雲高等学校	安齋 万結
全国国際教育研究協議会会長賞	長崎聖和女子学院高等学校	長嶋 理咲子
全国国際教育研究協議会会長賞	栃木県立宇都宮女子高等学校	岩月 絢咲

【第24回高校生日本語弁論大会】

賞名	学校名	発表者
外務大臣賞	東京都立科学技術高等学校	アラカシム
文部科学大臣賞	千葉県立幕張総合高等学校	寺内アンヘル・サクヤ
国際協力機構理事長賞	宮城県松山高等学校	アブラル・ラタジ
国際交流基金理事長賞	東京都立科学技術高等学校	エスパナ・マルカ・アルティア・フロレス
日本国際協力センター理事長賞	広島県立瀬戸田高等学校	デントーン・アンシャリー
全国国際教育研究協議会会長賞	福井県立足羽高等学校	ムニス・ビアンカ

【第13回高校生国際理解・国際協力に関する研究発表会】

賞名	学校名 団体名
国際協力機構東北センター所長賞	八戸聖ウルスラ学院高等学校 ジャンボ国際交流部
国際交流基金賞	愛媛県立東温高等学校 国際理解研究同好会
日本国際協力センター賞	宮崎カリタス学院都城聖ドミニコ学園高等学校 ボランティア部
全国国際教育研究協議会会長賞	翔凛高等学校
国際理解・国際協力奨励賞	宮城県宮城野高等学校 国際・語学ゼミナール
国際理解・国際協力奨励賞	兵庫県立神戸商業高等学校 生徒会有志

第61回全国国際教育研究大会 宮城大会 大会会長挨拶

令和6年8月1日(木)

皆様、おはようございます。宮城大会の会長を務めます、宮城県仙台東高等学校 校長の藤垣庸二と申します。よろしく願いいたします。

最初に、今年の1月に起きた能登半島地震、そして日本各地で起こっている豪雨災害、東北でもお隣の山形県や秋田県では大変な思いをしていらっしゃる方がおります。心よりお見舞いを申し上げます。

さて、新型コロナウイルスや自然災害の影響を受け、オンライン形式にならざるを得なかったこの大会でしたが、5年ぶりに対面での開催となりました。

皆様、ようこそ「杜の都仙台」にお越しいただきました。全国各地からお集まりいただき、誠にありがとうございます。

また、本日御多用の中、外務省国際協力局審議官 日下部 英紀 様、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 富永 幸 様、宮城県教育委員会 副教育長 遠藤 秀樹 様をはじめ、多くの御来賓の方々、審査員の方々に御出席いただいております。心より感謝申し上げます。

この宮城大会のテーマは、「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。」です。そして、御存じの方もいらっしゃると思いますが、仙台が誇る戦国武将、伊達政宗の辞世(じせい)の句、「曇りなき 心の月を先立てて 浮世(うきよ)の闇を照らしてぞ行く」から、「闇」を「国際社会」と変えてサブタイトルを設定させていただきました。国際社会が闇、というつもりではありませんが、現状を考えると、確かに「先の見えない」ものになっていると思います。その「先の見えない」国際社会で、これから活躍する高校生諸君の、抛り所のひとつとして、国際理解教育があってほしい、という願いを込めたものとなっております。

本日は、各ブロック予選を勝ち抜いてきた皆さんによる英語弁論、日本語弁論、そして「平和のために私たちができることを考える」と題しての記念講演会、ここに集まった生徒の皆さんの親睦を深めていただく生徒交流会。明日は、生徒の皆さんと先生方の研究発表会と、二日間にわたり行われます。この時代に、高校生として何ができるのか、どのような考え方を持たなければならないのか、一人の人間としてどのように生きていくのが望ましいのか、これらのことを考えるきっかけとなっていただければ幸いです。

結びになりますが、この大会に参加されたすべての皆様にとりまして、有意義な時間となることをお祈りいたしまして開会の挨拶といたします。二日間、どうぞよろしくお願いいたします。

【第61回全国国際教育研究大会 宮城大会 開会行事 主催者挨拶】

全国国際教育研究協議会 会長 大泉 昌明  
(東京都立昭和高等学校長)

挨拶に先立ちまして、本年1月1日に発生した能登半島地震で亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表するとともに、被災地の一刻も早い復興を祈念申し上げます。

ただいま御紹介をいただきました全国国際教育研究協議会会長の大泉昌明でございます。第61回全国国際教育研究大会宮城大会の開催にあたり、全国国際教育研究協議会を代表して、一言御挨拶申し上げます。

昨年5月に新型コロナウイルス感染症が法律上の分類で2類から5類に移行し、昨年の愛媛大会は4年ぶりの対面開催が計画されておりました。しかし、台風の接近に伴い、急遽オンライン形式での開催となったことから、今年度は実に5年ぶりの対面形式での開催となります。こうして皆さんと直接お会いしながらお話できますことを大変嬉しく感じております。

今大会のテーマは、「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。」であり、副題に「～曇りなき心の月を先立てて浮世の国際社会を照らしてぞ行く～」と掲げられています。変化の激しい予測困難な時代において、未だ争いが続く世界情勢や、いわゆる“global issue”等の諸課題に対して、平和を希求し実現するために国際理解教育を通じて何ができるかを改めて自分事として捉え、実践につなげていくことが重要であると考えます。私が今大会のテーマを初めて見た際に真っ先に頭に浮かんだ言葉は、“Think globally, act locally.”と“Think locally, act globally.”でした。「地球規模で考え、地域で行動する。」あるいは、「地域で考え、地球規模で行動する。」というこれらの言葉に表されるように、一人一人の地域行動から持続可能な社会を目指していかなければなりません。今日と明日の発表や様々な交流を通じて、参加者の皆さんが自分にできること、自分が果たすべき役割を見つめ直す機会としていただければ幸いです。

結びになりますが、本大会を開催するにあたり、本大会会長である宮城県仙台東高等学校の藤垣庸二校長先生をはじめとして、主管の宮城県高等学校国際教育研究会の多くの先生方の御尽力で本日ここにこの大会を迎えることができましたことに、感謝申し上げます。また、共催者である独立行政法人国際協力機構、特定非営利活動法人全国国際教育協会、東北地区国際教育研究協議会、さらには、後援をいただいている外務省、文部科学省、宮城県、独立行政法人国際交流基金、一般財団法人日本国際協力センター、公益社団法人青年海外協力協会、株式会社国際開発ジャーナル社、公益社団法人ユネスコ協会、公益財団法人宮城県国際化協会、公益財団法人仙台観光国際協会、公益財団法人日本教育公務員弘済会宮城支部、宮城県高等学校長協会、宮城県教育委員会、青森県教育委員会、岩手県教育委員会など、多くの諸機関の皆様方から、日頃より本会の活動に御支援と御理解をいただいていることに厚く御礼を申し上げて、御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

第 61 回全国国際教育研究大会 宮城大会 開会行事 共催者挨拶

独立行政法人国際協力機構（JICA）東北センター所長  
花立大民

ご紹介いただきました JICA 東北センター所長の花立大民でございます。共催者を代表してご挨拶申し上げます。

本日、明日と 5 年ぶりの対面による「第 61 回全国国際教育研究大会宮城大会」が開催されますこと、たいへん嬉しく思います。

本大会の開催にあたり、ご尽力されました主催の全国国際教育研究協議会、主管の宮城県高等学校国際教育研究会をはじめ関係の皆様にご敬意と感謝を表します。

また、弊機構が実施しております JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストにおいて、応募勸奨や審査員のご協力・ご支援を頂きましたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。

今、世界は平和の祭典、パリ・オリンピックが開催されています。その一方で、国内においては本年 1 月の能登地震をはじめ、7 月には秋田県、山形県における大雨・洪水等の自然災害、また海外では引き続きウクライナとロシアをはじめとした世界各地での紛争・衝突が発生しており、手放しには喜べない状況となっています。被災地の復興を願いつつ、また被害にあわれた方への哀悼とお見舞いを申し上げます。

一方、2020 年からのコロナ禍を経て、国内には多くの外国人が旅行者として、あるいは労働者として入国してきています。その数は年々増えています。また、エネルギーをはじめ、多くの食料を海外に依存している日本において、世界との繋がりがなくして日本社会が成り立たないことは、意識の高い会場の皆様であれば申すまでもございません。世界各国との協調・連携が一層求められ、また日本社会においても、国際協力の重要性に関する理解や外国人との多文化共生社会の実現がますます必要となっています。

こうした中で、今年、日本の国際協力、政府開発援助（ODA）を開始してから 70 周年を迎えました。これからの国際協力がどうあるべきか、未来の国際協力の主人公は誰なのかと考えた時、やはり次世代を担う若い人たちのご理解と参加が不可欠です。本日もご参加の高校生の皆様ますます日本や世界の課題に対する考えを深め、行動していく力を伸ばし、これからの世界を担う若者として活躍されることをご期待申し上げます。

終わりになりますが、JICA は、国際理解教育のための国際協力出前講座、JICA 海外協力隊など、皆様が国際協力に一層の理解と参加ができる事業を行っております。本大会を通じて、国際協力への理解がさらに深まるとともに、将来を含めて、皆様の国際協力への参加の後押しとなることを願い、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 【第61回全国国際教育研究大会 開会行事 来賓挨拶】

外務省国際協力審議官 日下部英紀

第61回全国国際教育研究大会仙台大会の開会に当たり、御挨拶を申し上げます。高校生の皆さんにとって、成果を発表する貴重な場となる本大会が開催されることを、心より喜ばしく思います。発表者の皆様には、是非、これまで取り組んできた成果を存分に発揮していただきたいと思います。また、国際教育の推進に日々取り組まれている全国の教員の皆様に、心より敬意を表します。

現在、気候変動を始めとする地球規模課題の深刻化に加え、ウクライナ侵略や中東情勢など様々な危機が複合化しています。多くの資源・食料等を輸入に頼り、輸出が日本経済の柱の一つになっている日本にとって、世界の問題は決して他人事ではありません。昨年改定された開発協力大綱にも記載されていますが、地域の安定やグローバルな課題へ対応する政府開発援助（ODA）は、国際益と言われる国際社会の平和と安定に寄与しているのみならず、日本の繁栄や安定という国益にも直結しています。

今年は、1954年に日本がODAを開始してから70年目を迎えます。その間、国際協力の歩みが日本の平和と安定を支えてきました。ODAを通じて多くの開発途上国の発展に尽力してきた実績は、日本の信頼と成長につながっています。現下の経済財政状況のなか、ODAについて国民の方々から厳しい意見も寄せられていますが、本日ご参加の皆様には、是非、その意義を理解していただければ幸いです。

今次大会は、「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。」をテーマに実施されると伺っております。国際協力70年の節目の年に、日常でも世界とつながりながら生きている私たち一人一人が、日本の未来のために共にできることを考え、世界の平和につながる一步を共に踏み出す機会となることを願いつつ、私からの挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 【第 61 回全国国際教育研究宮城大会 開会行事 来賓挨拶】

文部科学省初等中等教育局教育課程課外国語教育推進室 教科調査官  
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官  
富永 幸

第 61 回全国国際教育研究大会及び第 44 回高校生英語弁論大会・第 24 回高校生日本語弁論大会が開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

昨年度は、4年ぶりの対面開催が計画されていました。しかしながら、台風接近に伴い、急遽、開催形式を変え、オンラインで実施されることとなりました。

参加されるみなさんが日々考え実践してきたことを発表する機会や、自分自身の体験を踏まえ考えたことを英語や日本語で伝える機会を作っていたいただいた多くの関係者に敬意を表します。

記念すべき第 61 回大会のテーマは「「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。」～曇りなき心の月を先立てて浮世の国際社会を照らしてぞ行く～」です。これは、昨年 6 月に閣議決定されました第 4 期教育振興基本計画の大きな二つのコンセプト、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」にもつながります。グローバル社会における国際交流活動、例えば、海外留学や外国人留学生の受入れ、地域社会の国際化、多文化共生の機会などは、ウェルビーイングの向上に資すると考えられています。

世界中の誰もがウェルビーイングを感じられる社会について考え、どのように創っていくのか、また、それをどう持続させていくのか。この宮城大会は、参加する高校生が、自分自身の経験や考えを語り、それらを互いに聞き合い、皆で考え、行動に移していける仲間を増やす、そのような素晴らしい大会になることと確信しております。

最後になりましたが、本大会主催の全国国際教育研究協議会、共催の独立行政法人国際協力機構並びに特定非営利活動法人全国国際教育協会、宮城県・宮城県教育委員会・本大会の主管である宮城県高等学校国際教育研究協議会の皆様をはじめ、本大会の開催準備・運営に御尽力くださいましたすべての皆様に感謝を申し上げます、挨拶といたします。

## 第44回 高校生英語弁論大会 開催要項

- 1 目的 将来を担う高校生が、国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動などに関する主張を英語で発表することにより国際教育への興味・関心を高めるとともに国際感覚豊かな高校生の育成を目指すことを目的とする。
- 2 日時及び日程 令和6年8月1日(木)(大会第1日)
- 3 会場 トークネットホール仙台(仙台市民会館) 小ホール(宮城県仙台市青葉区)
- 4 大会規定 TEL 022-262-4721

### (1) 弁論内容

弁論内容は、国際理解・国際交流・国際協力・国際ボランティア活動等に関するもの。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。国際協力、国際交流などに関する生徒自身の体験(授業や部活動などで学んだことや主体的に調査研究した事柄も含む)を通じて考えたことや、地球環境や世界平和などに関して自分の考えを英語で弁論することが望ましい。在外経験や留学体験のある生徒は、その経験や感想にとどまらず、自分の経験と諸問題などと関連させた弁論を行うことが望ましい。

### (2) 参加資格(以下のすべての条件を満たしていること)

- 各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校ならびに中等教育学校の生徒
- 各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
- 英語を母語としない生徒、または日常生活で英語を使用していない生徒。英語を母語としない生徒。かつ、英語による学校教育を原則3年以上受けていない生徒。

### (3) 参加者

各ブロックの代表1名(関東甲信越静地区は2名)及び開催地区の代表1名計9名。  
ただし欠員が生じた場合は、各ブロックの次点など大会事務局で調整する。

### (4) 弁論時間

4分30秒以上、5分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象となる。

### (5) 発表方法

- 小道具は使用せず、ジェスチャーや声などを使って工夫するものとする。
- 発表時には、原稿を持ち込まないこととする。
- 原則として、発表内容は提出済の発表原稿と同一内容とする。

### (6) 審査内容

次の項目を総合して審査する。

【論旨 70点】 テーマの選択(10点)・文章構成(20点)・内容の独創性(20点)・説得力(20点)

【態度 15点】 姿勢(5点)・視線(5点)・熱意(5点)

【音声 15点】 声の大きさ(5点)・発音(5点)・流暢さ、抑揚、リズム(5点)

### (7) 表彰

外務大臣賞	(1名)
文部科学大臣賞	(1名)
国際協力機構理事長賞	(1名)
国際交流基金理事長賞	(1名)
日本国際協力センター理事長賞	(1名)
全国国際教育研究協議会会長賞	(若干名)

### (8) 審査員

外務省	日下部英紀 様
文部科学省	富永 幸 様
独立行政法人国際協力機構(JICA)	花立 大民 様
一般財団法人日本国際協力センター(JICE)	中村 稔 様
宮城県教育委員会	菅野 麻美 様
公益財団法人仙台観光国際協会	テシアロウ 様

## 英語弁論【外務大臣賞】

### The Knowledge Is Mightier than the Medicine

宮城県仙台二華高等学校 2 年次 齋藤 汐音

Stop, don't drink that! I glanced at the brownish water I had just washed my hands in. This happened last summer when I visited Tanzania as a medical volunteer for two weeks. The program, which was conducted with volunteers from all over the world, included providing necessary medicine to the indigenous Maasai tribe under the direction of a doctor. I was eager to support them by providing medicine.

Before the activity, I was given a bucket of brown water to wash my hands. At first glance, I was uncomfortable washing my hands in it. But right after I washed my hands, the children rushed over with their cups and began drinking the water that had now become even dirtier! They had no fear of drinking dirty water because of their concept of hygiene, and this shocked me.

I spent all night thinking what I could do to change their mindset. It is important to provide medicine, but preventing them from getting sick in the first place is more important, isn't it? Unless they gain the proper knowledge of hygiene, they will not question drinking the water someone has washed their hands in! To change this situation, they need correct knowledge. I asked my group members if they would be willing to educate them using our free time. Everyone realized the importance of education and agreed with me, so I asked the manager if we could do so. I'm usually too shy to be a leader, but I could not help but take action.

To my delight, we were given the opportunity to teach the children at a Maasai school about the importance of hygiene. We also demonstrated the proper way to wash hands. I was relieved to see the children working so hard to wash their hands as we taught them. Later on, the mothers asked us to teach them first aid, so we made a poster under the supervision of a doctor and taught them. These mothers were eager to learn, and I knew that they were seeking knowledge. My group and I were able to see that our work was essential.

But it's not only people living in Africa who need correct knowledge, we need it as well. A good example would be COVID-19. For several years we feared COVID-19 as something unknown. But didn't we stop fearing it unnecessary once we knew how to treat it correctly?

I believe knowledge has great power. Unfortunately, necessary knowledge is not easily conveyed to developing countries. I believe that true international cooperation means that the world shares correct knowledge and works together to solve problems. Education is necessary for this. Last month I got an email from the teacher. The children continued to wash their hands as we taught them, even after I left. I was thrilled that my actions could make a difference in the children's concept of hygiene. Before going to Tanzania, I thought that providing medicine would be the best support they needed, but I have come to realize that what they really need is the right knowledge. With the correct knowledge, they can prevent themselves from getting sick. The knowledge is mightier than the medicine.

Proper education still hasn't reached many areas in the world. I believe we are now called upon to play an important role in educating such areas. In the future, I would like to become a medical doctor and be involved in improving the medical environment in developing countries. I also want to spread the correct concept of hygiene by involving volunteers from all over the world, as I did this time. Change doesn't happen overnight, but if we all take a small step forward together, it will surely be a great help. We mustn't leave anyone behind.

#### 【発表要旨】

タンザニアで子供が不衛生な水を飲む場面に遭遇した。今まで物資の供給が支援に繋がると思っていたが、彼らの衛生概念を変えることが先決だと思い衛生教育を行った。正しい知識を得ることは彼らが病気になることを防ぐだけではなく、私たちが安心して生活するためにも必要不可欠であり他人事ではない。真の国際協力とは、世界中が正しい知識を共有し協力して問題解決することだと思う。変化はすぐには起こらないが、皆で一步を踏み出せば必ず大きな力になる。誰も置き去りにしてはならない。

## 英語弁論【文部科学大臣賞】 Feel the Words Feel the World

島根県立松江北高等学校 2年 小澤 実里

Today, more than 6000 languages are used in the world, and because of globalization, learning foreign languages has become more necessary than ever. For example, we started learning English in elementary schools, and many adults take English lessons on weekends for their careers. Learning foreign languages may be a little bit tough because we have to remember the meanings of a huge amount of vocabulary. However, there are things we should focus on than the meaning of the words.

Speaking of my experience, I moved to the US when I was three, and stayed there for about three years. Since I was little, my parents let me enjoy various events. It was quite an experience. On Halloween, I went door to door trick-or-treating with my friends and family. Everyone, even teachers wore awesome costumes and houses were dressed up like a haunted house. If I hadn't experienced it in the US, how could I know about the extremely exciting mood of it? I wouldn't be able to feel everyone enjoying the event fully, regardless of gender and age. As they say, seeing is believing. There are things we can know only by feeling them.

When I came back to Japan, I started participating in a recitation speech contest. At first, it was to only maintain my English skills, but I began to realize something very important.

At the contest, we recount ghost stories translated into English by Lafcadio Hearn. Lafcadio Hearn, who loved Japan, was told many ghost stories by his Japanese wife. He translated them into English for foreigners, and published a book about it. Most of his stories are written in English, but important parts and lines are still in Japanese. For example, last year, I read a story called "The Eater of Dreams." It is a story about a man who had a terrible nightmare. He begs a yokai, Baku, to eat his dream. In this story, there is a line like this: "Baku kurae! Baku kurae! Devour, O Baku! Devour the dream!"

The word "kurae" has the same meaning as eat or gobble. However, he didn't translate this word into English. How come? I think he wanted to cherish the atmosphere that comes from the unique sound of Japanese language. For him, words were not just a tool to convey information. I agree with him very much. Most Japanese people focus on translation, and forget the importance of enjoying foreign words. There are many things we can feel from words. From the sound, atmosphere, and lots of others. Foreigners enjoying Japanese Kabuki is a perfect example. Even if they can't understand Japanese, they enjoy Kabuki for its unique intonation and the emotions expressed in Japanese words. The same for us, we must turn our eyes to feeling the words.

Words are not just tools for communication. Words have their own features and sounds. Words carry the speaker's feelings, personality, culture, and more. Stop just looking up the words in the dictionary. Don't just care about the grammar. Feel the words. Feel the sound. Feel the rhythm and the emotions behind it. This will lead us to thinking and understanding the world. Feeling foreign words is feeling the world. Feel the words, feel the world.

### 【発表要旨】

世界中にはいろんな言語があり、最近ではグローバル化によって外国語を学ぶことの必要性が非常に高まっている。小さいころにアメリカで過ごした経験などを通して、外国語を学ぶ上では言葉の意味だけではなく、言葉の持つ雰囲気や音、話し手の意図や思いなどを感じる事が大切だと気付いた。言葉を感じることは世界を感じる事である。

## 英語弁論【国際協力機構理事長賞】

### What Lies Beneath

愛知県立岡崎高等学校 2年 加茂 拓真

In a long dark cave, stood an 8-year-old boy. He queued up curiously ahead but too many legs were in his way. The boy was waiting in line for one of his favorite rides, the Indiana Jones adventure. Green lasers and blazing fires were everywhere. The boy's mind was full of the ride. In front of him were jeeps being readied for the passengers. Finally, it was his turn! But the cast members, instead of beckoning him, they kept selecting the white boys and girls behind him. This was my first clear experience of racism.

My family moved to California when I was six. Life in the States was great. Delicious foods, big buildings, beautiful beaches, and - best of all - my friends were there including Tom and Nina. We had so much fun. At every recess, we would go straight to the ball box and play soccer, basketball and dodgeball. After school, Tom and I would play Clash Royale. Sometimes, I went to Nina's house and played Nerf guns till sunset. Tom's parents were from the UK, Nina's father was from the Czech Republic and her mother was from Japan. Now that I think of it, the Golden State of California was a melting pot. I was surrounded by people from Mexico, Peru, UK, Czechoslovakia, Vietnam and Japan. But Tom was just Tom. Nina was just Nina.

All throughout my ride, I kept asking to myself, "Are the whites better than me? Did I do something wrong?" It was a new insignificance-as though I suddenly went from being the main character in a movie to an extra.

Racism makes people less human. It strips us down to 150 genes responsible for skin colors and ignoring the other 22,750 genes. We lose so many things; our abilities, our interests, our self-identity. We lose what sets us apart from the 8 billion other humans on this planet. Is it any wonder that racism destroys the mind? Social scientists have long documented how racial trauma often induces its victims to act as racists in return.

This is what happened to me. Months after that fateful day, whenever I met new people, I would check their skin color. I always thought the whiter their skin, the more respect they shall deserve. I even started sorting out my friends accordingly. I spent most of my free time with Tom, the others had to wait for their turn. I knew I was doing the same thing as the cast members did. But I couldn't stop. I just thought it was something natural to do without a doubt.

My crucial moment came. It was the day when my third-grade teacher introduced me to Martin Luther King Jr. Dr. King was a new type of "action" hero: Instead of fighting for buried treasure, he fought for freedom of African Americans. I will never forget what my teacher said at the end of the class. "Don't look at other people's skin colors. Look at their great personalities in each person." Her words hit home: I was hurting my friends as deeply as the cast members hurt me. Since then, her word has been a treasure to me.

Is it fair to judge people by how much melanin they were born with? No. So, let's be fair. Let's look inside. Look at what they really are.

There was a new Indiana Jones movie that came out. In Dial of Destiny, Indiana fights for an artifact which can change the history. If I could travel in time, I would find that 8-year-boy noticing the fear of racism and say to him, "In life, you will meet many people who think skin color is everything. They might say Asian skin colors are filthy. But don't fear their judgment. And never follow their example. Also, think what you can pass down to the next generation, for eliminating racism from this world. If you don't tell them what racism really is, nothing will change. As someone who has experienced both, being discriminated and being racist, I think there is much to tell. Lastly, my message to you. Treasure your skin and -even more valuable- what lies beneath."

#### 【発表要旨】

私が初めて人種差別を明確なものとして経験したのは8歳の時だ。大好きな遊園地での出来事で、とてもショッキングだったのを覚えている。この経験をきっかけに、当時の私は「肌の色」が人の全てであるかのように思うようになり、気づけば他者を肌の色で判断するようになっていた。しかし小学校3年生の時の担任の先生の言葉を聞いて、本当に大切なものの存在に気づくことができた。

## 英語弁論【国際交流基金理事長賞】

### One Step at a Time

八戸聖ウルスラ学院高等学校 3年 岩淵 匡花

“Do you know what you want to be in the future?” This is something I wish I could answer right now. Unfortunately, for the time being, I cannot respond to this question because I have no clear idea of what to do with my life yet. I had always felt inferior when I was trying to find a specific goal for my future, saying to myself, “My friends are striving for their dreams, but am I going to stay undecided about my future?” I was at a loss for what to do, but some amazing people I met in the US changed my perspective on how I think about myself. Now, I’ve realized having no dreams is not a weak point. Instead, now I’m sure I have millions of possibilities.

This summer, I participated in a study program in San Francisco. In the program, we had the opportunity to hear many stories from some entrepreneurs in Silicon Valley, as well as people from Japan working there. Then, I realized that those who I met there had one thing in common. They were all absorbed in “what they love.” At first, it made me self-conscious because they all seemed to be so sure of what they were doing. I assumed that they knew exactly what they wanted to be from a young age.

However, when we visited the headquarters of Google, a world-leading company, I had the chance to ask one of the employees for advice about my future. He said to me, “Many people feel that life is a race, where they must run to the finish line. However, many people forget to look sideways to appreciate what’s around them and cultivate what they find, so they can expand their future when the right opportunity appears!” He also said that the workers at Google have time given to them to pursue their own interests. He explained that experiencing a field that is different from their own, the workers can learn about different specialities and expand their field of expertise. On top of that, many workers had the option to permanently change their position. I felt like I was given a push when I learned that even Google employees, some of the most brilliant people in the industry, could be feeling the same way I am feeling.

Now, as a leader of a student organization, I’m using what I learned in Silicon Valley, and my passion for English learning. I led an English conversation learning event, where any student in Aomori prefecture could interact with foreigners living in the Misawa Air Base. By creating unique fields that local students can join, I hope more and more students like me can find something that inspires them.

The world is full of landscapes I have never seen, and people with ideas I have never thought of are waiting for me. I have not decided on my dream for the future yet, but I have come to believe that by expanding my own world, my future will surely be fulfilled in ways I cannot imagine now. We have to take the time to appreciate what is around us. Remember, your dreams do not have a deadline; let’s live each day one step at a time.

#### 【発表要旨】

将来、就きたい仕事が決まらない私は、夢に向かって突き進む友人達に対して劣等感を感じていた。そんな中、アメリカのシリコンバレーで出会った人々から「周囲と競うのではなく、興味を持ったことを掘り下げ続けると、可能性は無限に広がる」と教えられた。帰国後、学生団体のリーダーとして、地元の学生たちが英語を使って世界を広げられるイベントを企画する中で、これからの等身大で好きなことに全力で取り組み、将来に向かって一歩ずつ進んでいくと決意した。

## 英語弁論【日本国際協力センター理事長賞】

### The Power of Creating Connections with Tourists in Ibaraki

茨城県立下妻第一高等学校 2年 小口 姫由

Imagine lying in a huge field of light-blue flowers under a clear sky. Hear the flow of a waterfall as refreshing mist kisses your skin. Breathe clean air as you climb a mountain before plunging into a relaxing hot spring. Breathtaking, isn't it? These are just some of the amazing experiences my homeland, Ibaraki, has to offer. You may already know that, to Japanese people, our prefecture is ranked the least attractive year after year. But did you know that from a foreigner's perspective, we actually rank much higher, about twentieth? This is a clear indication that Ibaraki captivates a lot of foreign visitors. My dream is to work in the tourism industry and help make Ibaraki a popular international travel destination by attracting more visitors to my beloved homeland.

The solution to attracting more tourists is a seemingly simple one: create intimate connections through face-to-face communication. I came up with this idea during my family's second trip to Gunma Prefecture. When we checked into our hotel, the staff told us, "Welcome back. Please enjoy your second stay." It was heartwarming to hear. She didn't mindlessly repeat some robotic set phrase. She remembered us and made us feel welcome. Afterwards, I said to myself, "I want to stay here again one day!" If we take the time to make a personal connection with tourists, they will have positive feelings towards Ibaraki and want to come back many times. These connections could be the spark that ignites a mutual love and respect for each other's countries and could fuel international relations.

In certain parts of Japan, such as Kyoto, there are already unmanageable floods of tourists. This is called overtourism and it can cause a lot of problems for local communities. However, if more people knew about the breathtaking scenery that Ibaraki has to offer, they might decide to stay here instead and it could help ease the stress of tourism in crowded spots. Another possible solution to fight overtourism is an app that uses AI to track peak visiting hours at popular tourist destinations and suggests less crowded times to go. This app would also have rules and customs of Japan, such as the proper ways to dispose of garbage, written in eleven different languages.

Sure, apps are a great tool for sharing information, but I've found that face-to-face communication and not some robotic set phrase, is the key, not only to inviting more tourists to Ibaraki, but also in helping communities fight overtourism. A simple willingness to communicate can go a long way in making people feel welcome in Ibaraki. For example, my grandfather is a car repairman. He works with a lot of foreign customers. His English is not good, but he always kindly talks with them. For this reason, his customers feel welcome and come back to his shop anytime they need repairs. If we can be brave enough to just try and communicate with foreigners, even if our communication isn't perfect, it can go a long way in making visitors feel welcome enough to come back to Ibaraki many times.

I will do my best to be like my grandfather and make a personal connection with foreigners. Personal connection allows people to share their cultures and feel a sense of belonging with each other. If we can have face-to-face communication with foreigners and create that sense of belonging, we can work together with them to fight overtourism and its problems. So, let's be brave and connect with someone new today! You never know, you could make a personal connection that shares the beauty of Ibaraki with the world and turns our beautiful home into a popular tourist destination.

Thank you for listening.

#### 【発表要旨】

私の住む茨城県は、都道府県の魅力度ランキングで毎年ほぼ最下位である一方、外国人向けの行きたい県ランキングでは上位にある。私の夢は旅行業界の職に就き、茨城を世界有数の観光地にすることである。京都などにみられるオーバーツーリズムがもたらす深刻な問題の解決策としてぜひ叶えたいと考える。そのための秘訣は何か。便利になったAIは有効に活用しつつ、やはり人と人との心のこもったコミュニケーションに尽きる。AIの活用で便利に旅行ができる今だからこそ、笑顔でもてなし、茨城の良さを世界に広めていこう。

## 第24回 高校生日本語弁論大会 開催要項

- 1 目的 将来を担う高校生が、国際理解、国際交流、国際協力、国際ボランティア活動などに関する主張を日本語で発表することにより国際教育への興味・関心を高めるとともに国際感覚豊かな高校生の育成を目指すことを目的とする。
- 2 日時及び日程 令和6年8月1日(木) 大会第1日
- 3 会場 トークネットホール仙台(仙台市民会館) 小ホール(宮城県仙台市青葉区)  
TEL 022-262-4721
- 4 大会規定
  - (1) 弁論内容  
弁論内容は、国際理解、国際協力、異文化理解、多文化共生に関すること。演題は自由。高校生としての主張を含み、未発表原稿であること。単なる感想や異文化体験でなく、本人の体験を通して、態度や行動に変容があり、多文化共生のための国際相互理解を深める視点や地球的な視点で述べられている弁論が望ましい。
  - (2) 参加資格(以下のすべての条件を満たしていること)
    - 各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校ならびに中等教育学校の生徒または留学生
    - 各都道府県の国際教育研究協議会及び各ブロックにおける選考会を経て選出された生徒
    - 加盟校に在籍する外国籍の生徒または日本語を母語としない生徒または日常生活で日本語を使用していない生徒。在日期間が8年以内の生徒。
  - (3) 参加者  
各ブロックの代表1名(関東甲信越静地区は2名)および開催地区の代表1名計9名  
ただし欠員が生じた場合は、各ブロックの次点など大会事務局で調整する。
  - (4) 弁論時間  
4分30秒以上、5分以内であること。ただし、時間に満たない場合および時間を超過した場合には減点の対象となる。
  - (5) 発表方法
    - 小道具は使用せず、ジェスチャーや声などを使って工夫するものとする。
    - 発表時の原稿の持ち込みは問わない。
    - 原則として、発表内容は提出済の発表原稿と同一内容とする。
  - (6) 審査内容  
次の項目を総合して審査する。  
次の項目を総合して審査する。  
【論旨70点】 テーマの選択(10点)・文章構成(20点)・内容の独創性(20点)・説得力(20点)  
【態度15点】 姿勢(5点)・視線(5点)・熱意(5点)  
【音声15点】 声の大きさ(5点)・発音(5点)・流暢さ、抑揚、リズム(5点)
  - (7) 表彰  
外務大臣賞 (1名)  
文部科学大臣賞 (1名)  
国際協力機構理事長賞 (1名)  
国際交流基金理事長賞 (1名)  
日本国際協力センター理事長賞 (1名)  
全国国際教育研究協議会会長賞 (若干名)
  - (8) 審査員  
外務省  
独立行政法人国際協力機構(JICA)  
一般財団法人日本国際協力センター(JICE)  
宮城県教育委員会  
公益財団法人仙台観光国際協会  
日下部英紀 様  
花立 大民 様  
中村 稔 様  
菅野 麻美 様  
テシアロウ 様

## 日本語弁論【外務大臣賞】

### 幸福の国アラビア

東京都立科学技術高等学校

2年 アラ・カシム

皆さんは『幸福のアラビア』はどこの国を指すか知っていますか？知らない人は、多いかもしれません。しかし、「モカコーヒーを知っていますか？」と聞くと、ここにいるほとんどの方は知っているでしょう。「モカコーヒーと幸福のアラビアは、どんな関係があるの？」と思うかもしれませんが、実際に関係があります。

ここで、二つ目の質問です。モカコーヒーのモカの名前の由来を知っていますか？「モカ」とはアラビア半島のイエメン共和国の港の名前で、コーヒー発祥の地域です。イエメンは中東アジアのアラビア半島にあり。モカという港が、アラビア半島の南西端、紅海にあります。そこが私の出身地です。私は5年程前に日本に來日しました。

私は、來日してすぐに、日本とイエメンの共通点をたくさん見つけました。一つ目は、地理的に見ると日本は島国であり、沿岸国です。イエメンもまた、沿岸国であり、海岸線の長さは2400kmに及びます。日本では寿司や海産物が好まれているように、イエメンでも海産物が重要な食材として食卓で親しまれています。特にモファという料理は人気です。また、コーヒーを好んでいる人も多いのが共通点です。

二つ目は、日本人が芸術を愛するように、イエメン人も同様に芸術に対する情熱を持っています。多くの世界遺産は、多大なる芸術家たちによって残されました。

三つ目は、イエメンでは、多くの車が日本製であり、そのほとんどがTOYOTA製です。実際にイエメンを訪れると実感できます。四つ目は、政治の仕組みです。日本が民主主義国家であるように、イエメンも民主主義を採用しています。

こんなに多くの共通点を挙げましたが、残念ながら1つだけ全く異なることがあります。それは『平和』です。「幸福のアラビア」は、今はもう幸福ではありません。今やイエメンは世界で最も悲惨かつ残酷な状況に置かれています。2019年国際連合広報によると、イエメンの状況は世界最大の人道危機に直面しています。80%以上の人は、貧困状況にあり、そうなった原因は、テロ組織フーシ派民兵組織です。テロ組織フーシ派は、政府に対して武力衝突を起し、この戦争を始めました。2014年には、首都であるサナアを占領しました。他にも、国家機関や学校、大学を占領して、軍事的なバラックにしていきました。占領されている場所では、教育を受けられる機会が奪われ、それにより、何百万人の子供たちが教育を受けることができなくなりました。また、国際人権団体によると、テロ組織フーシ派民兵組織はそんな子供たちをフーシ派民兵組織に強制的に属させ兵士をさせています。本当に辛い状況です。そんな環境の中で、日本や色々な国々がイエメン人のためにたくさんの人道支援をしてくださっていることにこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。

私は一刻も早くこの戦争が終わってほしいです。今は、辛いです。でも、日本が1945年に広島市や長崎市への原子爆弾を落とされ、辛い戦争を乗り越えて、こんなに平和で豊かな国になったように、イエメンも今の辛い状況を乗り越えて発展していくことを心から願っています。「幸福のアラビア」とまた呼ばれる日まで。ご清聴ありがとうございました。

## 日本語弁論【文部科学大臣賞】

### 多文化共生を身近なものに

千葉県立幕張総合高等学校 3年 寺内 アンヘル サクヤ

ご覧の皆様ありがとうございます。

皆さんは「多文化共生」という言葉を知っていますか。総務省は、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義しています。つまり、自国以外の国の文化を理解しようと努め、一人ひとりの違いを認め合い、互いに協力し合って豊かな地域社会にして生きていこうとする考え方のことです。日本の総人口の約2%は外国人であり、厚生労働省が発表した外国人雇用状況によると2022年10月時点で約182万人と前年度に比べ5.5%も増加しています。多文化共生はこれからの日本の未来に必要な不可欠になっていく取り組みで、私たちはこれに対してしっかりと考えていく必要があるといえます。

では、実生活において私達家族が多文化共生を推進するために大切にしていることを具体例とともに紹介したいと思います。私の父はエルサルバドル人で母は日本人です。エルサルバドルは中央アメリカ中部に位置し、グアテマラ、ホンジュラスと国境を接し、南は太平洋に面しています。日本の九州の約半分の国土に約649万人が暮らしており、公用語はスペイン語、宗教はカトリックです。両親は2003年に国際結婚をしてから20年間「我が家流文化」を構築してきました。

私は日本で生まれましたが兄はエルサルバドルで生まれました。そのため、兄は洗礼式を受けていますが私はしていません。けれどお宮参りはしてもらいました。洗礼式とは、イエス・キリストと一体となることを象徴する儀式で、兄はサンタアナ大聖堂で水を頭に注ぐという灌水礼をしました。一方、お宮参りとは赤ちゃんが無事に生誕1か月目を迎えたことを産土神（うぶすながみ）に感謝して氏子として祝福を受ける神道にまつわる行事です。両親は互いの宗教の違いを障害ではなく尊重すべきものと捉え、生まれ落ちた国の習慣を大切にしてきました。

また、日々の生活の中で工夫していることもあります。エルサルバドルの習慣である「愛や感謝をはっきり言葉で表現すること」や「ハグなどのスキンシップ」を取り入れ「家では靴を脱ぐ」「食事の前にはいただきますと感謝する」という日本の習慣を採用しています。とある日はトルティーヤを焼き、次の日にはおでんや手巻き寿司を楽しむ等、食文化もとても豊かです。そして、エルサルバドルの郷土料理のププサは通常手で食べるけれど箸で食べるか手で食べるかは、個人の自由です。互いの違いを非難・否定し合うのではなく「柔軟性をもって理解すること」そして「誇りをもって分かち合うこと」これがうち流の新しい文化であり習慣なのです。そして、それぞれの文化に優劣をつけない思いやりの心こそが抗争や戦争を回避する平和への鍵だと思います。

今の私ができること。それは、メッセンジャーとして自分の体験を語り、人々の気づきのきっかけになることです。この弁論大会も私の活動のひとつです。多文化共生とは「自分たちの文化を失ってしまうことではなく、自分たちとは異なる文化を融合させて新しい文化を創造していくこと」その実り豊かな可能性に目を向けることだと、私は思います。そして「こうあるべき」という考え方を捨てお互いを尊重し誰もが安心して過ごせるような世界の実現を目指しましょう。

## 日本語弁論【国際協力機構理事長賞】

### 異文化交流と自己成長

宮城県松山高等学校 2年 アブラル ラタジ

皆さんは、海外の人に自分の文化を説明できますか？ 誰かに母国の文化について伝えようと、とてもうれしく感じますが、私は日本に来てから人前に立って母国の文化について伝える機会がほとんどありませんでした。しかし、高校生になってからこのような機会を与えてもらいました。高校一年生の時、初めて外国人による日本語弁論大会に挑戦しました。「この弁論では今までの自分の経験を伝えるよ」と言う先生の言葉を聞いて、私は何も考えずに挑戦したいと思いました。

中学校一年生の時に国語の授業で弁論を書いてみましたが、当時日本語がわからなくて、うまくまとまりませんでした。ですから、高校生になってまた弁論に挑戦することができ、今回はうまく自分の経験を日本語で伝えられてとても嬉しかったです。しかし、イントネーションを正しく使うことはとても難しかったですし、まだ自分のベスト尽くせていませんでした。

次に母国の文化について伝えられたのは文化祭です。私は兄と共に母国である「パキスタン」の結婚式について発表しました。そして、パキスタンの文化を紹介したポスターも作りました。全校のみんなに自国の文化の伝統や習慣について伝えることができました。全校生徒の前で発表することはとても思い切ったチャレンジでした。言い間違えたり、引っかかったりした時もありましたが、他の生徒や先生たちに異文化について理解してもらうことができました。そして、発表部門で賞を取ることができ、友人も自分のことのように喜んでくれました。さらに幸せな気分になりました。

私は今、母国の文化だけではなく、日本の文化にもとても興味を持っています。それは祭りについてです。特に興味を持った祭りは「七夕祭り」です。七夕祭りに興味を持ったきっかけは、学校で七夕飾りを作ったことです。吹き流しを作って福祉施設に贈りました。折り紙やお花紙を一枚一枚折って大きな七夕飾りができたことにとても感動しました。作っている最中、先生から声をかけられて七夕の歴史を調べました。彦星と織姫が年に一度しか会えないというエピソードが素敵だと思いました。祭りは私たちにとってとても楽しい行事です。さらにその行事の歴史について調べてみると、その行事の楽しさがよりわかってくると思います。

文化の違いだけでなく、共通点についても考えるようになりました。文化が大きく異なっている、よく考えてみると同じこともあります。例えば、日本語と自分の母語であるウルドゥー語は全く違う言語ですが、それでも語順が一緒です。同じく、「七夕祭り」の由来とラマダンの時にする「断食」にも共通点があると考えられます。自分の好きなものから切り離されて、そのもの・人の大切さを改めて知ることがどちらの祭りにもおいても大事な要素です。彦星と織姫が一年間離れていて、一日だけ会えることと同様に、ラマダンも一ヶ月ずっと断食して最後の日にみんなが楽しみにしているEidというお祭りが行われます。

私はラマダン「断食」の歴史について去年まで知りませんでした。前までは何も考えずに過ごしていましたが、学校での総合的な探究の時間に「お祭り」についてパキスタンと日本を比較して調べながら、ラマダンのことも勉強しました。友達や先生に伝えることもでき、自分自身でも今年のラマダンをより良く楽しむことができました。何かを知るとそれをよりよく楽しむことができることを理解できました。

#### 発表趣旨

自分の文化を説明する機会は少なかったが、高校で日本語弁論大会に挑戦し、自分の経験を日本語で伝えることができた。文化祭では兄と共にパキスタンの結婚式を紹介し、全校生徒に異文化を理解してもらい、賞も受賞した。さらに、日本の「七夕祭り」に興味を持ち、その歴史を調べた。文化の違いだけでなく、共通点も見つけ、日本とパキスタンの祭りの共通要素を発見したことで、自分の文化をより深く理解し楽しむことができた。

## 日本語弁論【国際交流基金理事長賞】

### 「二カ国に育てられた私」

東京都立科学技術高等学校

2年 エスパナ・マルカ・アルティア・フロレス

私は小学校3年生の時に日本に来て、約7年経ちました。今年で人生の半分ずつをフィリピンと日本で過ごしたことになります。日本に来た理由は、両親が日本にいるからであり、「ここで勉強をした方が明るい未来が待っている。」と言われたからです。私は長い間日本で暮らしていますが、いまだにフィリピンと日本の違いを感じ驚くことがあります。ここで、今回お話ししたいのは、二カ国の学校がどのように私に影響しているかです。

皆さん、フィリピンの学校はどんなところだと思いますか？実は、日本の学校とほぼ同じです。今日は、特に異なることを二つだけ紹介したいと思います。

一つ目は、授業のスタイルです。フィリピンでは、グループワークが活発です。ディベートと呼ばれる自分の意見を言い合ったり、ディフェンスと呼ばれる異なる意見を持つグループ同士の議論が行われる授業があります。特に中学生以上の学生は頻繁に討論を行うので授業は賑やかで活発です。一方、日本では静かに授業を受けて、先生の話をよく聞き、考え始めるといつの間にか眠りにについている人たちを見かけることがあります。これは大きな違いです。

二つ目は、学校からの宿題の量と種類です。フィリピンにいた頃は、あまり宿題をもらわなかった記憶があります。特に休日や夏休みには、大量の宿題をもらうことはありませんでした。夏休み中は、「暇だな」と感じる日が多くありました。しかし、日本では、夏休みの宿題があつたり、小学校から毎日決まった宿題が出て、算数や漢字の宿題を何時間もかけてやりました。また、漢字テストや計算テストでは、日本の生徒たちは、いかに正確に解き、解くスピードにも拘りがあるように見えました。私は大変、驚きました。

私はこれらの国の教育システムの違いから、フィリピンの学校は小さい頃から自立する力または何も言われなくても自分で行動する力を身につけられ、正解を求めるのではなく自らの考えをアウトプットすることを重視しているように感じています。

一方、日本の学校では練習をたくさん重ねて、みんなができるように、自信をつけさせているように思えます。学校で何かを学ぶとき、私はいつもその背景や根拠を考えています。

ですから、日本に来て、最初は宿題の多さから、「そういうものだから、そうするしかない。」と自分に言い聞かせていましたが、この二つの考え方を感じ取ったことで、「うまく利用すれば勉強への新しいアプローチの仕方が生まれる。」と思いました。

この二つの国の教育システムの違いは、それぞれ文化や社会の背景によって変わっているものだと思います。いい、悪いではなく、それぞれが重要であり、価値のあるものです。これらの違いを理解することは、お互いの文化間をより深く理解することにつながる上で重要だと思います。またお互いの教育システムを理解し、学び合うことで、新しい視点にも気づくことができます。

これからは、世界の国々の文化や背景でどのように国が影響されているのかを調べ、新しい視点で物事を見ていきたいと思っています。多文化社会に向けて多く国の文化を理解し、お互いに学び合うことで、より豊かな社会につながる一歩となれることを願っています。

私は、都立科学技術高等学校に入学して、STEP (Science Technology English Program)のメンバーに入り、インターナショナルスクールや海外の学校の生徒と関わっています。こうした学校間の繋がりはいずれ国家間のつながりにも通じてくると思いつながりながら活動しています。多くの国々が理解し合って、世界が一つになる日を願っています。

## 日本語弁論【日本国際協力センター理事長賞】

### 異文化の翼～世界の架け橋～

広島県立瀬戸田高等学校 3年 デントーン・アンシャリー

私が絶対に叶えたい夢は、国際線のキャビンアテンダント（以下「CA」という。）として、外国人クルーと日本人の乗客の架け橋になることです。私は年に数回、生まれ故郷であるタイに渡航する機会があります。その際には、日本人の乗客は果たして約7時間ものフライト中、機内での時間を有意義に過ごせているのだろうかと思いつつながら、CAの方々のサービスや配慮をいつも注意深く観察しています。なぜなら、外国人クルーが日本人の独特なニーズを理解することは、日本で生活が今年で6年目を迎える私でさえ、かなりハードルが高いと思うからです。

そこで、「礼儀やマナーを守る」「本音と建前がある」「謙虚である」など、日本人の特徴がわかり始めた私が仲介して、スムーズにサービスを提供したいと考えています。

私が目指す国際線のCAの役割は、世界中の乗客と円滑なコミュニケーションを取り、乗客のニーズを正確に理解することです。そのためには、高いレベルの英語力やさまざまな国の文化やマナーの知識が求められます。

小学校5年生まで生まれ育ったタイと、小学校6年生から暮らしている日本とでは、当然のことながら文化やマナーに大きな違いがあります。その中で、私が日本に来て驚いた3つの違いについて挙げてみます。

まず、一つ目は、タイでは麺類や汁物をすすすることはまずありません。音を立てて食べることはタイではマナー違反です。そのため、麺をすすのではなく、スープをすくったレンゲの上に箸を使って適量の麺をのせ、一口ずつ食べます。ところが、日本では麺をすすることが一般的です。私はこの違いに正直驚きました。日本人が麺をすす理由を調べてみると、麺をすすすることで風味を楽しむことができるようです。

そして二つ目は、ホテルで日本人の宿泊客が、エレベーターがあるにもかかわらず、階段を使う光景をよく見かけます。この行動には、最初は全く理解できませんでした。タイでは、「便利さ」を優先するため、階段を使うことはほとんどありませんでしたが、日本では階段を上り下りすることで、エクササイズとして階段を利用している人が増えていることがわかりました。私もこれからは、健康な体づくりのため、極力階段を使うようにしたいです。

最後に三つ目は、タイでは朝食は屋台で買って食べるのが日常的な風景です。そもそも、タイでは外食をする機会が多いです。首都バンコクを中心に、都市部では朝から晩までたくさんの屋台が並んでいます。大きなショッピングセンターには必ずといっていいほどフードコートがあり、普段から外で食事をする人が多いです。家で食事をする場合も、おかずは屋台で買うのがごく一般的です。

広い世界を見渡すと、こうした文化やマナーの違いはどの国にもあると思います。私は日本とタイ以外の文化やマナーの違いにもとても興味があり、さらに知りたいです。将来、私が国際線のCAになるという夢を叶えたら、世界中を飛び回り、それぞれの国で文化やマナーや宗教の違いについて学び、丁寧な接客が外国人に評価されている日本ならではのおもてなしを大切にし、日本の文化として広めていきます。

そして、国籍や民族の違いがあっても、互いの違いを認め合い、対等な関係を築く姿勢を大切にしたいです。世界で働くために必要なのは、国の文化・歴史・宗教・価値観が違うことを理解し、認める気持ちだと思います。

私は外国人クルーと日本人の乗客の架け橋になる国際線のCAになるために、「道は必ず開ける」と自分を信じて夢に向かって挑戦します。

英語弁論・日本語弁論ともに、皆さん素晴らしい発表をされました。

英語弁論につきましては、いずれも大変質の高い発表で、感動すると同時に、審査にあたっては、審査員一同、皆、頭を悩ませていました。プレゼンも含めて、みなさんの経験を大変うまく表現されていたかと思います。正直、これほどまで質の高い弁論になるとは思っておりませんでした。緊張もあったと思うのですが、誰ひとりそれを感じさせませんでした。

今回の英語弁論で感じたことを一点あげれば、異文化、外国人との接点などで、みなさんが経験して感じた様々な世の中の不条理について、こうすれば乗り越えられるという内容の発表が多かったところです。これらの不条理には、なぜそうなったのか、なぜ問題だと指摘されつつも改善されていないのか、きっと深い背景や歴史があるのではないかと思います。この弁論という機会を通じて、今後、皆様には、それらに関心を持ち、考えていくとよいのではないかと思います。

日本語弁論につきましては、母国語ではない言語の習得は決して容易なことではありませんが、皆さんがとても流暢な日本語でスピーチを披露されたことに大変感銘を受けました。日本語は漢字や敬語などもあり、おそらく学ぶのが難しい言語ではないかと思います。加えて外国での生活は、言語や文化の違いから、意思疎通が思い通りに行かないことも多く、戸惑いや苦勞、挫折が伴うものです。異なる文化に寛容であるだけでなく、積極的に良いところを吸収しようと意欲に満ちあふれている姿は大変印象的でした。

さて、海外、特に多くの方が触れられた途上国と日本との関係は、日本が途上国を助けるという関係をイメージされる方も多いかと思いますが、これからの時代、どちらが上というのではなく、共に力を合わせて価値を作り上げる、「共創」という考えが重要になってきます。昨年改定された開発協力大綱においてもこの「共創」という考えが基本となっています。新しい時代の海外との関係を、共創の考えのもと、次の世代と共に創り上げていければと思います。

最後に、現在の日本は、若者が海外へ行きたがらない、内向きと言われていますが、この弁論大会に参加された方々は、英語・日本語の部にかかわらず、この経験をきっかけに、高校を卒業した後も、留学、ビジネス、国際協力などを通じて、世界と日本を結ぶ懸け橋となっただけであれば幸いです。既に、これだけの言語能力を有しているのです、将来のご活躍を祈念しております。

## 第13回高校生国際理解・国際協力に関する研究発表会 開催要項

- 1 目的 高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等の活動報告または研究発表とする。各活動の振り返り・まとめの場とするとともに、多くの人に活動を知ってもらい、国際理解・国際協力・国際ボランティアの連携・発展・活性化をめざす。
- 2 日程 令和6年8月2日（金）（大会第2日）
- 3 会場 トークネットホール仙台（仙台市民会館） 小ホール（宮城県仙台市青葉区）  
TEL 022-262-4721
- 4 大会規定
  - (1) 発表内容 高校生の国際理解・国際協力・国際ボランティア等に関する内容で、日本語による活動報告または研究発表とする。視聴覚機器等を使用して8分以内で発表した後、発表内容に関する5分程度の質疑応答がある。発表生徒は各校1～6名程度とする。個人の研究発表も可とする。
  - (2) 参加資格 各都道府県の国際教育研究協議会に加盟する高等学校ならびに中等教育学校の生徒
  - (3) 参加者 参加者の募集は原則として公募で行います。別添「応募申込」にしたがって応募してください。発表団体数は6校程度とします。また、交通費の一部を補助する場合があります。
  - (4) 発表時間 8分以内であること。ただし、時間を超過した場合には減点の対象とする。
  - (5) 審査内容

【発表の内容70点】	動機・問題発見（10点）	継続性（10点）
	研究のプロセス（10点）	問題意識・創意工夫（10点）
	国際的視野（10点）	地域環境・地域創生（10点）
	まとめ・今後の課題（10点）	
【発表の仕方30点】	発表準備と機器活用（10点）	話し方や態度（10点）
	質疑への応答（10点）	
  - (6) 表彰

国際協力機構国内機関長賞	(1名)
国際交流基金賞	(1名)
日本国際協力センター賞	(1名)
全国国際教育研究協議会長賞	(1名)
国際理解・国際協力奨励賞	(若干名)
  - (7) 審査員

独立行政法人国際協力機構(JICA)	花立 大民 様
一般財団法人日本国際協力センター(JICE)	中村 稔 様
全国国際教育研究協議会	江森 忍 様
全国国際教育研究協議会	藤田 博雅 様
全国国際教育研究協議会	大山 峰弘 様

## 研究発表【国際協力機構東北センター所長賞】

在住外国人との共生に不可欠なもの～「やさしい日本語」の有用性を探る～

八戸聖ウルスラ学院高等学校 ジャンボ国際交流部 岩間 咲樹 鶴田 季久

### 1 本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

2019年から2022年まで部の先輩方が、「日本人は本当に外国人労働者にやさしいのか」をテーマに、地域における外国人技能実習生の現状や課題について調査してきた。学校のある八戸市は青森県内で最も在住外国人の数が多く、在留別では技能実習生の割合が最も多い。そして、ここ数年、ベトナム人の増加に加えて、地域の造船業や漁業を支えるインドネシア人の数が急増している。宗教的な多様性にも無関心ではいられない。もはや彼らなしでは地域の産業が成り立たない現状がある中、在住外国人との共生に必要なことは何なのか。

「やさしい日本語」は、1995年の阪神淡路大震災で、多くの外国人が十分に日本語理解できないために必要な情報が得られず、適切な行動ができなかったことにより被害を受けたことから注目されるようになった。在住外国人の増加に伴い、国も「やさしい日本語は有用だ」と「やさしい日本語」の普及に積極的に取り組んでいる。しかし一方で、「やさしい日本語」について知らない人も多い。コミュニケーションにおいて必要不可欠な「言葉」に注目し、「やさしい日本語」を切り口により豊かな共生社会について考えたい。

### 2 研究の目的や解決すべき課題

在住外国人との共生において、互いの違いを理解し支え合うためにも、コミュニケーションは必要不可欠である。しかし、先輩たちの調査や自分たち自身の経験から、学校で一生懸命学んでいる「英語」は、実習生との交流ではほとんど役に立たないことがわかった。その場合は、彼らが少しわかる「日本語」をやさしくして使ったり、写真や絵を見せたりして交流を図った。しかし、どの程度「やさしい日本語」は有用なのだろうか。

「やさしい日本語」の課題も含め、その有用性を検証し、もし有用だとすれば、より多くの人に「やさしい日本語」の理解を促し、実際に「やさしい日本語」を使える人が増えるようにしたい。それが本研究の目的である。

### 3 発表者が関わったこれまでの取組

#### (1) 活動の時期・期間

2020年～2024年現在。2020年度は私たちがジャンボ国際交流部に所属した年(中学1年生)。そのときすでに先輩方が多文化共生を目的に、地域在住の技能実習生との交流を始めていた。研究は部分的に継続され、高校生になった昨年の2023年度に、インドネシアの実習生との交流を経験し、今回の研究テーマに至った。

#### (2) 活動への参加者・人数

昨年度のジャンボ国際交流部の取り組みとしては、約30名が様々な形で活動に参加した。その中で、中学1年から入部している私たち2名が特に「やさしい日本語」に着目し、現在も研究継続中である。

#### (3) 主な活動場所

学校と、学校がある八戸市、その周辺市町村

#### (4) 具体的な活動・研究内容

##### 部全体としての取り組み

【中学1年】2020年度「コロナ禍における技能実習生の状況」を研究

- ・技能実習生の方々とオンライン交流と日本語会話練習（5回）
- ・技能実習生の方々と直接交流（1回）
- ・受け入れ監理団体の方によるオンライン講演会と受け入れ監理団体や企業への電話アンケート

【中学2年】2021年度「多文化共生のために高校生ができること」をテーマに先輩と活動を実践

- ・技能実習生の方々とオンライン交流と日本語会話練習（4回）
- ・受け入れ監理団体の方とのメールでのやり取り
- ・八戸青年会議所主催の「災害時の異文化理解」に参加（岩手大学の先生の講演、在住外国人の方々と、災害時の避難所運営について議論）
- ・本校留学生（スリランカ、タイ）との交流、留学生ポスターの作成
- ・八戸市在住外国人へのアンケートをチャット風にまとめ、八戸駅に掲示
- ・「多文化共生アンケート」を校内で実施

【高校1年】2023年度「イスラム教徒も肉が好き！～地域の食の多様性～」をテーマに調査・研究

- ・八戸市、またその近郊のレストランや食堂における宗教的配慮について電話調査
- ・イスラム教徒であるインドネシア実習生との交流（オンラインと対面）
- ・ハラールフードについて生徒へのアンケート調査の実施
- ・イスラム教徒向けの郷土食（せんべい汁、鯖缶メニュー）の実習

##### 部の中での個人的な研究・調査

【高校1～2年】2023年10月～2024年7月現在

- ・公共機関における「やさしい日本語」の使用状況（市役所、美術館、警察署等）と課題の調査
- ・実習生の働く現場における「やさしい日本語」の使用状況と課題の調査
- ・生活における「やさしい日本語」の使用状況（スーパー、病院、バスなど）と課題の調査
- ・実習生と彼らを受け入れる企業、日本語指導や生活指導を行う監理団体への聞き取り調査
- ・「やさしい日本語ツーリズム協会」代表吉開章さんへのインタビュー
- ・学校での「やさしい日本語」アンケート実施（生徒・保護者）
- ・タイの姉妹校生徒（日本語学習者）との「やさしい日本語」実験
- ・翻訳・通訳アプリとのちがいについて調査
- ・オープンキャンパス、学院祭での「やさしい日本語」に関する展示発表

#### (5) 研究の成果

八戸市では在住外国人向けに英語のリビングガイドの他に、ベトナム人の増加に伴いベトナム語版も作成し配布している。また「やさしい日本語」版もある。市の国際交流協会の発行する冊子にもページによっては「やさしい日本語」で書かれたり、ひらがなでルビがふられていたり工夫がある。増加する在住外国人を無視できない現状から、言葉に関するサポートを通して彼らをサポートしようとする取り組みは着実に行われていることがわかった。

しかし、在住外国人に日本語を教える方から「働く現場でも生活現場においても、外国人がやさしい日本語に触れる機会はずがない。労働の現場では、やさしい日本語を使って外国人に話す日本人はいない。地域ならではの方言や、その労働現場ならではの言葉や表現を使って、彼らにどンドン話し

ながら教えてくれる人が必要だ」という話しをうかがった。「やさしい日本語」だけではだめなのだ。それでも「やさしい日本語」は有用である。コミュニケーションにおいては、言葉が理解できることはもちろん大事だが、それ以上に「自分に関心をもって歩み寄ろうとする」姿勢こそが、在住外国人の方々の安心につながっていることがわかった。「やさしい日本語」が使われる場面では、相手の理解を想像しながら関わろうとする話し手の「優しさ」が相手に伝わる。その相手を思いやる気持ちと態度こそが、共生社会に不可欠なのだと改めて気づかされた。「やさしい日本語」は有用で、場面や状況、相手の日本語能力に応じて、「やさしい日本語」が使えるスキルを身につける必要がある。それが私たちの考えだ。

#### 4 今後の課題と展望

私たちは今後、「やさしい日本語」実験の実施とこれまでの調査結果を、今後行われる7月の学院祭で展示発表する準備をしている。相手と目線を合わせ、相手を理解しようと歩み寄る「やさしい日本語」を促進するため、来場者の方々に「やさしい日本語」の体験もしてもらおう。

以前、イスラム教徒のインドネシア人が、スーパーに行っても豚やアルコールが使われているかどうか判断できないことが多く、日本語も十分にできないため店員にも聞けないと話していた。ハラル認証された食品を扱う難しさや表示の手間やコスト面を考えると、店側ができることには限界がある。しかし、店員がイスラム教徒に対する知識をもつこと、聞かれた際に「やさしい日本語」で答えられるよう準備しておくことはできるだろう。「やさしい日本語できます！」バッジなどの作製も検討していく。多文化に寄り添える人を育てる。このような改善が公共機関や働く場、生活の場で必要だと考える。

在住外国人が安心して働き、生活ができること。それは、私たち受け入れる側にとっての安心にもつながる。その基盤として、「やさしい日本語」が地域社会で普及していくよう努めていきたい。

【資料1 八戸市の在住外国人とその内訳】

【資料2 インドネシア実習生との交流】

#### 八戸市の在住外国人 1640人(過去最多)

2023年10月末

国籍	人数	割合	国籍	人数	割合
中国	180	11.0%	インドネシア	100	6.1%
フィリピン	150	9.2%	タイ	80	4.9%
ベトナム	120	7.3%	韓国	70	4.3%
インドネシア	100	6.1%	台湾	60	3.7%
アメリカ	80	4.9%	フランス	50	3.1%
韓国	70	4.3%	ドイツ	40	2.4%
台湾	60	3.7%	イタリア	30	1.8%
フランス	50	3.1%	オーストラリア	20	1.2%
ドイツ	40	2.4%	ブラジル	10	0.6%
イタリア	30	1.8%	その他	10	0.6%
オーストラリア	20	1.2%			
ブラジル	10	0.6%			
その他	10	0.6%			
合計	1640	100.0%			

八戸国際交流協会(2023年10月)

#### インドネシア実習生との交流・日本語会話練習



【資料3 タイの姉妹校生とオンライン交流】

【資料4 日本語指導者への聞き取り】

#### 姉妹校とのやさしい日本語交流



## 研究発表【国際交流基金賞】

### 愛媛の海と街 私たちの挑戦 Together! We Care, We Share, We Dare!

愛媛県立東温高等学校 国際理解研究同好会

3年 渡部花奈 後藤里奈 奥村 勝

2年 越智 龍

#### 1 本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

Ehime has a beautiful sea...if only seen from a distance. 愛媛の海を何とかしたい! と思った私たちは、2年前にオンライン勉強会で、ワンコイン500円で、いつでもだれでもビーチクリーニングが体験できる沖縄発祥の活動、「プロジェクトマナティ」に出会いました。お客様は、海で楽しく活動でき、海辺の商店にとっては海がきれいになり、双方はWIN-WINの関係にあります。愛媛県へも普及するように活動を進めた結果、愛媛県第1号のパートナー店が6月に誕生しました。問い合わせや反響はたくさんあったものの、実際にお金を払う参加者は少なく、原因そして対策を考えることにしました。

#### 2 研究の目的や解決すべき課題

<Purpose of the Research >

- 地元愛媛県東温市から発信し、世界規模で起こっている海洋汚染を改善する!
- 国境を越えて、様々な国の人々と友情を深める!

<Our Goals Going Forward>

- ① **We Care!** 「プロジェクトマナティ」のパートナー店を支え続ける。 We continue to support!
- ② **We Share!** 海を越えて互いに学び、探る。 We learn and discover across oceans!
- ③ **We Dare!** 「プロジェクトマナティ」を柱に実行する。 We take action!

#### 3 発表者が関わった1年間の取組

- (1) 活動の時期・期間 2022年夏～現在
- (2) 活動への参加者・人数 同好会員4名
- (3) 主な活動場所 本校図書館等
- (4) 具体的な活動・研究内容方法 …以下参照
- (5) 研究の成果 …以下参照



#### 2023年7月 We Share! Having Exchange Students from Hawaii 2023

愛媛県とハワイ州は2001年に起きた「えひめ丸事故」がきっかけで姉妹都市になり、それ以降交流が続いています。交流事業の一環としてハワイ大学生2名を東温高校にお招きし、ハワイの文化や言語について教わりました。嬉しいことに2人もハワイ大学のCulture Clubに所属し、定期的にビーチクリーニングを行っていました。ご縁が広がる、世界がつながる!

#### 2023年8月 We Share! Wakayama: Asian & Oceanian High School Students' Forum

和歌山に赴き、国際フォーラムに出席しました。海外から参加している学生から世界を取り巻く環境問題について教わりました。モンゴルでは大気汚染が深刻であることやインドでは安全な飲み水の確保が難しいことなどが分かりました。もちろん私たちの看板である「プロジェクトマナティ」の紹介も忘れていません!

## 2023年11月 We Care! New Partners: SoraUmi Setouchi Guesthouse & The Park

1号店さんの紹介で「プロジェクトマナティ」のパートナー店が新たに2店舗誕生しました！元々は古い倉庫をゲストハウスやスケートボード併設のカフェに改装した商業施設です。新たな仲間と共に「プロジェクトマナティ」を推進します。

## 2023年/2024年 12～2月 We Dare! Planning: Machi Manatitii

第1号パートナー店「KaRuu」が「プロジェクトマナティ」の加盟店になり半年が経ちましたが、その間の参加者はたったの2人。私たちは、愛媛の「プロジェクトマナティ」が発祥の地沖縄と比べて盛り上がり欠けることを問題視するようになりました。

原因を探るため、愛媛の玄関口、JR松山駅で観光客を対象に調査をしました。その結果県内外の人も、外国人観光客も6割以上の人が500円は高すぎると答えました。

### <沖縄県と愛媛県の観光客比較調査>

	沖縄県	愛媛県
観光客人数	コロナ前 年間1000万人以上	R4年度 2010万8000人
平均滞在日数	約4日以上	約1.8日
1人当たりの消費額	10万円以上	約5000円 (宿泊客3万円以下)
主な目的	海、自然、マリン活動	買い物、文化歴史、温泉等



さらに私たちは、沖縄と愛媛の観光客を比較してみました。その結果海や自然に興味があり、滞在時間にゆとりがあり、お金を使うことを惜しまない旅行者たちがマナティのターゲットであり、滞在が短く、自然目的に来県する人の割合が10%以下の愛媛県の旅行者にとってはハードルが高いことが分かりました。

一方で、無料ならやっても構わないと思っている人が半数近くいることも分かりました。そこで私たちは、「プロジェクトマナティ」の一環である「街マナティ」に着目しました。「街マナティ」は無料で実施する市街地の清掃活動です。実は海ごみの8割が街から来ていることも分かりました。「街マナティ」を東温でやってみよう！」こうして「地域+マナティ+無料=新しい愛媛の過ごし方」の地図が広がり始めました。

## 2024年3月10日 We Dare! Machi Manatitii in Ehime!

東温市で愛媛県初の「街マナティイベント」を実施しました。場所は地元の商業施設クルース・モール。事前にイベントのチラシを地元の学校に配布したり、街頭で配ったりしました。当日は学生を中心に20人以上が参加し、全部で72キロものごみを回収しました。また、地元の方だけでなく、イギリス出身のホーリーさんが駆けつけてくださり、私たちの活動に賛同してくださいました。そして当日の様子は「あいテレビ」が取材をし、夕方のニュースで放映してくださいました。

### 愛媛の街マナティ

- ☆参加者には温かいココアやお菓子をプレゼント！
- ☆さらにごみの重量上位3名様にはギフトカードを贈呈！
- ☆人が集まりやすいショッピングモールを開催地に！
- ☆さらにフリーマーケットのイベント会場の一角で！
- ☆希望者にボランティア証明書を発行！



## 2023年9月～2024年4月 We Share! With Hawaii University's Culture Club

交流を行ったハワイ大学のメロディさんやマーカスさんとオンラインミーティングで連絡を取りあってきました。第1弾の街マナティの報告は次のような内容です。

T=東温高校国際理解研究同好会 H=ハワイ大学 Culture Club

**T:** 今度、同じ日時に愛媛とハワイでビーチクリーニングしませんか？今回の街マナティでは参加者に回収したごみの重量で競ってもらいました。私たちがゴミの重量で競争したいです！  
**H:** それはいいね！でも愛媛チームの勝ちだね。こちらでは多くの団体がビーチクリーニングを定期的に行っているから。1回に回収するゴミの重量なら負けそうだよ。

ハワイでは美しい海を守るため多くの団体がビーチクリーニングに携わっていること、いずれも実施は無料であることが分かりました。ちょうど同じ頃ハワイの海岸で日本から来た子どもたちとビーチクリーニングを行い、回収したマイクロプラスチックで「プラスチック・アート」を作り、学びを深めたそうです。



## 2024年4月～5月 We Share! Beach Cleaning around KaRuu & THE PARK

パートナー店である「KaRuu」や「THE PARK soraumi」がある海辺でビーチクリーニングを実施しました。「プロジェクトマナティ」を立ち上げてから定期的に行っています。今回も愛媛県在住のALTがたくさん駆けつけてくださり、共に汗を流しました。瀬戸内海で盛んなカキ養殖のチップ、発砲スチロールが粉碎したもの、ペットボトル、食品トレーの切れ端…ごみ拾いの後は、それぞれの店長さんにプロジェクトマナティの現状についてインタビューをしました。以下はTHE PARK soraumiでのインタビュー内容です。

★ 4月28日（GW中） 「プロジェクトマナティ」関連のイベントを実施

★ マナティ参加者にはワンドリンク提供&スケートボード場の利用を無料に！

→30～40人参加

★ 通常の「プロジェクトマナティ」参加者は5人程度

★ 利用者は子どもが小学生くらいのファミリー層、レジャーで足を運んだ人たちが中心



## 2024年6月 We Dare! Machi Manatit II

あいテレビからお誘いをうけ、SDGsイベント「第3回知ろう！学ぼう！楽しもう！in エミフルMASAKI」に私たちのブースを出しました！街マナティ in えひめ第2弾が私たちのブースです。われら同好会のサポーター、アメリカ出身のパブロさんやカナダ出身のアルバロさんが当日応援に駆けつけてくださいました。

それぞれの街マナティを比較してみることにしました。

	街マナティ I	街マナティ II
場所	クールス・モール (アウトレット・モール)	エミフル MASAKI (大型ショッピングモール)
施設周辺	田畑が広がる 住宅もまばら、広々としている	国道に面し、交通量が多い 公園や住宅地も広がる
参加者	主に学生やファミリー、事前に チラシを見て参加を決めた人地 元の人中心 (20人~)	事前にチラシを見て参加を決め た人、ファミリー、買い物客 (40人~)
参加者へ 提供	上位3位 ギフトカード 参加者全員 ココアとお菓子	上位3位 ギフトカード 参加者全員 冷茶・塩分タブレットや SDGsグッズ
ゴミの総 重量	72キロ 不法投棄のごみが見られた	20キロ すでに業者が清掃している
宣伝効果	○	◎ あいテレビの企画に参加
実施のし やすさ	◎ (特に制限なし、周囲も田畑が 広がり交通量は少ない)	△ (ショッピングモール内はゴミ 拾い不可)



上記の表からごみを多く回収するなら郊外の施設周辺、活動を宣伝したいなら近郊の大型ショッピングモールの方が適していることが分かります。

また、第2弾はあいテレビ提供による、「米粉でできた歯ブラシ」や「竹でできたマグカップ」のSDGsグッズを参加者の皆様にお礼としてプレゼントしました。

## 2024年7月 We Share! Having Exchange Students from Hawaii 2024

今年もハワイ大学生を本校に迎え、交流事業を行います。2023年夏、山火事が甚大な被害をハワイのマウイ島にもたらしました。地元の復興の現在の様子はどう？解決すべき一番の課題は何？など生の声を伺います。

### 4 今後の課題と展望

私たちの新しい挑戦は、海辺そして身近な街で、関わる人を増やす、増やし続けることのできる仕組みを作ることです。そのために「プロジェクトマナティ」を支え続け、「街マナティ」を発展させていきます。愛媛ならではの「プロジェクトマナティ」の形が定まったら、いつかハワイ大学の Culture Club とのコラボ企画や、同時にビーチクリーンイベントを企画したいと思っています！ボーナスチャレンジとして、マナティイベントで集めたマイクロプラスチックを活用し、アップサイクルして地域に役立つものにしていきたいと思っています！これからも東温市から挑戦し続けます。

広がれマナティの輪！愛媛の海には「マナティ」、愛媛の街には「街マナティ」を！

**Together, we care, we share, we dare!**

**マナティパートナー店！**

あいテレビ  
News &  
東温高校  
公式インスタ

「UPCYCLE」  
with Holly!  
PET ボトルを建築に  
活用しましょう！

## 研究発表【日本国際協力センター賞】

### 私たちのポイ活 ～紙芝居でつながる地域クリーン作戦～

都城聖ドミニコ学園高等学校 ボランティア部  
満行 春心 長友 埜乃華 野元 結莉乃

#### 1 本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

本校では、令和元年度より、生徒会活動の柱として SDG s の 17 の目標を掲げている。私たちボランティア部の活動においても 17 の目標を意識しながら様々な活動を行ったり、研修に参加したりしてきた。

しかし、その頃、コロナ感染症が拡大し、日常生活が制限されるようになったため、これまで参加していた地域イベント等が中止となり、私たちの活動も縮小傾向になっていった。そこで、ボランティア部の活動の目的と意義を振り返り、コロナ禍でもできる地域貢献活動を考え、実践することにした。



私たち、ボランティア部が長年大切にしてきた活動の 1 つに清掃活動がある。原点に立ち返り、まずは、自分たちが生活している地域の清掃活動に取り組むことにした。

各部員がそれぞれ、家の周辺（道路や河川敷や公園など）でゴミ拾い活動を行った。回数を重ね、活動報告をする中で、想像以上にゴミの量が多いことやごみの種類に特徴があることが分かった。公園では、水風船のゴミや飴やガムの包み紙といったお菓子のゴミなど、子どもたちがポイ捨てしたと思われるゴミが多い傾向が見られた。公園にあるポイ捨て禁止の立て看板は、あまり機能しておらず、他に良い方法はないか、考えるきっかけとなった。

#### 2 研究の目的や解決すべき課題

コロナによる行動制限が緩和されたころ、清掃活動で気づいたゴミ問題を研究課題にできないかと考え、子供たちのポイ捨てごみを無くす活動「ポイ活」を始めることにした。

活動の柱に SDG s を据え、子供たちに世界を変えるための SDG s の重要性を伝え、ポイ捨てや食品ロスなどの問題も取り上げることにした。

活動方針としては、これまでの部の伝統を受けつきながら、まずは、私たちが身近に取り組

める活動を考え、最終的には、世界とつながる国際的な活動につなげていくことにした。

#### 【R5・6年度の研究目的】

- ① ポイ捨てゴミの削減（ポイ活）  
SDGsの目標達成のため、それぞれの地域のゴミ問題の解決が重要であることを子供たちにわかりやすく伝え、クリーンで住みやすい町づくりに貢献する。
- ② これまでの活動を世界につなげる新たなプロジェクトを考案  
ポイ活を国際的な活動につなげる仕組みを考え、プロジェクトを実践する。

### 3 発表者が関わった1年間の取組

#### (1) 活動の時期・期間

令和5年4月～令和6年6月

#### (2) 活動への参加者・人数

述べ18名

#### (3) 主な活動場所

本校、隣接する幼稚園、地域児童クラブ等

#### (4) 具体的な活動・研究内容方法

##### ① SDGsに関する研修へ参加

部員のSDGsについての見識を深めるため、2つの研修会に参加

8月（夏休み）

- ・ユネスコ研修会への参加
- ・Blue Earth塾への参加

##### ② 子供たちに向けた「ポイ活（紙芝居製作）」

4～6月 ・昨年度より作成しているSDGs紙芝居の仕上げ「SDGsって何？」

ポイ捨てを訴えるだけでなく、SDGsについて知ってもらい内容も含めることを提案し、紙芝居の内容見直しと作成を行った。食べ残しをしないことやエコバックを利用することもSDGsの活動に繋がっていることを伝える。

7～12月 隣接する幼稚園、児童クラブでの読み聞かせ活動

9月 本校文化祭で活動報告、演劇の形で発表を行う

11月 ロータリークラブやライオンズクラブ（社会人企業の団体、社会人のボランティア団体）の定例会で発表

3月 活動のまとめ

5月 検証インタビュー

6月 新たなプロジェクトの考案



## (5) 研究の成果

### ① SDG sに関する研修への参加

夏休みに参加したユネスコ研修では、10人村や貿易ゲームを通して、様々な国際的な問題や課題を考えるきっかけをもらうことができた。また、海外で働いた経験のある方からの話では、実際に現地に行った人でしか分からないエピソードも聞くことができた。



Blue Earth塾では、グループワークで食品廃棄物を活用した新たな食品の開発など、活動をとおして社会問題の解決方法について実践的に学ぶことができた。

### ② 子供たちに向けた「ポイ活（紙芝居製作）」

隣接する幼稚園や地域児童クラブで行った紙芝居では、短い内容でしっかり伝えたいことをまとめることができた。短編の話を2つ用意し、1回の訪問で全てを読み上げた。どの内容が心に残ったか聞いてみると、「ポイ捨てしません」「残さず食べます」という回答が返ってきた。伝えたい内容がしっかりと伝わっていることが分かり、紙芝居や劇といった形で行うことで小さい子どもでも分かりやすく伝えることができた。保護者の方も一緒に聞いてもらう機会があり、その中には英語圏の方もいらっしやったが、絵が簡潔でわかりやすいものだったので、表情からも理解していただいているようだった。



約 1 年後に、再び児童クラブを訪れ、不安な気持ちで検証インタビューを行ったところ、紙芝居のことを覚えており、「ポイ捨てをしていないよ」、「嫌いな食べ物でも自分で頑張って食べてる」、「牛乳パックとベルマークとか集めてる」、「公園でゴミを見かけたらどうする?」という問いかけには、「ゴミ箱に捨てるか、持って帰る」と答えてくれた。一過性のものになっていないかという不安があったが、紙芝居をとおして、子供たちの意識や思いが変わり、行動に変化が起きた事実を目の当たりにし、驚きと喜びを感じた。

後日、この活動のきっかけとなった、ポイ捨てのゴミがあった公園を訪れたところ、風船やお菓子のゴミは落ちていなかったが「ポイ活」との関係を明らかにするまでには至らなかった。

### ③ これまでの活動を世界につなげる新たなプロジェクトを考案

本校では、これまでフィリピンの恵まれない子供たちへプレゼントを贈る活動を続けており、姉妹校であるカリタス・ドンボスコ・スクールの関係団体の慈善事業として配布してもらい、多くの子供たちに喜んでもらっている。また、毎年お互いの学校を行き来する交換留学の制度があるため、この姉妹校と交流とプレゼント企画を融合させ、新たな取組みを行うことを思いついた。

紙芝居をSDGsの理解促進のために姉妹校にも広げたい。現地の課題を解決するため、紙芝居をとおして子供たちの意識を変えるプロジェクトを立ち上げることにした。今年は、ボランティア部の副部長が交換留学に参加するため、この企画を現地で提案する計画である。

## 4 今後の課題と展望

ポイ活は、地域の環境をクリーンにする目的で、スタートしたが、紙芝居活動をとおして、子供たちの心の変化が行動の変化につながるという新たな発見があった。

この活動のきっかけとなった、清掃活動を行った公園では、今後、現地での紙芝居とセットで清掃活動を実施したいと考えている。

また、新たに立ち上げた「フィリピンでの紙芝居プロジェクト」については、今後、姉妹校の生徒たちとディスカッションしながら、現地の問題を掘り下げ、具体的にどのような活動ができるのか、継続的な活動にするためには、どのようにすればよいのか、時間をかけながら仲間たちとの思いを共有していきたい。

そして、私たちドミニコ学園ボランティア部は、これからも「未来につながる心の種」を子供たちに蒔き続けていこうと思う。



## 研究発表【全国国際教育研究協議会会長賞】

女性に選択の自由を！

千葉県翔凜高等学校 張 ヘヨン 鈴木 羚未優

### 1、本研究の経緯・背景や背景となる社会課題

2022年9月13日イランで発生した警察によるアミニの殺人事件をニュースをきっかけに世界の女性の人権に目を向け、現在のイランの状況を中心に研究することになった。

### 2、研究の目的や解決すべき課題

私たちが一方的に考えて守ろうとするのではなく、各国の伝統文化や個人の考えを尊重しながら、女性の人権を守る方法を探りたい

女性人権を守ることで女性の選択権が強制的な力によって侵害されることがない世界を作ることが目標

### 3、発表者が関わった1年間の取り組み

#### (1) 活動の時期・期間

2023. 10. 28 (土) ~2023. 11. 30(木)

2024. 4. 8(月) ~2024. 7. 11(木)

#### (2) 活動への参加者・人数

2人

#### (3) 主な活動場所

翔凜高等学校

#### (4) 具体的な活動・研究内容

①異なる国籍を持った（日本、韓国、中国など）本校の学生を対象にインタビューを行い、世界女性人権問題についての高校生の認知度を調査。

②女性の人権の現状を知り、問題点を見つける。

③一つの地域に拘らず世界の視点から問題を捉える

#### (5) 研究の成果

女性の人権問題は特定の国に限った問題ではなく、世界全体に存在する普遍的な問題である。人々の頭の中で無意識に存在する女性に対する偏見も多くある。今回の取り組みで、私たちが気づいていないかもしれない偏見の一部も指摘できた。

例えば、学校の制服では女子がスカートと決まっているなど。また、伝統文化を尊重しながら、女性の人権を守る方法をいくつか提案できた。

例えば、ヒジャブ自体を廃止するのではなく、着用するかどうかを決める自由を女性に与えること。

### 4、今後の課題と展望

国の強制的な決まり、理不尽な規則、暴力による怪我がなく当たり前を選択権の自由を持ち続ける環境で女性それぞれがありのままの自分でいられる世界作り。

## 第 61 回全国国際教育研究大会 宮城大会

### 【第 13 回高校生国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会 講評】

独立行政法人国際協力機構（JICA）東北センター所長  
花立大民

#### ① 準備への労い

本日ご発表された高校の皆さん、お疲れ様でした。それぞれ 8 分間という持ち時間の中で日頃の活動の成果を発表するというので、時間配分や強調すべき点をどのように伝えるか等の準備はたいへんだったのではないかと思います。緊張もされたかと思います。

#### ② 評価のポイント

今回我々が評価のポイントとしたのは、研究テーマが国際教育の目的に沿ったもので持続可能性があるものなのかどうか、計画的に行われたものなのかどうか、みなさん自身が主体性または独創性を持って活動を行ったものなのかどうか、そしてその成果や結果が理論的・客観的に検討されているのか、さらにその取組みが地域や学校ならではの活動なのかどうかなどです。

#### ③ 研究テーマは多岐多様

今回発表された 6 校については、各校とも研究活動にそれなりの時間と準備を要するものであったと感心しました。また、研究テーマは国際理解・国際協力・国際ボランティア等に関する内容であれば自由であったこともあり、そのテーマは多種多様で、それを比較検討しての、審査は非常に難航しました。

#### ④ 研究の経緯、背景

研究に至った経緯、背景についての説明をお聞きすると、日頃のニュース等からの社会問題であったり、身近な問題に目を配ったものであったりと国内外における課題に高校生として様々な視点で問題意識を持たれていることがわかりました。

研究はそれぞれ簡単なものではなかったと思いますが、それぞれが持たれた問題意識、また一部には先輩から受け継いだものもありましたが、それらに関し具体的な実証・実践を行ったもの等、成果に至るプロセスに時間を要したものも見受けられました。さらには、この発表に向けて纏められたことに敬意を表します。内容もさることながら、このプロセスそのものが皆さんの大きな財産にもなったのではないかと思います。

#### ⑤ 所感

短い発表時間の中で伝えるべき内容を絞ることは簡単ではなかったと思いますが、①問題意識、②研究テーマの設定、③情報収集と分析、④成果・纏め というプロセスにおいて、一部議論の飛躍を感じるようなもの、あるいは活動の羅列になっているものもありました。研究という観点からは、仮説の設定において、少し絞り込む、あるいは定義づけをしっかりと行って進めていくことが良い研究に繋がるのかと思います。

また、研究成果を学校内をはじめ多くの人に聞いてもらう機会を是非作ってください。

⑥ 結び

多くの研究発表はまだ続きがあるようにも受け取りました。是非、またこの続きを進めて頂ければと思います。

最後になりますが、審査委員長として皆様の研究作品に触れることができたことはたいへんな光栄、かつ大きな学びになりました。この機会を与えていただきました大会役員および事務局の皆様にお礼を申し上げ、また参加された高校生の皆さんの熱意に敬意を表し、私の講評とさせていただきます。

# 「アウトプット・プロジェクト」が自分と世界を変える

青森県立大湊高等学校 臨時実習助手 南澤英夫

## I はじめに

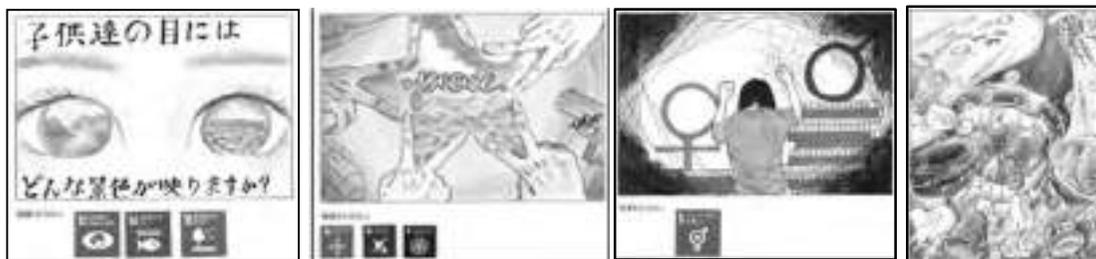
国際教育に本格的にかかわるきっかけとなったのは、平成7年度に参加した、JICA 教師海外研修（パラグアイ）と平成8年度から2年間活動した、青年海外協力隊（現 JICA 海外協力隊：マレーシア・日本語教師）、そして、平成31年から令和2年のフィリピン・マニラ日本人学校での2年間の経験も、日本を見つめなおすきっかけとなった。多くの国際教育の仲間から刺激を受け、自分なりの国際教育を実践してきた。

今回はその内容を振り返り、特に「アウトプット」「チャレンジ」「プロジェクト」の三点にポイントを置いて、国際教育の取り組みを紹介したい。

## II 実践

### 1 アウトプットの方法を考える①「ポストカード・プロジェクト」

この実践は、現代社会のSDGsの学習後、身近なSDGsについて考え、ポストカードとして表現させるプロジェクトである。ポストカードは、思いと工夫が詰まった素晴らしい作品が生まれてだけでなく、自分の作品の意図や背景を伝えるプレゼン力が向上した。



### 2 アウトプットの方法を考える② 「SNS時代の表現法＝CM制作」

国際社会と人類の課題を学習した後、自分たちが持つ社会に対する問題意識を伝えるCM制作を行った。

CM制作は、ポスターなどの平面作品とは違い、画像、映像、テロップ、ナレーション、音楽などを含んだ総合芸術の要素を持っている。現在の高校生はスマホやタブレットなどの活用能力が高く、目を見張るような作品を作り上げる。まさにSNS・インターネット・スマホ時代だからこそ簡単に取り組める自己表現方法である。



マニラ日本人学校 3年生の作品（2019年・社会科）  
肌の色から多様性を考えさせるCM  
ダブル（ハーフ）の多いマニラ日本人学校の生徒が、自分ごととして制作に取り組んだ。  
2019年 日弁連主催 憲法動画コンテスト優良賞受賞



青森県立田名部高等学校 1年次 (2020年・現代社会)  
 自分の考えるSDGsについてCM  
 薬物問題について知らべたあと、特に身近な処方薬物の乱用についてまとめた作品。



マニラ日本人学校 1年生 (2019年・社会科)  
 フィリピンでは日本以上に薬物問題が深刻である。薬物と自分たちのかかわりを考えさせるCM  
 日本語版と英語版を制作しフィリピンの人にも伝えた。  
 この映像は英語版のCMである。

### 3 アウトプットの方法を考える③ 「世界同時授業への参加」

世界同時授業は、2019年から、中国蘇州日本人学校の先生が中心となり、世界各国の海外日本人学校・日本国内の学校をつなぎ、主にSDGsについての研究発表と交流を中心としたオンラインの場である。

交流の仲間が世界各地にいることで、例えばタイでは野生の象の問題について、ドイツでは流入するシリア難民について、フィリピンでは学校で取り組む絶滅危惧種の樹木の保存など、ワールドワイドな問題が提起された。また、小学校～高校まで参加しているが、小中学校の研究レベルは高く、中学生がプレゼンした「ドラえもんの便利アイテムが実現される時期を、二次関数によって証明する」など、高校生が大きな驚きと刺激を受けることになった。高校の横のつながりは多くあるが、校種を越えた縦のつながりは、とても新鮮でかつ刺激的であり、小中高校とも多くの学びがあった。

### 4 評価を外に求めチャレンジする 「外部コンテストの積極的活用」

生徒の学習の成果を、学校内にとどめるのではなく、積極的に外部のコンテストへの参加すすめている。

コンテストへの応募は、自分の時間を使って取り組む自主的な学びである。学校での学びから外の学びに目が向き、歩き出した生徒が多く現れた。生徒の中に「自分も！」という思いが芽生え、それがまた相乗効果となり生徒が生き生きと動き出す。外部コンテストへの参加は、チャレンジしたこと自体に意義があり、結果ではなくその行動を評価した。その結果、生徒たちも挑戦することの意味・価値がわかるようになった。

#### 応募例 (2021年度 青森県立田名部高等学校での応募)

- ①金沢工業大学主催「2045年理想の脱炭素社会エッセイコンテスト」大賞
- ②ナレッジ・イノベーション・アワード 高校生部門 優秀賞
- ③手作り紙芝居コンテスト 優秀賞・博物館館長賞 2作品受賞
- ④JICA 国際協力エッセイコンテスト 学校賞
- ⑤SDGs クリエイティブアワード 参加 など

### 5 プロジェクトで世界を変える ～学びを行動に 動き出す高校生～

日々の学びが、自分を変え、社会を変える行動に結びついてほしい。自分たちが行

動を起こし、社会を変えるプロジェクト。そのようなプロジェクトが次々立ち上がり始めた。プロジェクトは、自分の興味・関心のあるものを選び、または、自分たちで探し出し、勉強や部活動などの時間を考え併せ、「無理せず、楽しく、できる事を、できる時に」というスタンスで取り組ませた。

①SDGs クリエイティブアワード (2021年)



③中村哲写真展プロジェクト (2019年)

④ウクライナ緊急支援 (2019年～)

⑥服のカプロジェクト (2019年～)

⑦おにぎりアクション (2019年～)

⑧薬物乱用防止広報啓発映像制作 (2007年・2008年 青森県立むつ工業高等学校)



青森県立むつ工業高等学校 3年生 (2008年・社会科)  
研究テーマを「薬物と国際問題」とし、警察や国際的な薬物問題の担当官などへのインタビューをもとに研究  
この映像はその過程で制作した薬物乱用防止のCM  
2008年薬物乱用防止広報啓発映像 文部科学大臣賞受賞

⑨ 平和祈念映像の制作 (2005年 青森県立むつ工業高等学校)



⑩ インドの NGO 支援活動 (1999年～2012年 青森県立むつ工業高等学校)

⑪ 投票率向上プロジェクト (2021年 むつ市内3校合同プロジェクト)



選挙に行こう

呼びかけ CM

投票の仕方

⑫ 下北 BOUSAI ネットワークの取り組み (2022年～下北管内5校合同プロジェクト)



一 下北 BOUSAI ネットワークとは？

防災教育の普及・拡大を目的として、青森県下北管内にある県立学校5校が協同して取り組むプロジェクトである。地域の生徒の防災意識の高揚、知識、技術の定着だけでなく、災害弱者に対応したグローバルな防災教育についての研究・実践、ネットワークの構築を目指している。

### Ⅲ 実践全体に対する評価および課題

第一に、学びを様々な形にアウトプットさせることで、学びを集約し、自分自身と関連付け、自分のスタイルで表現できるようになった。そして、自分の考えを発表することで、プレゼン力、コミュニケーション能力が高まった。そして、何よりも自己肯定感が高まり、自信をもって取り組む生徒が確実に増えてきた。

第二の外部コンテストへの参加は、参加すること、チャレンジすることを評価したことで、何事にも前向きに取り組む生徒が増えた。その仲間の姿を見て、「自分も！」と考える生徒がさらに増えるという好循環を生んでいる。

第三のプロジェクトの実施は、生徒の自主性を伸ばし、自分と地域、自分と世界との結びつきを気付かせ、さらに社会の一員として、より良い社会を作っていくという、生徒の可能性、社会のダイナミズムを生み出している。

特に他校や地域との連携プロジェクトは、「政治的無関心」や「どうせ変わらない」といった意識を大きく変えている。生徒のプロジェクトを見守る保護者や地域社会からの評価は、生徒の自信をさらに深めさせてくれた。

知識では測れない「学びに向かう力」。その先にある「自分自身を変える力」そして、「よりよく社会を変える力」へとつながっている。

ひとつひとつのプロジェクト後も違うプロジェクトにその経験が生かされる。PDCAのサイクルが様々な場面で生きている。その活動の中で生徒は成長し、自分や仲間、地域の力を知ることになった。

### Ⅳ 学習指導要領の評価とアウトプット・プロジェクト型の学びについて

平成 30 年度の学習指導要領改訂により、各教科における評価が「知識及び技能」「思考・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」に変わった。特に「学びに向かう力・人間性等」については、観点別評価や評定になじまないことから、個人内評価を通じて見とることが必要となった。観点別学習状況評価の枠外に示された「感性・思いやり」など観点であり、「個人内評価」として、一人一人の良い点や可能性、成長について評価するものである。

生徒のレポート、ポスター、動画などの作品、プロジェクトワーク活動は「個人をみとる方法」として有効である。さらに、様々な作品やプロジェクト活動は大学入試（推薦・総合型など）で、大きな力になっている。アウトプット・プロジェクト型の活動は生徒を多角的に評価でき、かつ、多くの可能性を見出すことができる。

### Ⅴ まとめ

今回の実践で生徒に手にしたのは「夢と希望」「可能性」「連帯」そして、「自信」であった。学習成果はひとりひとりにかえり、そして、その行動は地域社会を変える動きにつながっていった。知識が単なる知っているという段階の知識としてではなく、何かを変える、何かを動かす力に、きっかけになってほしい。そして、その力が自分たちにあることを信じての欲しい。そのためには、表現すること、挑戦すること、共同すること、行動することが重要である。そのことを強く感じる実践となった。

# FURUSATO EXCURSION 2022&2023

～地域とつながる国際交流を目指して～

石川県立小松高等学校 教諭 福岡輝樹

## 1 石川県高等学校国際教育研究協議会について

私が所属する石川県高等学校国際教育研究協議会（以下、国際教）は「高等学校生の国際性の涵養と国際協力のための健全な知識の普及と異文化に対する包容力を養うことに資する」ことを目指して活動しています。今回の発表では、国際教の最大の行事である FURUSATO EXCURSION について紹介させていただきます。

## 2 FURUSATO EXCURSION について

県内在住の高校生が、県内の大学に通う留学生や JICA 北陸の研修生と地域へ遠足に行き、そこで郷里が誇る伝統工芸や文化と一緒に体験したり、行き先に関するテーマでディスカッションしたりしながら親睦を深めるという国際交流イベントです。この行事を通じて、参加生徒たちは、郷土への理解を深めると同時に、自分たちとは全く異なる文化的背景を持つ人々へ自国の文化や自分自身のことを伝えたり、海外にルーツを持つ人ならではの視点からの考えや、出身国の伝統工芸や文化の話の聞いたり、違いを楽しみながら、見聞を広めています。

## 3 これまでの取り組み

国際教が FURUSATO EXCURSION を始めてから今年で 11 年目となりました。以下はこれまでの活動内容です。

2014 年度	ゆのくにの森	伝統工芸体験
2015 年度	高岡瑞龍寺	北陸新幹線に乗車
2016 年度	金沢市内	ミステリーツアー (市内の観光地を巡り、お題に沿った写真撮影するなどタスクをこなす)
2017 年度	兼六園	高校生によるツアーガイド
2018 年度	九谷焼資料館	絵付け体験
2019 年度	金沢湯涌みどりの里	そば打ち体験
2020 年度・2021 年度	新型コロナウイルス感染症拡大により中止	
2022 年度	九谷焼資料館	絵付け体験
2023 年度	金沢市内	和菓子作り体験



#### 4 FURUSATO EXCURSION の内容

2022年度は石川県能美市にある九谷焼美術館へ行きました。石川県の有名な伝統工芸品である九谷焼を軸に国際交流活動を展開していきました。まずはアイスブレイクを兼ね **Make Friends Activity**（自己紹介と共通の話題作りを目的とした活動）を行い、お互いに話しかけやすい雰囲気を作りました。場が和やかになったところで、参加している高校生による、九谷焼とはどのようなものかを留学生や研修生に向けて説明するプレゼンテーションがありました。発表してくれた高校生たちは人前で、英語で話すことに緊張しつつも、九谷焼の歴史や作品が現代社会の中でどのようにアレンジされて使われているかなどニコニコしながら話してくれました。発表を聞いたあと、参加者はグループにわかれて、自国の伝統的なデザインについて、歴史や込められている意味、あるいは象徴しているものなどについて紹介しあう、グループディスカッションをしました。その後、ディスカッションの中で初めて知った異文化のデザインを取り入れながら、九谷焼の絵付け体験に向けて下絵のデザインを行いました。



した。中国の瑞雲と日本の青海波を組み合わせたたり、マサイ族の矢をモチーフにしたデザインを取り入れたりと、国際色豊かな図案が仕上がりました。体験館の工房で絵付けのレクチャーを受けた後、お皿への絵付けをしました。体験館の講師の方の説明は日本語によるものだったので、高校生たちは必要に応じて筆の使い方や釉薬の置き方などについて、身振り手振りを交えながら伝えていました。絵付け体験の後は和やかな雰囲気ですそれぞれのデザインについての感想を交換したり、交流

を通して友だちになった人と国や文化のことについて自由に会話を楽しんだりしていました。その後、1日の感想をカードに書き、他の参加者と組み合わせてタペストリー状に壁に貼り、お互いに読んだり、また会話を楽しんだりしていました。交流会の最後の活動としては、仲良くなった人同士で手紙の交換をし、封をして、家に帰ってから読むという約束をして、思い出とワクワクを持ち帰りました。後日、絵皿は全て無事に焼き上がり、参加者の手元に届けられました。参加した高校生の中には、この日の体験をもとに原稿を書き、県のスピーチ大会で異文化交流の大切さを訴えた生徒もいました。その言葉の中にもあったように、地元石川の伝統工芸である九谷焼



を土台に、様々な文化のアートが融合するとともに、参加者たちのハートが和やかに交流する良い時間を過ごすことができました。

2023年度も基本的には同様の流れで交流を進め、和菓子作りの体験を行った後、石川の台所として有名な近江町市場でグループに分かれ、自由に散策し、昼食をとりました。市場に並んでいる様々な食材について、留学生に説明をしながら、和気あいあいと何を食べるかを班ごとに決めていました。食後には、食べたものの写真を全体に示しながら、選んだ理由や食べた感想などを交換しました。同じ食卓で同じ食べ物を食べることが同じ経験を同じ時間に得ることとなり、会話が弾み、さらに親睦が深まったようでした。

## 5 コミュニケーションを促す働きかけ

### ①Make Friends Activity

アイスブレイキングとして、参加者が安心して活動できる雰囲気を作ることで、参加者同士がお互いのことを知り、再び話しかけるためのきっかけを作ることを目的として行いました。写真のように、ネームカードに名前だけでなく、好きなもののイラストを3つほど描いておくことで、話題を得やすくなります。また、イラストを見て相手が何に興味があるのかも事前に知ることができるので、共通の話題をあらかじめ確認できるのも参加者にとっては会話をスタートしやすい状況であったようです。



### ②グループディスカッション

ディスカッションを始める前に2種類のバランスを意識してもらうように参加者に伝えました。1つは話題のバランスです。今回は各文化の伝統的なデザインについてお互いに紹介し合うディスカッションだったので、グループメンバー全員の持ちネタ全てに話が至るように“**How about you?**”など簡単な表現を使いながら話題を振るように意識してもらいました。もう1つは、話す時間のバランスです。グループの全員がだいたい同じくらい話す時間やきっかけを持てるように、話を振るように意識してもらいました。また、グループメンバーへのリスペクトの気持ちも大切にもらうように伝えました。相手へのリスペクトの示し方として、どんなに変わった内容の話であったとしてもまずは、“**That’s interesting.**”と言って受け止めるということと、相手へ質問することが相手の話に興味があると示すことになり、積極的に尋ねるように伝えました。しかし、ただ質問するようにと伝えても、英語に自信がなかったり、そもそも質問が思いつかなかったりすることもある



ので、“**When do you use this design?**” “**Where do you use this design?**”など疑問詞を変えるだけでいろいろと質問できる例なども示しました。時間を区切り、メンバーを入れ替えながら何度もディスカッションを行ったのですが、回を重ねるごとに参加者たちもコツを掴み、質問のバリエーションも増やしながら、活発なディスカッションを展開していきました。

## 6 参加者のスピーチより

Food became a source of conversation, and I became more and more willing to talk to them. It's easy to become friends when we break bread together. By the time we finished eating lunch, we became friends. Breaking bread together brings people together.

This could also be said about world peace. I believe by breaking bread together, people can start to talk. The food in front of you will be a good topic to start. Eating the same food at the same table means having the same experience at the same time. You can share your feelings and thoughts about what you are eating. Then you can talk about common food or traditional food in each country. Everyone has their own food culture, because we are all humans and we must eat.

If we learn about each other's culture, we can understand each other more deeply! While you are enjoying a conversation, it doesn't matter what gender you are, what age you are, what country you are from, or anything else. We can develop a better understanding of each other on an equal footing.

Just as I have bonded with international students by eating food with them. Let's dine at the round table! This is the first step to understanding each other. Through food, people can learn about the values of various countries. This will lead us to respect the differences in thinking and behavior.

## 7 今後の展望

まだ取り上げたことのない、農業や祭り、ニッチ産業などを体験的に学んだり、デジタル技術などを用いて能登地区の魅力について触れ、紹介したりする交流の機会を設けるなど、石川県の様々な地域の特色を生かした題材を通して、高校生が国際人としての資質を磨く時間を提案していきたいと考えています。



## 50年ぶりのユネスコ教育勧告改正(2023年11月)から展望する高等学校で育成する国際理解の資質・能力-高等学校の先導的な海外研修に着目して-

兵庫県立神戸商業高等学校 教諭 藤井三和子

### 1 はじめに

昨年11月20日、ユネスコ第42回総会においてコンセンサス(全会一致)で採択された「平和と人権、国際理解、協力、基本的自由、グローバル・シティズンシップおよび持続可能な開発のための教育に関する勧告」は1974年の「ユネスコ国際教育勧告」を改定するものである。国家の枠を越えて、国際理解と国際協力で世界平和を実現しようとするユネスコが発した国際理解教育に関する唯一の勧告である。

新勧告では、様々なキーワードが出てくるが、まず、「教育」の定義を紹介したい。

「教育」は不可侵の人権である。教育とは、生涯にわたる社会全体の中でのいとなみであり、すべての人は、その営みを通じて学んでいく。地域、国家、地域圏、そしてグローバルなコミュニティと生態系のなかで、またそのために、人格の全体性、尊厳への感性(sense of dignity)、才能および精神的・身体的能力を最大限に伸ばす可能性を、すべての人が獲得することである；

そして、その教育の活動は、「すべての人が対象」で、「あらゆる文脈」で、「さまざまな教育様式や教育方法」でおこなわれるもので、本勧告が生涯にわたる、公正かつインクルーシブな視点を持つことを説明している。

新勧告で注目すべき点は、II目的-6にある基本的な「読み書き計算」能力の基礎のもとでの「12の学習目標」と新勧告の目的を達成するため、教育が変容的で質の高いものでなければならないとした上で、14の主導原則(Guiding Principles)にある。

「12の学習目標」は、目標という表現であるが、知識およびスキル、価値観、態度、行動として資質・能力として読み取ることができる。

- ①分析的でクリティカルな思考
- ②未来を見通すスキル
- ③多様性の尊重
- ④自己への気づき
- ⑤共通かつ多様である人類と惑星地球への繋がりと帰属の意識
- ⑥エンパワメント、エージェンシー(主体性)、レジリエンス(回復)
- ⑦意思決定スキル
- ⑧協働するスキル
- ⑨適応し創造するスキル
- ⑩シティズンシップ・スキル
- ⑪平和的紛争解決と変容へのスキル

## ⑫メディア情報リテラシー、コミュニケーション、デジタル・スキル

さらに本勧告の目的を達成するために14の主導原則が置かれている。

- ① 質の高い教育は公共かつ共通の財／善(a public and common good)であり、すべての人が享受できるようにすべきであることを認識する；
- ②すべての市民的、文化的、経済的、政治的・社会的権利、および発展の権利を含む国際法および国際人権法に明記された権利およびそれに対応する義務にもとづいて、人権の推進と擁護を目的とする；
- ③人種、皮膚の色、世系、ジェンダー、年齢、言語、宗教、政治的意見、民族的、種族的(ethnic)および社会的出身、出生に関わる経済的・社会的条件、障がい、その他いかなる背景にかかわらず、国際人権法で規定されているように、教育において、また教育を通じて、差別されないこと、インクルーシブであること、公正であることを確保し、同時に学習者を権利を持つ者(rightsholders)としてエンパワーする；
- ④コンヴィヴィアル（共生的）な関係性や隣人意識、所属感を醸成するという視点から、互恵性(reciprocity)と共感共苦(compassion)の心を培い、ケアの倫理と連帯を促進する；
- ⑤ジェンダー平等を教育において、また教育を通じて推進する。それは、すべての人の教育への権利を実現し、女性と女子をエンパワーする鍵である；
- ⑥すべての人が教育への権利を有し、インクルーシブで質の高い教育への公正な機会が保障されるべきであることを認識する。
- ⑦すべての学習者、教員および教育関係者の安全、健康とウェルビーイングが保障され、向上がはかれることを確保する；
- ⑧教育と学習を、切れ目なく、生涯にわたる、生活の全てを包み込んだ、ホリスティックかつヒューマニスティックで、変容的なプロセスとして認識する；
- ⑨すべての学習者が、差別されることなく、積極的に知識を創造し、かつ共に創造することを、すべての教育の政策立案者や指導的立場にある者、教員および教育関係者が認め、評価し、認識を促進する；
- ⑩思想、良心、信条および宗教の自由を保障するとともに、表現と意見の自由を保障する。
- ⑪とりわけ、既存の、また将来のテクノロジーを倫理的に、かつ責任を持って利用することを通じて、コミュニティ、地域、国家、地域圏、そしてグローバルレベルでの問題解決に積極的に関わられるよう個々人が力量をつけるとともに、意欲を高め、エンパワーし、支援する；
- ⑫地域とグローバルの相互関係を強調し、教育が国際的かつグローバルな視点を持てるようにする；
- ⑬民族・社会・国家内およびそれら相互間の友好関係の発展を支援する；
- ⑭個人、コミュニティ、社会、国家、天然資源および生態系の相互依存の高まりを認識するとともに、プラネタリー・バウンダリー（地球の限界）のもとで、あらゆる人々の利益のために、グローバル・シチズンシップの倫理観と、平和と人権、持続可能な開発に対する共同責任を培う。

新勧告では「平和」と「人権」に重点を置いていること、そして人類中心ではなく、惑星地球の視点からのアプローチがあることが特徴となっている。

## 2 高等学校の先導的な海外研修（SGHとユネスコスクール双方に指定されている15校）の検討

本発表ではスーパーグローバルハイスクール（以下SGHと表記）とユネスコスクール（以下USと表記）の双方に指定されている15校の海外研修がどのように教育活動において位置づけられ、どのような国際理解の資質・能力の育成が行われているかをユネスコの新教育勸告（2024）を手掛かりに検討する。分析は、各校のホームページの記載、SGHの活動に関しては、各校のSGH報告書や文部科学省のSGH専用ホームページ（<https://sgh.b-wwl.jp/>）、USの活動については各校ホームページとユネスコスクールホームページ <https://www.unesco-school.mext.go.jp/>の記載をもとに、2018年度及び2019年度の海外研修に限定して分析した。

	SGH 指定年度	都道府県	学区 区分	学校名
1	H26	宮城	北	宮城総合高等学校、高等学校
2	H26	埼玉	南	筑波大学附属新戸高等学校
3	H26	東京	北	昭和女子大学附属昭和高等学校
4	H26	東京	北	渋谷政府学園渋谷高等学校
5	H26	岐阜	中	国立北沢北高等学校
6	H26	岐阜	北	国立北沢中・高等学校
7	H26	兵庫	中	神戸国立西宮高等学校
8	H27	兵庫	中	国立国際情報高等学校
9	H27	徳島	南	名古屋大学豊田平岡附中・高等学校
10	H27	兵庫	南	神戸大学附属甲子園高等学校
11	H27	兵庫	中	国立兵庫高等学校
12	H27	大阪	中	国立東淀高等学校
13	H27	鳥取	中	国立鳥取西高等学校
14	H27	広島	中	国立広島中学校・広島高等学校
15	H28	宮城	北	国立宮城国際高等学校

## 3 海外研修の分析の視点

①参加人数、②海外研修の期間、③海外研修のフィールド、④生徒の活動、⑤使用言語の5つを分析の視点とした。

## 4 海外研修の分析

《まとめ》

15校の海外研修は、全体で60件のうち探究活動を中心とするものが52件（87%）。アジア諸国が32件、米国5件、カナダ2件、オーストラリア4件、欧州9件であった。

国際交流を中心とする研修は6件（10%）そのうちアジア諸国4件、米国1件、オーストラリア1件であった。語学研修中心と考えられるものは、2件（3%）、カナダ1件、米国1件。

《アジア諸国でESDを探究課題として取り組む事例》

□神戸市立葺合高等学校では、フィリピンの貧困問題を教育環境の改善という視点から現地で調査し、解決に向けた提言を英語で発表。

（葺合高等学校第平成31年度5年次SGH研究報告書）

□兵庫県立兵庫高等学校は、ベトナムで現地の高校生と地域の河川の水質調査や市場の衛生状況を調べ、環境保全のプロジェクトを現地の高校生と行い、英語で議論。

（兵庫高等学校令和元年度SGH完了報告書）。

□宮城県立仙台二華高等学校である。世界の水問題解決の取り組みのため、地元の北上川と東南アジアのメコン川をフィールドとして、流域のタイでフィールドワークを、JICAをはじめ、国内外の機関や大学との連携の上で実施している。現地や帰国後の成果報告は英語を使い、国際支援活動を行う上での、日本と現地での考え方の違いや難しさが報告されていた。  
(仙台二華高等学校平成30年度研究開発報告書)

## 5 考察

- ①参加人数は少数である。予算内で意欲のある生徒が選抜されている。とくに現地との協働活動がある場合は人数が少なくなる傾向がある。一部の生徒の経験をどのように学校全体に反映させるのが課題か。
- ②期間は8日前後が一般的であるが、アジアでは4日程度でも実施されている。
- ③フィールドはアジア、欧米など目的に応じて決めている。  
ホームステイはアジアでは英語の話せる家庭など生活水準が高い傾向がある。あえて、英語の通じない家庭・地域を選ぶ場合は安全面での現地でのサポート体制を確立している。アジアで英語が通じる世界でどこまで現地の理解ができるのか。想定する現地の人とは？
- ④海外研修の目的
  - ・生徒の課題研究のフィールドワークの一環（ユネスコスクールのESD）
  - ・自らの課題研究の成果を発信するため。英語での発表を聞いてもらい意見をもらう
- ⑤使用言語はアジアであれ欧米であれ英語を使うことを意図的に取り入れている。

## 6 ユネスコ教育勧告（2024）を手掛かりとした海外研修の可能性

学校で行われる海外研修は、機会の平等という観点からは、実施人数など限界がある。しかし、ユネスコ教育勧告（2024）の14の主導原則の中に出てくるコンヴィヴィアル（共生的）な関係性や共感共苦(compassion)の心を国際的かつグローバルな視点で持つことは、教室の中では難しい。自分の文脈から離れ海外に行くことには大きな可能性がある。コンヴィヴィアルには「共生的」のほかに「わくわくするような」という意味もある。海外へ出かけ、現地の人たちと共感共苦とわくわく感を共有することができる場を作り出すことはユネスコの目指すことにつながる。

## 引用文献

「平和と人権、国際理解、協力、基本的自由、グローバル・シチズンシップおよび持続可能な開発のための教育に関する勧告（日本国際理解教育学会有志・暫定訳）」 日本国際理解教育学会「1974年ユネスコ教育勧告改定記念イベント」報告書, pp.102-125, 2024

文部科学省 スーパーグローバルハイスクール(SGH) 事業検証に関する中間まとめ, 文部科学省初等中等教育局国際教育課, 2018

ユネスコ年次活動調査(概要・結果) 2017年度, 2018年度, 2019年度 <http://www.unesco-school.mext.go.jp> (2024.5.5 最終閲覧)

## 「本校における多様なオンライン国際交流～その工夫と実践～」

### ～石桜精神と先駆けの精神で突き進む！～

岩手県(私立)岩手高等学校 教諭 田中 佳恵

#### (1) 岩手高等学校について

本校は1926年(大正15)の創立以来、98年の伝統を誇る東北地方唯一の男子校(普通科)である。盛岡駅から徒歩10分、官公庁通りに面した盛岡の中心街に位置し、盛岡の主要な観光名所に囲まれている。盛岡の名勝「石割桜」にちなんで不撓不屈、質実剛健の気風を表す本校のスローガン「石桜精神」の涵養が、建学の精神となっている。岩の割れ目から育った石割桜のように、在学中は学問やスポーツに自己の鍛錬のために耐え抜いて、社会に出て大きな花を咲かせている卒業生が各界に多くいる。先輩と後輩の絆が強い校風である。



#### (2) 高校入学時の本校生徒の英語に対する意識と現状

入学以前から多くの生徒が「英語が苦手」、「勉強の仕方がわからない」と悩んでいる。しかしながら、90%の生徒が進学を目指している。英語は単なる受験科目としてだけでなく、将来の仕事などでも必要であると認識はしているようだ。英語が話せる人物に憧れる一方で、入学時から自分には無理だと諦めている生徒も毎年見受けられる。また、留学を希望する生徒もいるが、部活動の大会遠征で日々忙しいことや、円安になり経済的な理由から、諦めざるを得ない状況にある。しかし、「自由に英語を話せるようになりたい」という前向きな気持ちはある。

#### (3) オンライン国際交流との出会い

このような現状において、生徒達が英語を克服し、自信を持って学べる環境を提供する必要があると常日頃考え続け、試行錯誤してきた。

2020年コロナ禍となり、対面式の交流や留学がますます困難となった。そんな時、岩手県国際交流協会が主催する「県内在住の外国人とのオンライン交流」という企画を目にし、試しに国際交流部員と一緒に私も参加してみた。オンライン交流の利便性と手軽さに感動し、私はすぐにこの新しい方法を本校の英語教育に積極的に取り入れることを決意した。

#### (4) オンライン国際交流の導入の壁と周囲の理解

導入当初は、部員とオンライン交流のイベントをネットで探して積極的に参加したり、地元の知人の紹介で台湾の学校を紹介してもらったり、SNS で海外の高校生とコンタクトを取りながら楽しくオンラインで交流していた。しかし、英語の授業に取り入れようとした際には、教科書以外のアプローチや新しい取り組みを提案したため、難色を示すクラス担任や保護者が現れ、オンライン交流の価値を理解してもらうことに苦労した。また、国際交流が主に英語に結びつけられているイメージから、最初は、他教科の教員は無関心だった。しかし、交流の様子を伺いに來た教員が、生徒たちの楽しそうな表情や日常では見られない意外な一面を目撃し、経験を重ねるごとに理解を深め、徐々に協力してくれるようになっていった。特に、国語科と世界史の教員が、交流先の国について知識を授業で触れてくださり、生徒にとってヒントとなり、私も助けられた。

#### (5) オンライン交流のメリット

いつもの教室から、いつもの仲間と一緒に、ドキドキしながら、気軽に楽しく、短く限られた時間の中で、集中力 MAX で交流できるオンライン国際交流は有益であった。経済的な負担がなく、留学に行かなくても海外の同年代の高校生と話ができて、知らない世界を垣間見ることができるのは大きな利点である。特に仲間と一緒に助け合いながら交流できることは、彼らにとって心強く、交流前も交流後も仲間との日常会話の中に海外を意識した話題が出るようになり、自ら調べたりするなど、英語に向上心が高まるだけでなく、多文化理解、世界情勢を知るきっかけとなっている。

このような取り組みにより、生徒たちが、いつの間にか英語に対する自信を持つようになり、将来に向けたモチベーションを高めることができると期待される。

#### (6) オンライン国際交流の形態の変化

本校は、2020 年度から 2023 年度にかけて、15 回以上のオンライン国際交流を実施した。最初は国際交流部の活動として、岩手県国際交流協会のオンライン交流から始めたが、台湾の高校生との出会いをきっかけに、オンライン国際交流の楽しさを広めるため、活動の幅を次のように徐々に拡大していった。

1. 国際交流部員＝部活動として
2. 国際交流部員＋校内の有志生徒（希望者）＝放課後に集まって
3. 国際交流部員＋岩手大学の中国人留学生＝共同文化研究として
4. 国際交流部部員＋生徒会執行部＋有志生徒（希望者）＝特別イベントとして
5. 英語授業＋総合の時間（探究学習）＝探究学習として（各担任も参加）
6. 英語授業＋総合の時間（探究学習）＋ ICT 教育（一人一台 PC 活用）＝学校行事として

交流のスタイルや内容は様々で、その都度、創意工夫を心がけてきた。これまでの交流相手国は台湾、インド、インドネシア、フィリピンの高校生である。国際交流部においては、岩手大学の中国人留学生と共同研究をおこない、オンラインで交流しながら打ち合わせを重ね、学校外の会場を貸切って、研究発表会を対面で実施した。

## (7) 交流を継続するために努力したこと（相手校の担当教員との打ち合わせと交流）

2023年の春までは、地元の知人の紹介で知り合った台湾桃園高級中等学校と定期的に交流を、部活または英語の授業内でおこなっていた。それ以外は、国際交流部の公式Facebookのメッセージからのやりとりから始まった交流も併用していた。交流を持続させるためには、相手校の担当教員と密に連絡を取り、何度も話し合いを重ねながら準備。互いに、生徒達のメッセージ入りの年賀状やビデオレターを送り合いながら、繋がりを滞りなくするための工夫をおこなった。

## (8) 海外の学校に精通している民間のオンライン国際交流専門業者にマッチングを依頼

2023年度は、「経済産業省の補正予算探究的な学び支援の補助金」を利用し、初めて民間のオンライン国際交流専門業者に海外の学校とのマッチングを依頼した。インド、インドネシア、フィリピン、台湾の高校を紹介してもらった。専門業者にマッチングを依頼することで、自分のコネクションでは知り得ない学校と交流をおこなうことができた。また、新しい交流のメソッドのアドバイスを受け、交流の様子を第三者の視点から分析していただいた。その時の交流の企画は、本校が主体となっておこなった。

### <概要>

1. 英語授業+総合の時間(探究学習)として、オンライン国際交流を実施。
2. 対象は、英語を苦手とする高1・2総合進学コースの全生徒(6クラス 計130名)。
3. 交流を通して、英語の楽しさと世界観を肌で感じさせ、学習意欲を向上させる。
4. 生徒所有の一人一台パソコンを使用。(イヤホンマイク使用)
5. Zoomの使い方と、Power Pointのスライド共有の仕方を事前に習得させた。
6. ブレークアウトルームで少人数グループをつくる。一人一人が英語を話す状況にした。
7. 両校の一人一人が自分の街の紹介をPower Pointのスライドを共有しながら発表。
8. 本校のテーマは、“NY Times 2023 52 Places to Go”において、世界で2番目に紹介された「盛岡」の魅力を英語で紹介。郷土の魅力に気づかせ誇りを持たせる。海外生に興味を惹きつけさせるために、発表の中にクイズを入れ、海外生に答えてもらうという仕掛けをした。
10. アイスブレイクとフリートーキングの時間では、自由に絵を描きながら表現しても可。(朝食、アニメ、ゲーム、食べ物の話が多い。)紙とマジックを用意。話したくてもどう表現したらよいかわからない時は、スマホのGoogle翻訳やDeepLのアプリを活用しても可。

### <盛岡の紹介英語原稿とPower Pointのスライド>

原稿とスライドは、私の自作品を生徒全員に配布。各クラス共通。観光地の固有名詞は忠実に。教科書や受験によく出るフレーズを組み込み、交流後の学習にも役立つように意識して仕上げた。今回は、生徒達自身にテーマを決めさせ、原稿とスライドを作成させるのが目標。

### <生徒達の満足度調査の結果>

「仲間と一緒にだから心強い。仲間と共感しながら楽しく交流できた。同じ英語なのに、発音が違う。海外生は英語が上手くて驚いた。もっと英語を話せるようになりたい。」などの高評価を得ることができた。その甲斐あって、2024年度からは、本校の特色ある教育の一つとして、オンライン国際交流に対して予算をつけて取り組むことになった。オンライン国際交流を経験したことで、意欲が高まり、春休みに6名がフィリピンのセブ島に短期の語学留学へ行った。台湾やマレ

ーシアの大学進学セミナーも進路部で企画するようになった。海外の大学への進学も考える生徒も数名でてきた。交流以降の生徒の英語へ意欲は高まった。生徒達が楽しんで交流する姿を見て、各担任、他の教科担任、進路指導部長、学校長が理解を示すようになったのは収穫である。



### (9) 今後の展望(今年度の交流内容)

今年度より、学校の方針で、他の英語教員もそれぞれの担当クラスで、年に1回、オンライン国際交流を実施することになった。今後、継続性のある行事の1つにするために、海外との学校のマッチングと交流の進行は、専門業者に依頼し、教員も生徒も事前準備に無理をしないというのが条件となった。総合進学クラス全学年の合計9クラスで、9月から3月にかけて1クラス1回ずつ実施。専門業者に丸投げではなく、普段の授業の中で、海外の基本情報の提供、日本の何を紹介してみたいのか、海外生とどんなことを話してみたいのかななどを、考えさせて発表させることは必要だと思う。

国際交流部においては、これまで交流してきた台湾の高校生と地元の留学生と、ますます深く発展的な交流をおこない、独自の企画で継続していく。外国人観光客に盛岡のマチナカの紹介をしながら、対面交流もおこなっている。

### (10) これまでのオンライン国際交流の実績(国際交流部・英語授業・総合学習)

2020年～	岩手県主催「県内外国人とのオンライン交流会(月1回)」	県国際交流協会主催
2020年8月	インド人高校生とのオンライン交流会体験モニター参加 国際交流部員&希望者生徒 4名 @各自宅からアクセス	インド人高校生
2021年6月	(企画)国際交流部員&生徒会&台湾桃園高級中等学校 全校生徒希望者 43名参加@本校体育館	台湾桃園高級中等学校
2021年8月	国際交流部員&希望者生徒 4名 @各自宅からアクセス フィリピン「ゴミ問題」について現地の高校生から学ぶ	フィリピン人高校生
2021年10月	英語授業 高2特進クラス 30名「お互いの街紹介」	台湾桃園高級中等学校
2021年12月	英語授業 高2特進クラス 30名「Food& Money 紹介」	台湾桃園高級中等学校
2022年1月 2022年3月	国際交流部員&希望者生徒 12名「アニメとゲーム」放課後	台湾新竹科学実験中等学校
2022年4月	国際交流部「オンラインで一緒に盛岡さんさダンス」	台湾桃園高級中等学校
2022年 6月～8月	(企画)国際交流部員&岩手大学中国人留学生6名 「盛岡さんさ踊りとさんさに似た中国の踊り」共同研究	岩手大学中国人留学生
2022年10月	英語授業 高2特進クラス「学校施設オンラインツアー」	台湾桃園高級中等学校
2023年3月	英語授業 高2・高3特進クラス「ビデオレター」交流	台湾桃園高級中等学校
2023年 11月～12月	「経済産業省補正予算探究的な学び支援補助金」を利用。 総合の時間(探究学習)高1&高2総合進学クラス(130名) 一人一台パソコン。	インド・インドネシア フィリピン・台湾高校生
2024年9月～	英語授業予定 高1・2・3総合進学クラス(264名)	相手国 未定

## オンラインで教室での学びを超える

### ーアートマイル国際協働学習プロジェクト等を通してー

宮城県宮城野高等学校 教諭 鈴木 幸恵

#### 要旨

2022年度、高等学校での「総合的な探究の時間」が始まり、筆者の勤務校では生徒の興味・関心に応じ12系統のゼミナールを開講している。その中で筆者は「国際・語学ゼミナール」を担当し、対面またはオンラインで担当の高校生と海外の高校生との協働学習を進めている。国際化が進み、異なる背景を持つ人々との対話、理解が必要とされる現在、こういった学びはさらに未来に向けて必要とされるだろう。しかし、実際の教育現場では様々な理由により二の次にされることが多い。この研究では、国際化に対して保守的だった勤務校で、生徒が「教室での学びを超える」と感じるような学習を実現した経緯、生徒の変容、教諭間のコミュニケーションの変化について振り返り、今後の展望に繋げたい。

#### 1 研究の背景と目的

1990年代よりインターネットを活用し、世界を基盤にパートナーとなった複数の教室の学習者が協働で学習を進める国際オンライン協働学習(Collaborative Online International learning)が世界に広がっている(山下、2021)。昨今では海外の学校からこういった協働学習の依頼が教育現場に舞い込むなど、現場を取り巻く環境が変わってきていると筆者は感じている。一方で日本人の英語力が世界の中でも低いことが多くの場面で取りざたされる。そのため2018年の高等学校の英語の学習指導要領で「話すこと(やりとり)」と「話すこと(発表)」を含めた5領域を総合的に扱うことが謳われ(文部科学省、2018)、アクティブラーニングの動きも後押しし、授業の主体が生徒に移行してきてはいるものの、日本の高校生が英語を使って何かの活動に取り組み、活動をしながら英語力を身に付ける実践例は未だ多いとはいえない現状である。

筆者は十数年に渡り、手紙、ポスター、動画などを使用して自らの教室と海外の教室を繋いで国際交流を促す授業を実践してきた。2019年の新型コロナウイルス感染対策としてZoomやMeetなどのオンライン会議が普及してからは、これらのツールを駆使し、生徒達に生の英語、海外の環境に触れさせたいと考え、自らの海外の友人と協力していくつかオンラインの国際交流の機会を設けた。2022年度からは上記の「国際・語学ゼミナール」で、海外の同世代の高校生と一年に渡りSDGsについて議論を深め、議論から生まれたイメージを元に壁画を協働で作成する「アートマイル国際協働学習プロジェクト」に挑戦し、2022年度より今年度に至るまでパキスタン、インドネシア、サウジアラビアとの協働学習に取り組んでいる。2023年度は最も優秀な活動をした学校に贈られる「外務大臣賞」を受賞することができたが、そこに至るまでは校内で国際交流活動に関する合意が得られない、生徒がなかなか自分事として活動に取り組めないなど乗り越えるべき様々な壁があった。この研究は、今回の筆者の経験を整理することで、現在現場で国際的な活動を取り入れることに二の足を踏んでいる先生方へのヒントを提供することを目的としている。

## 2 アートマイル国際協働学習の実践と生徒の反応

筆者はゼミナールが開設された 2022 年度より主に上述したアートマイル国際協働学習プロジェクトに主に取り組んでいるが、ここでは初年度のパキスタン、翌年度のインドネシアとの協働学習の実践について以下の表を用いて比較する。この協働学習において、日本側の活動は主に数人のグループ活動で進めている。また、表の中にある「論点」は、2022 年度は「日本で既に進んでいる点、進められていない点、その解決策」、2023 年度は「相手と共に深めたい疑問、提案」を表す。

表 1 2022 年度と 2023 年度のアートマイル国際協働学習の比較

年度 国	2022 年度 パキスタン	2023 年度 インドネシア
相手校	Modernage Public Girls School	SMA Saint Paulus Pontianak H.S.
参加者	日本 32 名 相手 14 名	日本 39 名 相手 25 名
SDGs	Goal 11 住み続けられる街づくりを Goal 13 海の豊かさを守ろう Goal 14 陸の豊かさも守ろう	Goal 4 安全な水とトイレを世界中に Goal 9 産業と技術発展も基盤を作ろう
論点絞り	KJ 法で 3 点を絞る	マインドマップで 1～3 点上げる
使用ツール	スライド、Zoom	スライド、動画、Zoom
SDGs と壁面に関するやりとり	計 2 段階 ・双方から論点に関するプレゼンテーションと質疑応答 ・壁面に関する合意を得るための提案 ・(最後、完成した壁面について共有する Zoom を実施できなかった。)	計 6 段階 ・論点の行き来 (プレゼンと質疑応答を含む) 3 段階 ・壁面に関する意見交換 2 段階 ・Zoom で双方から完成した壁面に関するプレゼンテーションと質疑応答 1 段階
やりとりの様子	・日本からの質問は出なかった。相手からの質問には教師が答えた。 ・どのように壁面の半分ずつを担当するか、各々の場所に何を描くかとテーマカラーを決めた。それ以外は相談せず其々で作成し報告し合った。	・日本からの質問が徐々に出て、必要に応じて教師が援助した。 ・どのように壁面の半分ずつを担当するか、各々の場所に何を描くかの詳細、目指す絵の雰囲気等も議論し合う。
生徒の変容	・班の中での協力 ・初めてのオンライン学習による期待と緊張感の中、挑戦する姿勢 ・壁面作成の際のリーダーシップ、協力	・発言、質疑応答する力 ・リーダーシップ、挑戦する姿勢 ・得意分野での活躍、チームワーク ・積極性の向上
生徒の感想	・世界諸英語への気づき ・世界への関心 ・自らの英語力、前向きな悔しさ	・やりとりが出来たことの嬉しさ ・伝えるための工夫 ・発言する喜び
問題点とその対処 (太字)	・頻繁な停電 ・相手教師の不在 ・英語の訛りと速さ	・相手教師の多忙さ ・急な Zoom キャンセル→ <b>動画投稿で代用</b> ・英語の訛り、スピード

<p>→ロイロノートでクイズにして何度も楽しんで聞けるように工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・双方のペースの差と、意向が伝わりにくい難しさ（最後の完成した壁画の共有に双方の生徒同士話す機会が取れなかった。等）</li> </ul>	<p>→1年生が聴衆になりフィードバック 非言語的コミュニケーションの活用 伝える内容と手段の調整</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一方的になりがちなプレゼン</li> </ul> <p>→双方向の議論になるように論点の流れの表をインドネシアと共有</p>
---	--

初年度は急な都合で相手の担当教師が不在になり予定が立てられなかったこともあり、スケジュールに合わせて日本側の高校生を支援するのがやっとなりで、最後に完成した壁画について共有し合う時間も相手の都合で実施することが出来なかった。しかし、日本の高校生の反応は非常に豊かで、『教室を越えて思いっきり自分を表現することが楽しい！』と思える新しい自分に出会った。」と初めてのオンラインでの協働学習に新たな可能性を見出した生徒もいた。二年目は初年度に一年生としてこの学習を経験した生徒達がより力を発揮し、相手の教師と高校生が熱心に取り組んでくれたこともあり、双方の英語力に大きな差があったものの上述した工夫を重ね、細かい点まで議論できた。日本とインドネシアの高校生の双方に実施した自己評価では、積極性や批判的思考など多くの面で自らの成長を自覚していることが伺えた。

### 3 実践までの筆者の経験

これより上記の実践に至るまでの筆者の経験を、以下の表にまとめ振り返っていく。

表2 アートマイル国際協働学習プロジェクト実践までの筆者の経験

時期	筆者の実践内容	現場での動き	筆者自身の気づき
2010	手紙、ポスター等で日本の高校生とカナダの日本語学習者間で互いの目標言語で交流		・相手の存在、目標言語としての日本語が動機付けになる
2011	日本語学習者（英語ノンネイティブ）を講師として迎え、日本の高校生と互いの目標言語で発表		・世界諸英語への気づき ・ノンネイティブとしての自覚
2012	震災後、海外の支援者（元 ALT）の想いを知る		・想いを理解しようとする姿勢
2020		本校初の海外研修コロナで中止	
2021	カナダ人（英語使用）、中国人（日本語中国語使用）友人と希望生徒とのオンライン交流	英語キャンプ構想	・伝わるかどうかの高揚感 ・やさしい日本語への意識
2022	台湾からの交流依頼 パキスタンとのアートマイル国際協働学習 国際化への反対	ゼミナール開始 本校初の海外研修	・世界諸英語への気づき ・生徒自身の英語力への気づき ・世界への関心
2023	インドネシアとのアートマイル国際協働学習 台湾オンライン・対面交流	国際交流を特色に	・やり取りが出来た嬉しさ ・流暢性の差
2024	サウジアラビアとのアートマイル国際協働学習 インドネシアとの教科横断授業の予定	海外研修予定	・国際協働学習 2 年目に取り組む生徒の逞しさ ・同僚のサポート、前向きさ

筆者は前任校では様々な形態の国際交流を自らの教室の中で展開していた。しかし2014年の転勤先である現在の勤務校では、主だった国際交流の素地はなく、2020年に初めての海外研修が企画されたが新型コロナウイルスの影響により中止となった。翌年、筆者は校内で実施できる英語キャンプを企画したが、その中で2022年からのゼミナールの話が持ち上がり、そちらに舵を切ることとなった。その年、台湾からの交流依頼が舞い込み、関係部署で話し合われたが、多忙さ等による反対が強く、話し合いの末、台湾との交流は国際・語学ゼミで実施することになった。これにより本ゼミではアートマイル国際協働学習、台湾とのオンライン交流、探究活動の三本柱で運営することになった。また、2022年度には勤務校で初めての海外研修が実施され、現在は2024年度の実施に向けて企画している段階である。

この経緯を振り返ってみると、2022年度の「総合的な探究の時間」の実施により、それまでの経験を活かし、新しい挑戦をする好機を得た。国際交流に関して反対意見があったが、それによって「日常的に学んでいる英語を実際に海外の人々とのやりとりとして使い、世界を感じさせる機会を作りたい。」という自らの思いを再確認し、実践への原動力とすることが出来た。また生徒の活動をアピールすることでモチベーションの高い生徒が本ゼミに集まり、スムーズな運営が可能になった。

#### 4 まとめ

筆者は普段から研究授業、日常の授業やオンラインの交流を試す場面を同僚に見て貰えるように案内し、「生徒が実際に英語を試す場、世界を感じられる場が必要だ。」という声を上げ続けてきた。また、生徒の活躍が国内外のメディアに報道されることで、学校内外で賛同する存在が明確になり学校の特色として打ち出す体勢が整ってきた。同僚達の間には、もっと生徒達の力を信じてみようという声、領域横断の授業の可能性の模索、それに賛同する声など、新しいものに挑戦してみようという空気が生まれていると感じる。ある生徒が、教室での学びを超え、それを面白いと感じる新しい自分を知ってはとしたように、背景の異なる人同士が繋がることで生まれる生徒の達成感、自己肯定感を高め、同世代の高校生から直接現地の問題を見聞きしたり、一緒に考えたりすることで、生徒が自らも未来の世界を担う一員だと意識できる学習を追求し、提供していきたい。

#### 5 参考文献

- 文部科学省 (2023) 『今、求められる力を高める総合的な学習 (探究) の時間 未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた 探究の充実とカリキュラム・マネジメントの実現 高等学編』  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/sougou/20230531-mxt\\_kyouiku\\_soutantebiki03\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20230531-mxt_kyouiku_soutantebiki03_2.pdf)
- 山下美樹 (2021) 「オンライン国際連携学習 (COIL) の実践と考察 : 海外パートナー校の大学院生による学習支援」『麗澤大学紀要』 第 104 巻, 105-111.
- Japan Art Mile (2023). 『未来を拓く次世代育成アートマイル国際協働学習 JAPAN ART MILE』  
<http://artmile.jp/activity/iime/aboutartmile/>

#### 謝辞

ジャパンアートマイルの塩飽理事長、副理事長、担当のヘイル様には、経験に基づく多くの助言を頂き、厳しい環境の中、実践をここまで成長させられたことに心より感謝申し上げます。

# グローバル人材の育成教育とテーラーメイド型教育の実践

愛媛大学附属高等学校 教諭 上床 孝樹

## 1 本校の概要

愛媛大学附属高等学校（以下、本校）は、1 学年 3 クラス総合学科の小規模校である。本校は 5 年間の SGH 事業を経て、令和 2 年～4 年、文部科学省の「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」に採択された。現在も、前身である愛媛大学農学部附属農業高等学校で培った知見と SGH 採択時に構築したネットワークを拡大・活用することで教育活動を展開している（図 1）。



図 1 AL ネットワーク

## 2 コロナ禍で開始された留学生生活用とグループディスカッションの充実

本校は、新型コロナ感染防止対策のため多くの海外との直接交流活動が中止となる中、高大連携・他校連携に取り組んできた。中でも愛媛大学留学生に協力いただき実施できた E カフェ（図 2）や農業実習、留学喚起ビデオ放映などは、グローバルキャンパス実現に向けた教育活動の柱と位置付けられ、生徒や教職員に変化をもたらした。中には現在も実施している活動もあり生徒の国際理解・異文化理解に大きく貢献している。また、マイナビが提供する「テレ東 BIZ」を授業内に導入し、グループディスカッションを通じて自身の考えを発信・共有する機会を創出した。生徒の満足度も 90% と高く、生徒の論理性や協調性、コミュニケーション力といった、コロナ禍で低下しつつも、変化の激しい今の時代において必要不可欠なこれらの資質能力の向上に努めている。

### 3 国際会議の実施

本校主催の国際会議「ESD Youth Summit」を毎年12月に実施している。国内外の中高生と愛媛大学留学生が、日本や世界が抱える課題解決に向けて協議し、高校生としてSDGs目標達成のためにどう取り組むべきかをとりまとめ、対外的に発信・表明することで多くの人に理念の共有を図り、「持続可能な世界」の実現を目指している（図2）。毎年、国内外の高校生100名ほどが参加してくださっているが、これまで、意見共有アプリJamboardやVR空間協議場VirbelaのICT利活用や、西日本豪雨災害を踏まえた国際防災教育体験型プログラムを実施できた点は、多文化共生社会を生きる高校生にとって意義のあるものであった。



図2 昨年度の国際会議の様子

### 4 おわりに

グローバル人材育成を目指した国際理解教育活動を展開する一方、生徒の教育ニーズの多様化や学校生活に適応しにくい生徒が微増するなど、校内でも新たな課題の対応が迫られている。現在、本校は文部科学省から研究開発学校に指定され、教科学習等において「個の特異な才能を見出し、伸ばすテラーメード型教育課程の開発」を行っており、学びの個性化と深化に取り組んでいる。生徒個々人の学力的な要素である「認知」の調査と並行して、サイバーメンタリングとして生徒の自己効力感などの状況を示す「こころのアンケート」を月に1度実施している。ホームルーム担任や教科担任が生徒個々の現状を把握することが可能となり、教材の提供や適切な声掛け等に生かしている。今後はこれまで以上に、国際関係や異文化を単に理解するだけでなく、自らが国際社会の一員としてどのように生きていくかという主体性を一層強く意識させていきたい。

## 【特別寄稿】

### 海外で学ぶ子どもたち:在外教育施設って?~補習授業校ってなあに?~

日本語を話す子供の会 ウィーン補習授業校 運営委員長 横松彩美

皆さんは海外に住んだことがありますか? または、海外駐在などで海外から帰国した子どもたちの指導をされたことはありますか?

ご指導されている生徒の中には、さまざまな事情で海外から日本の学校に通う子どもたちがいると思います。今回はその逆で、日本から海外に移り住んだ子どもたちが日本の教育を受ける場である在外教育施設について、特に補習授業校の活動に焦点を当ててお話ししたいと思います。現在私は、オーストリア・ウィーンに拠点を置く「日本語を話す子どもの会 ウィーン補習授業校」で運営委員長(会長)を務めています。とはいえ、私自身ウィーンに住んでまだ3年ですので、僭越ではありますが、私の視点からお伝えできることをお話しできればと思っています。

#### 1. 在外教育施設に通う子どもたち

海外で学ぶ子どもたちの教育環境は、下図に示すようにインターナショナルスクール、現地校、日本人学校など多岐にわたります。このうち、(1) 日本人学校、(2) 補習授業校、(3) 私立在外教育施設が「在外教育施設」と呼ばれるものです。(1) 日本人学校 および(3) 私立在外教育施設 は文部科学大臣が認定し、(2) 補習授業校 は外務大臣が基準に適合する施設を指定しています。

表1：学校の分類と在外教育施設

国際学校	所在国に設置された外国人学校であり、主にインターナショナルスクール、アメリカンスクール等と呼ばれている教育施設。
現地校	所在国の政府等が学校として設置又は認めた現地教育施設。教授言語はその国の言語が中心。
	<b>在外教育施設</b>
日本人学校	現地の日本人会の団体等が設立した全日制的教育施設であり、文部科学大臣から日本国内の小・中学校または高等学校と同等の教育課程を有すると認定されている学校。教育課程は原則として国内の学習指導要領に基づいている。
補習授業校	現地の日本人会の団体等が設立した教育施設であり、主に現地校や国際学校に通学している子どもを対象として土曜日や平日の放課後などの限られた時間を利用して国語など日本の教育課程の一部の授業を行う学校。外務省、文部科学省からの政府支援を受けている補習授業校。
私立在外教育	日本国内の学校法人等が海外に設置した全日制的の学校。文部科学

施設	大臣から国内の小・中学校もしくは高等学校と同等の課程を有する旨の認定、または相当の課程を有する旨の指定を受けている施設。
----	--

出典：外務省 HP ([https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/index.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/index.html)) を基に筆者が加工・作成

外務省によると、2023 年 10 月現在、世界各地に在住する日本人は約 129 万人であり、2023 年 4 月時点で日本人学校・補習授業校などの在外教育施設に通う日本国籍保持者の児童・生徒は約 4 万人とされています（出典：外務省「海外子女教育・帰国子女教育」）。

	日本人学校	補習授業校	私立 在外教育施設
アジア	41	27	1
大洋州	3	24	
北米	4	89	2
中南米	14	12	
欧州	21	77	3
中東	8	6	
アフリカ	3	7	
	<b>94</b>	<b>242</b>	<b>6</b>

図：在外教育施設数（2024 年 4 月 1 日現在）

文部科学省・外務省の公表データを基に筆者が作成。

補習授業校には、一時休校中の 3 校を含む。

## 2. 補習授業校

補習授業校とは、「現地校やインターナショナルスクールに通学している日本人の児童・生徒を対象に、土日や放課後などの授業時間外に、日本の教科書を用いて国語・算数など一部の教科を指導する施設」と定義されています（出典：外務省「在外教育施設に対する支援に係る指定等に関する規程」（令和 4 年外務省告示第 303 号）第 1 条）。

法律が制定される以前も、補習授業校は行政上の認定を受けており、人的・金銭的支援が行われていました。しかし、2022 年（令和 4 年）6 月に「在外教育施設における教育の振興に関する法律」が施行されたことで、補習授業校の法的な位置づけが明確になり、支援の根拠が強化されました。

この法律では、在外教育施設における教育の振興において重要な観点として、以下の点が掲げられています。

在留邦人の子どもの学びの保障

国内と同等の学びの環境整備

在外教育施設ならではの教育の充実

## 3. 日本語を話す子供の会 ウィーン補習授業校

「オーストリアの社会で生きる子どもたちに、日本語や日本文化を学ぶ機会を提供した

い」という思いから、1983年4月に「日本語を話す子供の会」が発足し、同年10月に45名の子どもたちと共に活動を開始しました。11月には、オーストリアの公益法人として正式に認可・登録されました。さらなる日本語教育の充実を目指し、補習授業校として日本政府に助成を申請し、2018年4月より正式に政府の援助を受けています。さらに、2023年3月に施行された「在外教育施設における教育の振興に関する法律」に基づき、在外教育施設として認定を受け、現在に至ります。

本会の運営母体は、設立当初から保護者ボランティアによって構成される組織です。5名の役員（会長、副会長、会計、書記、教務）を中心に、クラスをまとめるクラス委員や、行事の企画・運営を担当する係などが協力しながら活動しています。会の業務は、日々の運営、会計処理、施設交渉（市民大学を借用）、トラブル対応など多岐にわたり、分担して担っています。役員も多くは仕事と両立しながら活動しており、負担は大きいものの、日本語教育のために皆が一丸となって尽力しています。

現在、本会には約50世帯・60名の子どもたちが在籍し、幼稚園部・小学部の7クラス（年少・年中・年長・小1・小2・小3/4・上級生）に分かれて、週1回90分の授業を受けています。幼稚園部では、ひらがな・カタカナに触れながら、日本語を話し、歌を歌ったり、工作をしたりする活動を行っています。小学部では、日本の教科書を使用しながら各学年の子どもたちのレベルに応じた授業を実施しています。

本会に通う子どもたちの大半は、父または母のいずれかが日本語を母語とする多文化ルーツを持つ子どもでもあり、普段は現地の学校（オーストリアではドイツ語の学校）に通っています。オーストリアでは、日本と異なり小学校が4年間で、その後、本人の成績や適性、希望に応じて進路が決まります。小学校卒業後は学業が一層忙しくなり、授業時間も長くなるため、日本語学習との両立が難しくなる子どももいます。日本でも高学年になるにつれ、漢字学習や長文の読解・作文が難しくなりますが、本会の生徒は現地の学習に加えて日本語を学び続けるため、一層の努力が求められます。特に上級生の継続が大きな課題となっています。

教師の多くは、かつて自身の子どもを本会に通わせていた保護者や、現在子どもを通わせている保護者です。子どもたちの日本語の使用は、保護者（それも両親のうち一方が日本語を話さない）との会話を中心であるため、同じ年齢でも日本語の習熟度には大きな個人差があります。そのため、毎年、子どもたちのレベルを見極めながら工夫を凝らし、授業を進めてくださっています。しかし、週1回の日本語学習だけでは十分ではないため、家庭での学習と組み合わせる学習活動を進めることが重要になります。ただし、保護者自身が補習校の経験者であることは少なく、多くの親は日本で教育を受けてきたため、自分とは異なる環境で育つ子どもたちの状況を想像しにくいという課題があります。そのため、日本語力を高めるための取り組みには多くの悩みや苦勞が伴いますが、保護者同士が支え合えることも本会の大きな強みです。

日本の文化を伝えるために、本会では年間を通じてさまざまな行事にも力を入れています。お月見やお正月はもちろん、サンタクロースも登場します（※オーストリアでは、サンタクロースがプレゼントを持ってくるのは一般的ではありません）。日本にいれば当たり前と感じることを伝えることこそが、文化継承の一環であると考えています。また、運動会や発表会も開催しています。運動会は、昨年からウィーン日本人国際学校と共催で行

っています。整列して並ぶ、応援合戦をするなど、日本独自の文化を経験できる貴重な機会となっています。発表会も同様に、日本では当たり前の行事ですが、オーストリアでは一般的ではありません。クラス全員で一つの作品を作り上げ、披露することで、日本の歌や昔話に触れ、踊ったり演じたりする経験が、子どもたちの日本語の成長につながると考えています。発表会での経験は、親子ともに忘れがたい思い出となっています。

このように、現地の学校に通うだけでは得られない貴重な経験を通じて、日本の文化を学び、その結果として日本語の学習にもつながることを願っています。

本会の運営にはさまざまな課題がありますが、会長として強く感じるのは、「毎回の運営を当たり前が続けていくことの難しさ」です。前述のとおり、本会は保護者ボランティアの熱意によって支えられています。日本に例えるなら、PTA 組織が1年分の学習計画を立て、運営をしているようなものです。しかし、これは本会だけの課題ではなく、世界中の補習校の運営者が抱えている共通の悩みでもあります。それでも、どの補習校も、「海外で暮らす子どもたちに日本語・日本文化を学ぶ機会を提供したい」という強い願いのもとで運営されています。運営者同士の会議や交流もありますが、今後さらにこうした組織が有機的につながり、日本語教育が世界中で継続され、将来、日本と海外を結ぶ架け橋となることを願ってやみません。

#### 4. 海外で働く？～在外教育施設派遣教師制度～

私は日本で家庭科教員として働いていた経験がありますが、勤務中にふと、「海外の日本人学校などで働いている先生はどんな方なのだろう？」「海外で教員として働くにはどうすればよいのだろうか？」と考えたことがありました。この会に参加されている先生方の中にも、同じような思いを抱かれている方がいらっしゃるのではないのでしょうか。

文部科学省のホームページにも掲載されていますが、日本人学校や規模の大きな補習授業校では、義務教育の教員を対象とした派遣事業が実施されています。申請方法は各都道府県によって異なるようですが、現在、約1,200名の先生方が日本を離れ、さまざまな国で活躍されているそうです。海外での経験は、日本に戻られた後の教員生活にも大きな財産となることでしょう。

本会のような小規模な補習授業校では、日本から派遣教員をお招きすることはできませんが、海外での教育活動にご興味がある方は、ぜひ一度ご検討されてはいかがでしょうか。海外での生活には不安もあるかもしれませんが、派遣期間は限定されており、帰国後に再び同じ職場へ戻ることも可能な場合が多いようです。

新たな視点を得て、教師としての成長につながることは間違いありません。私自身の経験からも、その貴重な機会をぜひ多くの先生方に知っていただきたいと思い、この文章を結びとさせていただきます。

参考ページ：文部科学省

「在外教育情報～「海外で学ぶ日本の子供たち」(2024年度版)～」

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002.htm)

「在外教育施設派遣教師について」

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/mext\\_02349.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/mext_02349.html)

## 「高知国際高等学校の Service as action」

高知東高等学校 野村 道生  
高知国際高等学校 山本 直子

### 1 学校の概要

高知県立高知国際高等学校（併設型中高一貫教育校）は中高でIBワールドスクールとして国際バカロレア教育を実践している。特徴的な教育プログラムとしては、主体的にボランティア活動を計画して行動するサービス・アズ・アクション（SA）や個人で課題研究を行うパーソナル・プロジェクト（PP）などがある。

教育方針である「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて地域や国際社会に貢献する、心豊かでたくましく生き抜く人材を育成する」の実現のためにも、グローバル社会で求められるスキルの育成と互いの価値観や文化を尊重し合う姿勢を身に付けることを目的とし、SAやPPへ取り組んでいる。

### 2 サービス・アズ・アクション(SA)

国際バカロレアの教育カリキュラムの必須事項の一つである。これは、教室以外の広い社会で経験を積み、様々な人と協働作業することにより、協調性、思いやり、実践の大切さを学ぶものである。高知国際高校では中学校からSAを通して探究心、知識、思いやりのある生徒の育成を目指している。



### 3 国際交流活動ボランティアグループ「Lien」

SAのボランティアグループに、異文化交流・英語運用能力の向上を目指す生徒の交流の場として「Lien」があげられる。Lienは生徒自身の手で立ち上げられた組織で、今年度は高校3年生がアドバイザーとなり、高校1・2年生が主体となって活動を展開している。「できる楽しさから分かる喜びを実感する」「身近な問題から始める国際理解」をビジョンに掲げ、イベントを企画・運用している。その過程で「物事をいろいろな角度から見て考える力・自分の考えをわかりやすく伝える力・様々な情報から適切な判断ができる力・計画を立てて自分で管理する力」を身に付け、社会貢献への意識を高める活動へと日々進化を続けている。

#### 4 イベントの概要

イベント名：「英語でスポーツ大会」

期 日：令和6年10月12日（土）1部10：00～12：00 2部14：00～16：00

場 所：CHRES 体育館

協 力：龍馬学園日本語学科在籍留学生

高知大学在学留学生

目 的：「身近な問題から始める国際理解」

対 象：小学生4年生～大人



#### 〈企画・立案〉

Lien の活動として本イベントを年間計画のメインに位置付けている。今年度は集客数増加とダイナミックな活動を楽しむことができるように以下の点を検討した。

##### ①対象児童生徒の範囲を拡大

様々な年代の方に交流の機会を提供できること目指し、会場近隣小学校を対象に行ってきた活動を県内小学校・中学校・高校1年生まで拡大し企画を進めた。

##### ②会場変更

よりダイナミックな活動を取り入れることで、お互いのコミュニケーションの機会を増やしていく。そのために活動に制限がかからない校外体育施設への変更を企画した。また、自家用車で来場される方への配慮として駐車スペースの限られる学校よりも校外施設が有意であると考えた。

##### ③高知市子どもファンドへ申請

①②にかかる経費（広報チラシ、会場借り上げ他）の捻出のため「高知市子どもまちづくり基金助成事業」へ参入し「地域等をより魅力的に住みよいまちにするための活動」「活動によって誰かが喜んでくれる活動」への参加を企画した。





〈イベント内容〉

- ①開会式 運営委員と留学生による挨拶
- ②アイスブレイク (風船リレー)

チームで輪になり、英語のスペルでしりとりをする。英単語を言ったら風船を投げる。風船をキャッチした人がしりとりをつなげていく。



③競技

- ・長縄跳び：チーム対抗！3分間でどのくらい長縄を飛べたかを競う。
- ・ドッチビー：ドッチボールのフリスビー版。7分間のゲーム後、内野に残った人数が多いチームの方の勝ち。
- ・ピニャータ：吊るされたピニャータを叩き割り、中にあるお菓子を取り出そう！



#### 〈活動の成果と課題〉 Lien 代表：中越

今回の活動の目的は「身近な問題から始める国際理解」にあった。活動の中で外国人と日本人が仲良くコミュニケーションをとることができたと感じている。スポーツ中にいいプレイがあると「ナイス！」と言ったり、拍手などが起こり、お互いがいい空間を作ることができた。また、スポーツの間の休み時間には、日本人も外国人も混ざってゲームの練習をし、コミュニケーションの促進に繋がるイベントになった。



この活動を更に充実させるためには、日本人同士での会話が日本語で行われていたため、日本語がわからない留学生の方は会話に入りづらいことを改善する必要がある。基本的に英語で話すようにしていたのでそのルールの徹底をすることで、その場にいるみんなが何を話しているのかが分かるような環境にするべきだった。

#### 〈生徒の変容と学校支援体制〉 担当教員：山本

こどもファンドへの申請から、イベントの企画・実行まで、全て生徒のみで行った。その過程で、生徒たちは物事を多角的に吟味する力、必要な情報を収集する力、イベントを成功させるために計画的に進める力など、様々なスキルを複合的に活用した。また、高知市内にきている留学生とのコミュニケーションで英語を運用するスキルを発揮した。

学校としては、スキルを示したり方向性をサポートしたりするが、計画・実行は全て生徒にゆだねている。これらの活動の中で生じた失敗などは、振り返りを通して次の学びに生かさせている。

#### 〈イベントを通して〉 事務局：野村

ボランティア活動として国際交流の場を企画し、自己実現へ向けて行動できたイベントであった。運用においても、それぞれが役割を十分に理解し、参加者や留学生はもちろん運営スタッフも心からスポーツを楽しみ、笑顔あふれるイベントであった。

様々な学校で同様の取り組みはなされていると思うが、その継続性については多くの学校が課題として抱えていると想像する。しかし「Lien」では、昨年以上を目標にアイデアをアップデートし企画が進められている。生徒は自己の目的である「自らの英語運用能力の向上」「イベントの企画運用能力の習得」を目指す。加えて「国際理解・交流の場の提供」を手法として企画している。そして目的達成のため「地方創生に関する政策」を活用しボランティア活動を実践している。このようなシステムの構築が継続性を可能にする要因の一つであると考える。

最後となるが、この活動企画した生徒の皆さん、企画を支援してくださった職員及び関係者の皆様に感謝申し上げたい。今後も高知国際高校の国際教育活動に注目し参加された生徒の成長を応援していきたい。

## 令和6年度 宮崎県高等学校文化連盟 文化交流事業 韓国招聘

国際・ボランティア専門部専門委員長  
宮崎南高校 指導教諭 近藤 明子

### 1 文化交流事業 韓国招聘について

2016(平成28)年に、高文連主催、国際・ボランティア専門部主管で、文化交流事業「日韓交流」大韓民国派遣という、今の形式になってから9年目。宮崎側からは延べ21名の生徒が韓国へ派遣されました。その当時、交流していた大元外国語高等学校とは、1988年に始まった日韓ユネスコ高校生文化交流派遣事業からのつながりでしたが、現在の交流校3校(ラオン高等学校、突馬高等学校、創意高等学校)とは、宮崎在住の先生方のご縁で繋がった、まさに友情交流というべきものです。そのうちのラオン高校には、2018(平成30)年に9名の生徒が初めて訪問し、隔年での派遣、招聘という流れを作る予定でした。しかし、コロナ禍になり、対面交流ができなくなり、オンラインでの交流を余儀なくされました。コロナ禍明けの昨年度(2023年)に、6名の生徒が訪韓し、3校を訪問することができました。また、その際、ラオン高校、突馬高校とは、友好交流促進に関する同意書を取り交わすこともでき、高文連とのつながりがより一層強化されています。今回は、創意高校の李啓煥(イギェファン)校長先生が、同意書の署名式に臨まれるため、李善姫(リーソンヒ)日本語教師とともに来宮されました。

### 2 交流形態(メンターメンティ)について

2020年~2022年は、前述のとおり、渡航自体が制限され厳しい状態でしたが、オンラインでの交流を行い、宮崎と韓国の繋がりを維持してきました。昨年度の韓国派遣は、当初の予定では、感染状況が落ち着いてきた2022年の秋に実施予定だったものの、新型コロナウイルス感染症の増加のために延期され、2023年5月に、4年ぶりに派遣となったものでした。ですが、コロナ禍にオンライン交流が進んだことが、怪我の功名で、ほんの数名しか交流できなかった、この文化交流も、多くの生徒が交流に参加できるようになりました。今年度は、オンライン交流に加え、生徒たち自らがSNS等を活用して、日頃から交流を行う「メンターメンティ」も導入されました。日本人と韓国人のマッチングをもとに、韓国側29名(突馬10名、創意19名)、宮崎側37名(宮崎大宮8名、宮崎南10名、宮崎農業7名、都城西6名、宮崎学園6名)が、メンターメンティ交流に参加しました。

### 3 友好交流促進に関する同意書について

昨年度、取り交わした同意書に加え、今年は創意高等学校が加わり、これからの交流がますます友好目的としたものとなるように期待されています。



今回署名された創意高校との同意書

### 4 令和6年度の交流全体について

- ① 5月募集およびメンターメンティマッチング
- ② 6月1日(土)第1回オンライン顔合わせ  
テーマ:自己紹介 ~ SNS上での交流開始
- ③ 7月20日(土)第2回オンライン顔合わせ  
テーマ:夏休みの予定
- ④ 9月8日(日)~11日(水) \*(韓国招聘)  
署名式/ホームステイ/学校訪問/一日交流会
- ⑤ 9月26日(木)高文祭部門大会オンライン参加
- ⑥ 10月12日(土)第3回オンライン顔合わせ  
テーマ:最終発表会

### 4月メンバー募集ポスター配付 ~①



メンバーによるPadletでの事前自己紹介 ~②  
オンライン交流会の様子 ~②③⑥



高文祭での韓国創意高校の生徒発表 ～⑤



5 文化交流事業 韓国招聘の様子

・招聘校 創意高等学校 Creativity High School (Chani High School) 66, Dongtansinricheon-ro 1-gil, Hwaseong-si, Gyeonggi-do, Korea <https://creativity.hs.kr/>

・招聘人数 韓国側11名(生徒9名教員2名)

・ホストファミリー(宮崎南3名、宮崎大宮2名、宮崎学園4名)

9月9日訪問校 宮崎南、宮崎大宮、宮崎学園(ホストファミリーの生徒と一緒に一日体験留学)



宮崎学園での伝統文化体験の様子  
署名式および一日交流会



・日程・場所

令和6年9月10日(火)宮崎南高校 志願室  
および 県内観光地

・参加者 日本側19名(宮南9名、大宮3名、学園4名、宮農3名)、韓国側11名(9名+職員2名)

・日程

8時30分 宮崎南高等学校 志願室 集合

8時40分～9時 歓迎会および同意書署名

1) 開会の言葉

2) 日韓交流挨拶 高文連会長

3) 日本側歓迎の挨拶 国際・ボランティア会長

4) 韓国側挨拶 創意高等学校長

5) 歓迎の言葉 日本生徒代表

6) 御礼の言葉 韓国生徒代表

7) 同意書 署名

8) 来賓紹介

9) 閉会の挨拶

9時00分 宮崎南高等学校 出発

10時～11時 鶴戸神社散策

11時30分 道の駅 フェニックス休憩

12時15分～14時15分 青島(昼食・散策)

15時00分 宮崎南高等学校到着(一次解散)

15時30分～17時30分 イオン宮崎(二次解散)



鶴戸神社1



鶴戸神社2



青島1



青島2

# 国際理解教育／開発教育のための JICAのプログラム案内

全国15か所にJICAの国内拠点があります。国際理解、開発教育のための多様なプログラムがありますので、是非、各リンク先を参照の上、ご利用ください。

## 地球ひろば訪問

JICA地球ひろばの目玉展示「地球ナビ」では、SDGsの各ゴールについて学べる。



▲▲▲  
地球ひろばの  
最新情報

「市民参加による国際協力の拠点」としてオープンした

JICA地球ひろば。東京をはじめ全国8か所で、映像やクイズによる展示に加え、民族衣装の試着や世界の料理を味わえるレストランなど、「見て・聞いて・さわって」、途上国の暮らしや地球が抱える課題、国際協力の現状を学べる場所となっている。JICA横浜に併設する海外移住資料館では、日本人の海外移住の歴史と日系人の現在を学ぶことができる。

## 教員向け研修

1965年から続く教師海外研修。約10日間の海外研修と渡航前後の国内研修で構成



▲▲▲  
教員向け研修の  
最新情報

開発教育に興味・関心のある教員を対象に、途上国を訪問する

「教師海外研修」、それぞれの国内拠点でテーマ別に行われる「国内研修」、指導案の作成・授業実践のレベルアップに取り組む「指導者研修」など、対象者や目的が異なるさまざまな研修を実施している。参加者同士の意見交換や協働作業を通してネットワークを築くことで、研修後も各地域の学校教育関係者と連携してさらなる開発教育の推進を図る。

## 国際協力出前講座



▲▲▲  
国際協力出前講座の  
最新情報

海外協力隊の経験者や国際協力専門員など、国際協力に

携わったJICA関係者や途上国からの研修生が講師となり、国際協力の必要性を伝える。講師が直接訪問しその場で交流できる「対面型」と、途上国で活動中の隊員などとオンラインで結ぶ「オンライン型」の2種類から選択可能。体験談、異文化理解、国際協力キャリア、SDGsなど希望のテーマに沿って講師と打ち合わせを行い、講座内容を組み立てる。



講師がアフリカ地域の民族衣装を着て、現地の子どもたちに紹介。

16 JICA 沖縄 (おきなわ地球ひろば)



14 JICA 中国 (ひろしま地球ひろば)

10 JICA 北陸



13 JICA 四国

12 JICA 関西 (かんさい地球ひろば)

15 JICA 九州 (きゅうしゅう地球ひろば)

# JICAの国内拠点 (体験型施設)



もっと知りたい  
JICA国内拠点

国内拠点の最新情報を  
JICAのサイトでチェック

① JICA北海道 (札幌／ほっかいどう地球ひろば)

② JICA北海道 (帯広)



④ JICA二本松

③ JICA東北

⑨ JICA駒ヶ根

⑤ JICA筑波 (つくば地球ひろば)

⑥ JICA東京

⑦ 地球ひろば

⑧ JICA横浜／海外移住資料館

⑩ JICA中部 (なごや地球ひろば)



## 開発教育支援教材



▲▲▲  
開発教育支援教材の  
最新情報

冊子教材はダウンロードだけ  
でなく、無料での貸し出しや  
提供にも対応。



子どもたちが世界の  
現状や課題について  
理解を深めるための

教材を作成し、無料で提供している。主体的・対話的で深い学びにつながるよう、授業でそのまま活用できるワークや、映像、マンガで学ぶもの、さらにはゲームを取り入れたものまで各種揃える。多文化共生の教材や、教員向けに授業のヒントとなるようなガイド冊子や指導案事例も。すべて地球ひろばのホームページからダウンロードが可能となっている。

## 国際協力エッセイコンテスト



▲▲▲  
エッセイコンテストの  
最新情報

2023年の表彰式での一  
枚。審査員長は教育評論家の  
尾木直樹さんが務めた。



途上国の現状や日本  
との関係について理  
解を深め、グローバル

ル社会の中で自分たち一人ひとりがどのように行動すべきかを考えてもらうことを目的として、中学生と高校生を対象に毎年開催。上位入賞者には約1週間の海外研修やフェアトレード商品を贈呈。海外研修では訪問国の文化体験や同年代の生徒との交流、現場が抱える課題とそれらに対するJICAの取り組みを視察することで、国際理解をさらに深める。

## 一般財団法人日本国際協力センター(JICE)のご紹介

### 一般財団法人日本国際協力センター(JICE(ジャイス))とは

日本国際協力センター (JICE) は、1977 年に、日本政府による開発途上国への援助 (ODA) に協力することを目的に設立されました。現在は先進国を含めた国際社会全体を対象に「留学生受入支援」、「国際研修」、「国際交流」、「多文化共生」などの事業を展開しています。また、開発教育・グローバル人材育成のため、高校や中学校へ講師派遣や職場訪問の受入を行っています。



### 国際交流に参加する高校を募集中！

JICE では、日本と世界各国の高校生をつなぐ国際交流プログラムに参加する高校を募集しています。「グローバル人材育成に力を入れていきたい」、「異文化に触れる機会や英語を使う機会を生徒に与えたい」等のご希望がございましたらお気軽にご相談ください。初めて海外の高校生と交流する場合も、事前に担当者より丁寧に説明いたしますので、ご安心ください。対面による交流とオンラインを活用したプログラムがあります。

#### (1) 対面交流

国際交流を目的に来日する海外の高校生等を、10～30 人規模で受け入れていただきます。半日ないしは一日をかけて学校を訪問し、学校・地域・文化の紹介、授業・部活動・行事の体験、意見交換などを行います。現地の事情や各国語に精通した JICE のコーディネーターが同行し、より円滑な交流のためのお手伝いをします。訪日する高校生の出身国について理解を深めるため、各国の歴史や文化を紹介した冊子や外国語会話帳など、交流に役立つ参考資料を差し上げます。

また、日本の高校生を海外に1週間程度派遣する「派遣プログラム」も実施しています。



自己紹介



科学技術体験



部活動体験

#### (2) オンライン交流

1回90～120分のオンライン交流では、Zoom等を用いて、学校生活や地域の魅力、日本文化について紹介する発表やグループ・ディスカッションなどを実施しています。オンライン交流を通じて、異文化についての理解が深まるだけでなく、英語学習への意欲も高まります。



出身国・地域の文化や学校生活についてスライドや動画を用いてお互いに紹介します。ブレイクアウトルーム機能を使い、少人数で話し合いを行います。趣味や好きなものについて質問することもできます。

#### 参加した高校生の感想

- 初めて海外の方と交流できてとても楽しかったです。また、自分の英語が少しでも通じることを知ることができて良かったです。参加をきっかけに、もっと英語を勉強したいと思いました。
- 私は司会と発表を行いました。英語で行う機会はあまりないので、とても良い経験になりました。日本の文化を紹介することで、自分の国の文化について改めて知ることができ、これから海外で質問されたときに答えられるようになったと思います。交流はとても楽しく、英語力以上にコミュニケーション能力を向上させる必要があることに気づけました。



部活体験



折り紙体験



母国文化についての発表

### JICE の国際交流に参加するには

オンライン交流や派遣プログラムの参加校の募集情報は、随時、JICE の国際交流特設ウェブサイト (<https://www.jice.org/exchange/>) にて公開しております。募集が行われていない場合も、お問合せフォーム (<https://www.jice.org/exchange/faq/>) からお気軽にご連絡ください。



特設ウェブサイト



JAPAN FOUNDATION  
国際交流基金

## 国際交流基金の事業のご紹介

独立行政法人国際交流基金（JF）は、国際文化交流を総合的に実施する日本の専門機関です。日本と世界の人々がつながる「文化」、「言語」、「対話」の“3つの場”をつくることで、お互いの間に共感や信頼をはぐくみ、日本の友人をふやしていきます。

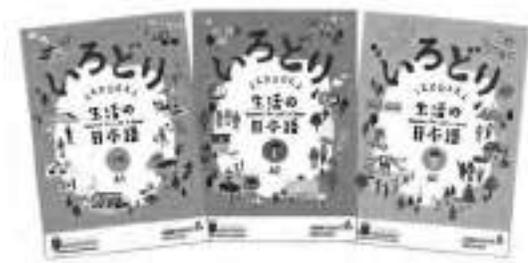
### ☆文化 〔文化芸術交流〕

海外の音楽やアートにふれて、その国に対する興味が広がった経験はありませんか？異なる文化や芸術に接したときの“感動”は、言葉のちがいを乗り越え、相手のことを知りたい、理解を深めたいという意欲を生み出してくれます。国際交流基金は、日本の文化を、美術や音楽、演劇、映画から、ファッションやデザインまで、幅広く世界の人たちに紹介しています。



### ☆言語 〔海外における日本語教育〕

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、日本への親しみや友情を広げる大きなきっかけになります。そこで私たちは、世界中のもっと多くの人に日本語を学んでもらえるよう、日本語教師や学習者への研修、教材の開発、日本語能力試験の実施など、各国の学習環境の整備を進めています。たとえば、令和2年に公開した日本語教材『いろいろ 生活の日本語』は、ウェブサイト上で無料ダウンロードができ、日本で生活や仕事をする際に必要となる基礎的な日本語のコミュニケーション力を身につけるのに役立ち、国内外の多くの人に利用頂いています。



## ☆対話 [日本研究・国際対話]



海外の人たちが日本について知りたい、学びたいと思ったとき、自国の身近なところに日本の専門家がいることはとても心強いことです。JF では、海外の日本研究者を支援するほか、各国の有識者同士の対話が深まるように、シンポジウムや共同プロジェクト等を行っています。

高校生のみなさんの活動や好奇心に役立つ情報があります！

### 1. グループ訪問の受け入れ

広報部では、修学旅行や大学生のグループ（ゼミ等）の皆様をお迎えして、国際交流基金の活動をご説明します。詳しくは以下をご覧ください。

<https://www.jpf.go.jp/j/about/jfic/school/index.html>

### 2. 日中高校生対話・協働プログラム実施校の募集

日中交流センターでは、日中両国の高校生が、お互いの文化や社会についての理解を深めながら、学校生活や地域社会等の共通の課題の解決についてオンラインも活用しながら対話・協働することを通じて、両国青少年層に連帯や協力の意識を醸成する「日中高校生対話・協働プログラム」を実施しています。日本側参加校の一般公募も今後予定しておりますので、その際は是非ふるってご応募ください。



<https://www.chinacenter.jp/invitation/program/>

### 3. 海外での国際文化交流の参加者公募プログラム

JF では海外で日本と日本文化を紹介してみたいという意欲のある人を募集しています。大学卒業以上、または20歳以上の方が対象ですが、将来の選択肢の一つとして考えてみてください。

#### (1) 日米草の根交流コーディネーター派遣 JOI (Japan Outreach Initiative)

米国南部・中西部・山岳部に日本文化を紹介。詳しくはこちら

<https://www.jpf.go.jp/cgp/fellow/joi/index.html>



## (2) 日本語パートナーズ派遣事業

アジアの中学・高校等で日本語授業のアシスタントをし、日本文化を紹介。また、日本語パートナーズ自身も現地言語、文化、社会を学び日本社会に還元。詳しくはこちら <http://jfac.jp/partners/>

## 4 日本語学習支援ウェブサイトの作成

JF では海外で日本語を学んでいる人、教えている人に役立つウェブサイトを制作しています。将来海外で日本語を教えてみたいという人は、ぜひのぞいてみてください。

(1) エリンが挑戦！にほんごできます。 <https://www.erin.jpf.go.jp/>

(2) JF にほんご e ラーニングみなと <https://minato-jf.jp/>

(3) アニメ・マンガの日本語 <http://anime-manga.jp/index.html>



## 5. ポータルサイト「JF digital collection」を通じた日本の文化紹介

JF digital collection は、日本の文化を海外に伝えるための多彩なオンラインコンテンツです。日本の作家と海外の作家が、さまざまな想いを書簡にのせて送り合う「会えない時代の往復 書簡」、渋沢栄一思想と現代日本のSDGs とのつながりを紹介する「渋沢栄一とSDGs」 など、ポップカルチャーから映画、舞台芸術、美術、日本語教育まで、さまざまな日本文化 の魅力を多言語でお楽しみいただけます。



## 第 61 回全国国際教育研究大会 宮城大会

全国国際教育協会理事長

高田幸一

第 61 回全国国際教育研究大会宮城大会が、昨年とは違い対面で行われました。宮城県開催にあたり準備、実施に全国国際理解教育研究協議会と各関係者のご尽力に深く感謝申し上げます。

「理事長挨拶」

私は、今年から NPO 法人全国国際教育協会の理事長に就任しました高田幸一と申します。15 年前には、青森大会に会長として出席したことを思い出しました。皆様の熱い志と各組織の人々の思いが込められているこの大会は、各の世代の関係者がそれぞれの分野で人材育成し引き継がれていて現在があるのだと強く感じました。



私自身、48 年前三重県教員を退職し日本青年海外協力隊に参加し、帰国後から開発教育に携わり大きく変動する時代の中で教員、管理職、大学と職責も変化を感じてきました。しかし、変わらぬものは、日本の良さ、世界の息吹を感じ取れる感性を育て、次世代に体験させてあげたい、日本人として行動できるようなれると良いと活動しています。

「発足経過・活動状況」

JIJE は、創立 15 年目を迎え全国国際教育研究協議会（以下国際研）と長い間関わりのあった役員や事務局を担当された方々によって「国際研」を支援し、法人として社会的責任ある団体として設立されました。月 1 度、一般財団法人日本国際協力センター（JICE：ジャイス）において理事会を開催、各関係者をお招きし研修会、またはテレビ会議で他団体との意見交換、情報共有を図っております。特に今年度は、「日本語を母語としない親子のための都立高校進学ガイダンス」を開催し支援を始めました。11 月 10 日（江戸川区民小松川さくらホールにて）。次回は 1 月 13 日実施予定。





### 「課題解決に向かって」

近年、国際研は休会となっている県の増加、各県の有能な人材による開発教育の成果をあげているにもかかわらず、学校現場の職務の負担も増え活動に支障をきたしています。私ども協会も法人として、国際研の休会県への協力要請や今後の活動で定款等の改正等を含め具体的な提案に対し支援協力をしていきたいと考えています。

この宮城大会でも生徒の変容と次世代を担う後継者の育成がなされていることを確認しています。大会の在り方や運営方法も含め時代と学校環境の変化に対しての若い教員が活躍できる研究の場にしていく事が急務と感じます。

### 令和6年度の事業計画

昨年度に引き続き全国の地区委員会（支部組織）を拡充し、地盤作りを進めていく。これまでの実績をもとに、グローバル教育や開発教育に関する情報の提供、教材教具の開発に関する事業の発展に努める。

更に、日本語教育の関連機関と共に一般財団法人国際協力センター（JICE）と締結している協定をもとに、連携事業を一層推進する。また、インターネットを活用した広報活動や、知見の共有を拡充する。

#### 1 特定非営利葛生に関わる事業

(1) グローバル教育、開発教育などに関する人材教育、普及推進、政策提言等の事業

(2) 講演会、講習会、研究会、研修会、発表会などの開催

- ・令和6年8月開催の「第61回」全国国際教育研究大会宮城大会」に協賛し、協力。
- ・「やさしい日本語」についての研修を引き続き行う。

(3) 国内外の関係諸機関との連携事業

- ・独立行政法人国際協力機構（JICA）一般財団法人日本国際協力センター（JICE）公営社団法人青年海外協力機構と連携して、青少年交流事業、国際交流事業、教員派遣事業、その他の連携事業を行う。
- ・東南アジア諸国やアフリカ等の在京外交機関を訪問し、国際理解や国際協力を図る。
- ・小・中・高等学校におけるグローバル教育を進めるために、本協会のWEBサイト・ホームページの活用を図る。その他、この法人の目的を達するために必要な事業

#### 2 その他の事業

(1) グローバル教育、開発教育などに関する広報誌、教科書並びに教科書副読本、その他図書や書類などの刊行物及び教材教具の開発

(2) 国際教育、開発教育、グローバル教育などに関するコンテスト、コンクールなどの支援

- ・JICA主催の「エッセイコンテスト」事業に参画し充実・発展に努める。

# 全国国際教育研究協議会 紹介

## 1. 本会組織について

全国国際教育研究協議会（Japan Association for International Education/JAFIE 全国国際教/国際研）は、全国の高校（中等教育学校）約2000校の加盟校を有し、学校現場の教員が組織する唯一の全国組織の研究団体である。また、各都府県の研究会は教育委員会公認または高文連の組織となっている。研究内容は、国際教育（開発教育／国際理解教育）の研究、普及、実践交流等を目的とする。

本会は60年近い歴史のある研究団体で、発足当初より、海外移住事業団（現；JICA 国際協力機構）と密接な関係にある。

## 2. 全国国際教育研究協議会の歴史

### 1) 海外教育研究活動の開始

戦後、海外移住が再開され、農業独身青年の移住が盛んになり、その対象となる青少年に対し、海外移住の正しい理解と発展を促すための教育の必要性が論じられるようになってきた。県によっては、海外協会（県における海外移住実務機関）が海外に関心をもってクラブ活動などを行っている農業高校を「海外移住モデル農業高校」に指定し、資料配布や講師派遣などの助成をした。それらの高校では、学校行事や課外活動の中で、講演会や映画会などを開催し、中には拓殖講座を開設した学校もあった。

当時、中央の海外移住実務機関であった日本海外協会連合会でも、これらの教育活動を高く評価し、1958（昭和33）年「海外移住指定高校」（のちに海外移住推進高校と改称）を設定し、指導教師の育成と生徒のサークル活動に対し、側面的な援助をはじめた。このような動きは、漸次、全国的な規模へと拡大されていった。

その後、日本の経済は飛躍的な発展を遂げ、国際社会において日本の地位が向上し、国際人としての日本人の教養が論議されるようになってきた。一方、全国の指定高校代表者の研究集会などでも、国際理解・国際協力に関する学校教育のあり方とその方法が検討され、より実践的な国際活動を基盤とした「国際社会で活躍できる人材育成のための教育活動」を推進する必要が強調された。

その頃、国際化時代に即応した教育として「海外教育」をとりあげ、海外教育の指導手引書を作成し、実践教育を展開した。このことは、各県における海外教育の考え方や活動の方向に大きな影響をもたらし、全国の都道府県に「高等学校海外教育研究協議会」（県によっては、研究会などの呼称）が結成されるようになった。1963（昭和38）年「海外移住推進高校」は、海外移住事業団（現；国際協力機構）によって引継がれ、「海外教育推進高校」（当時500校）と改称された。

### 2) 全国高等学校海外教育研究会（指導教師連絡会議）の開催

海外教育研究活動が定着し、活発化するにつれて、各地区から、全国連絡会議開催の要請が強まり、1964（昭和39）年10月、神戸移住センターにおい

て、第1回全国高等学校海外教育研究会(指導教師連絡会議)が開催された。以降、この研究会は、全国高等学校海外教育連絡協議会として1969(昭和44)年8月の第6回まで開催され、いよいよ全国組織結成の機運が高まってきた。

### 3) 全国高等学校海外教育研究協議会の設立

設立年月日 1970(昭和45)年10月13日(969校加盟)

#### 【設立趣意書】

今日、国際社会の進展は著しく、世界各国は日毎に緊密の度を増し、それに伴い相互理解と相互協力が、ますます必要となっており、“世界は一つ”というスローガンは名実ともに現実の姿となってきました。わが国と諸外国との交流も、政治、経済、文化などあらゆる分野にわたり多様化するとともに、海外雄飛や海外体験を望む青少年が急速に増大しつつあります。古来、わが国は地理的にも歴史的にも諸外国と接触する機会に疎く、海外の国情、文化、風俗、習慣、ものの考え方などについて正しく理解することができにくい環境におかれていました。したがって、望ましい国際社会の一員となるためには、国の内にあるか外にあるかを問わず、正しい国際理解と感覚を身につけ行動することが大切であり、その育成は学校教育に期待されるところが大きいと思われます。すなわち、国際的視野にたち行動できる青少年の育成は、国民的課題であり、海外教育の目指すところでもあります。そのためには、まず、教育にたずさわる教師自身が、積極的に海外教育の研究に努め、資料の収集や研修を行い、正しい国際感覚を学びとり、国際社会に対する理解と認識を深めることが急務であります。ここに、志を同じくする者が相集い、相互研さんと相互啓発の場とすることを趣旨とするものであります。

1970(昭和45)年10月13日

### 4) 全国高等学校国際教育研究協議会への改組と自立

1985(昭和60)年5月30日 会の名称と会則を変更

#### 【設立趣意書】

学習指導要領の改正等、学校教育において国際理解と協調の精神を涵養し世界的視野をもって、国際社会に積極的に活躍できる人材の育成が強調されております。本会は第2次世界大戦後の海外移住について(農業移住)農業高校卒業後の移住に、正しい知識を体得させる指導に始まり、日本の急速な進展にともない、飛躍的に海外に進出するようになりました。農業高校の問題だけでなく、日本人として、国際人として、学校教育に期待されるところが大きく、本会は趣意の通り(1970(昭和45)年)設立されました。

その後、本会の「名称」・「目的および事業」等について度々の問い合わせがあり、また「海外教育」「国際教育」の内容については「設立の趣意」の解釈により同一の見解をとってきました。しかし、会員校の増加にともない、県協議会等より改訂の要望もありましたので、「名称」・「目的および事業」等について、会員の解り易いよう、改訂に踏み切りました。

目的および事業を達成するため、日本人として、国際人としての、国際教育の深化に当り、南北問題、開発途上国等の開発教育の問題も十分踏まえて、教材として十分生かした実践研究を推進することが、本会のあゆみであり、課題であります。会員の教科・科目等の指導に当り、一層具体的発展の推進を期待するものであります。

なお、本会は設立の経緯から、連絡先を「国際協力事業団総務部広報課」にしていたが、国際協力事業の需要性が急激に高まり、激務の国際協力事業団を本会の連絡先にしておくことが不可能になった。1988(昭和63)年2月に協議した結果、本会の自立が決定し、事務局長の勤務校を事務局とする事にした。

## 5) 全国国際教育研究協議会への改組

私立のみならず、公立も中高一貫校や高大連携、小中連携などが増えてきた。こうしたことから、2003(平成15)年度の全国総会で、あらゆる学校の国際教育に対応できるように、会の名称から高等学校を削り、全国国際教育研究協議会と改称し、一部会則を変更することを決定した。

## 6) 本会の業績に対する受賞

◆国際協力功労者(団体)感謝状受賞 1985(昭和60)年8月1日

1963(昭和38)年同協議会設立以来、国際協力教育実践モデル校を設置するなど教育の現場で国際協力、国際交流の教育実践に尽力また JICA エッセイコンテスト等への積極的な参加、国際協力にかかる講演会など高校生への国際協力についての知識の普及、啓発活動に貢献させてきた。



## 3. 2024(令和6年度)主な活動について

今年度は対面での全国総会・全国理事会・全国事務局長会議を再開したが、第2回の全国理事会は遠方参加者の便宜を図るため、Zoomでのハイブリッドの形で開催した。

### 1) 全国総会

2024年5月23日(木) 14:30~16:30 @JICA 地球ひろば

※ 中国ブロック大会の実施、宮城大会の実施概要等が共有

### 2) 第1回全国理事会

2024年7月31日(水) 14:00~17:00

※ 宮城大会前日に対面で実施、大会準備、今後の全国大会、今後の JICA エッセイコンテストおよび JICA との連携について

### 3) 第61回全国国際教育研究大会（宮城大会）

2024年8月1日（木）・2日（金） @トークネットホール仙台

※ 1日目大会終了後、5年ぶりに「全国事務局長会議」を実施した。

### 4) JICA 高校生エッセイコンテスト 1次、2次、最終審査への協力

### 5) 第2回全国理事会

2025年2月8日（土）14:30～

@六郷工科・オンラインのハイブリッドでの実施予定

### 6) 国際教育・開発教育インフォメーション（本誌）発行（3月）

### 7) 全国国際教育研究協議会 HP（ホームページ）を運営

### 8) 国際開発ジャーナル社との連携

※ 「国際開発ジャーナル」の「高校生の国際協力」に全国大会出場校を取り上げた連載記事の掲載

### 9) JICA との連携

※ JICA 地球ひろばとの連携 全国事務局との定例協議等

※ JICA 「教師海外研修」への応募勸奨等に協力

※ JICA 国内機関と各県研究協議会「教員研修会」「生徒研修会」を共催

### 10) 各ブロック・各都道府県研究協議会の活動

### 11) 研究会の充実・発展のため「全国理事会」の強化

### 12) 中国ブロックの再組織化、中国地区大会開催

※ 島根県・NPO 国際研との連携し、「中国地区高等学校国際教育研究協議会会則」を作成⇒6月に中国ブロック大会を実施⇒全国大会出場生徒を決定

## 4. 全国国際教育研究大会の内容

JICA と共催。文部科学省、外務省、国際交流基金、日本国際協力センター等から来賓を迎え、各県の教育委員会等から共催・後援をいただいて実施。

#### ◆ 高校生英語弁論大会

1981年より実施されている歴史ある大会。「文部科学大臣賞」「外務大臣賞」「JICA 理事長賞」「国際交流基金理事長賞」等を授与。国際協力等に関する英語弁論。在外経験は問わない。各都府県・地区予選を実施。

#### ◆ 高校生日本語弁論大会

2001年より実施。「文部科学大臣賞」「外務大臣賞」「JICA 理事長賞」「国際交流基金理事長賞」等を授与。日本語を母語としない在日8年以内の生徒（または留学生）の日本語弁論。各都府県・地区予選を実施。

#### ◆ 高校生国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会

2012年東京大会より実施。国際協力活動等の団体または個人での研究発表。2016年度より本格審査を行い、「JICA 支部長賞」「国際交流基金賞」「JICE 賞」などを授与。1月～3月に全国から公募。高校生の多岐にわ

たる活気あふれる活動の発表。

◆教員研究発表（全体会・分科会）

◆記念講演

◆生徒ワークショップ 他

## 1) 第61回 全国国際教育研究大会 2024（令和6）年 宮城大会

「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。～曇りなき心の月を先立てて浮世の国際社会を照らしてぞ行く～」をテーマとして、5年ぶりの対面での開催。英語弁論大会、日本語弁論大会、国際理解・国際協力に関する生徒研究発表会とともに、「平和」をテーマにした大会趣旨に合う「地球のステージ」の桑山氏のライブ&トークと石森氏の講演、生徒ワークショップや運営生徒によるおもてなしで盛大な会となった。2日目終了後は震災遺構訪問も行われた。

## 2) 第62回 全国国際教育研究大会 栃木大会（案）

第62回の研究大会は以下の通り、栃木県での開催を予定しております。詳細は決まり次第、HP等でお知らせいたします。

◆ 期日：2025年8月6日（水）～7日（木）

◆ 会場：栃木県教育会館 大ホール

〒320-0066

栃木県宇都宮市駒生1丁目1-6 TEL 電話：028-621-7177

◆ 内容：

英語弁論大会／日本語弁論大会／国際理解・国際協力生徒研究発表会／基調講演／教員発表分科会／生徒ワークショップ

文責：全国国際教育研究協議会事務局長 中村俊佑（東京都立五日市高等学校）

全国国際教育研究大会(英語弁論大会／日本語弁論大会／国際理解・国際協力に関する研究発表大会)のあゆみ

回	大会名	年度	開催月日	開催場所
1	全国高等学校海外教育研究会	1964	S39 10.29～31	神戸移住センター、ぶらじる丸
2	第2～6回 全国高等学校海外教育連絡協議会	1965～1969	" "	" みるぜんちな丸
7	第7回～10回 全国高等学校海外教育指導教師連絡会議	1970～1973	12月、10月	横浜移住センター、ぶらじる丸他
11	全国高等学校海外教育研究大会			
	1974年徳島文化センター、1975年国際協力事業団青年海外協力隊事務局、1976年静岡県立磐田農業高等学校			
	1977年千葉県市原市市民会館、1978年国際協力事業団青年海外協力隊事務局、1979年仙台市宮城県民会館、1980年経済協力センタービル			
18	" ならびに第1回英語弁論大会	1981	56 8.7～8	茨城県水戸市市民会館
19	" ならびに第2回英語弁論大会	1982	57 8.20～21	栃木県真岡市青年婦人会館
20	" ならびに第3回英語弁論大会	1983	58 8.5～6	東京都立大森東高等学校
21	" ならびに第4回英語弁論大会	1984	59 8.24～25	愛知県勤労会館
	全国高等学校国際教育研究大会(以下名称)			
22	" ならびに第5回英語弁論大会	1985	60 8.20～12	東京都府中市市民会館
23	" ならびに第6回英語弁論大会	1986	61 8.21～22	国際協力事業団青年海外協力隊事務局
24	" ならびに第7回英語弁論大会	1987	62 8.21～21	兵庫県神戸市・六甲荘
25	" ならびに第8回英語弁論大会	1988	63 8.18～19	神奈川県・横浜郵便貯金会館
26	" ならびに第9回英語弁論大会	1989	H1 8.21～22	国際協力事業団・青年海外協力隊事務局
27	" ならびに第10回英語弁論大会	1990	2 8.8～9	青森県・古牧温泉第2グラウンドホテル
28	" ならびに第11回英語編論大会	1991	3 8.23～24	国際協力事業団・国際協力センター
29	" ならびに第12回英語弁論大会	1992	4 8.24～25	滋賀県・彦根プリンスホテル
30	" ならびに第13回英語弁論大会	1993	5 8.24～25	岐阜県・岐阜観光ホテル十八楼
31	" ならびに第14回英語弁論大会	1994	6 8.22～23	東京都・国際協力総合研究所
32	" ならびに第15回英語弁論大会	1995	7 8.22～23	佐賀県・はがくれ荘
33	" ならびに第16回英語弁論大会	1996	8 8.19～20	群馬県・ホテル聚楽
34	" ならびに第17回英語弁論大会	1997	9 8.18～19	東京都・国立オリンピック記念青少年総合センター
35	" ならびに第18回英語弁論大会	1998	10 8.24～25	宮崎県・シーガイア
36	" ならびに第19回英語弁論大会	1999	11 8.5～6	福島県・華の湯
37	" ならびに第20回英語弁論大会	2000	12 8.8～9	北海道・ライフォート札幌
38	" ならびに第21回英語弁論・第1回留学生日本語弁論	2001	13 8.23～24	愛媛県・にぎたつ会館
39	" ならびに第22回英語弁論・第2回留学生日本語弁論	2002	14 8.19～20	東京都・青年海外協力隊広尾訓練研修センター
40	" ならびに第23回英語弁論・第3回留学生日本語弁論	2003	15 8.23～24	熊本県・水前寺共済会館
	全国国際教育研究大会(以下名称)			
41	" ならびに第24回英語弁論・第4回日本語弁論大会	2004	16 8.19～20	神奈川県・メルバルクYOKOHAMA
42	" ならびに第25回英語弁論・第5回日本語弁論大会	2005	17 8.22～23	宮城県・仙台ガーデンパレス
43	" ならびに第26回英語弁論・第6回日本語弁論大会	2006	18 8.24～25	長野県・駒ヶ根総合文化センター
44	" ならびに第27回英語弁論・第7回日本語弁論大会	2007	19 8.23～24	島根県・出雲市 ビッグハート出雲
45	" ならびに第28回英語弁論・第8回日本語弁論大会	2008	20 8.21～22	埼玉県・浦和コミュニティーセンター
46	" ならびに第29回英語弁論・第9回日本語弁論大会	2009	21 8.21～22	青森県・八戸市 ウェルサンピア八戸
47	" ならびに第30回英語弁論・第10回日本語弁論大会	2010	22 8.20～21	茨城県・つくば市 筑波学院大学
48	" ならびに第31回英語弁論・第11回日本語弁論大会	2011	23 8.18～19	和歌山県・和歌山市 和歌山ビック愛
49	" ならびに第32回英語・第12回日本語・第1回研究発表	2012	24 8.23～24	東京都・渋谷区広尾 JICA地球ひろば
50	" ならびに第33回英語・第13回日本語・第2回研究発表	2013	25 8.22～23	宮崎県・宮崎市民プラザ
51	" ならびに第34回英語・第14回日本語・第3回研究発表	2014	26 8.7～8	福井県・福井市・AOSSA
52	" ならびに第35回英語・第15回日本語・第4回研究発表	2015	27 8.20～21	千葉県・千葉市・神田外語大学
53	" ならびに第36回英語・第16回日本語・第5回研究発表	2016	28 8.18～19	高知県・高知県立県民文化ホール
54	" ならびに第37回英語・第17回日本語・第6回研究発表	2017	29 8.8～9	岩手県・花巻温泉千秋閣
55	" ならびに第38回英語・第18回日本語・第7回研究発表	2018	30 8.7～8	東京都・JICA地球ひろば
56	" ならびに第39回英語・第19回日本語・第8回研究発表	2019	31 8.8～9	奈良県・奈良文化会館
57	" ならびに第40回英語・第20回日本語・第9回研究発表	2020	R2 8.6～7	三重県・シンフォニアテクノロジー響ホール伊勢 ⇒対面開催中止・大会報告書による紙面発表で代替
58	" ならびに第41回英語・第21回日本語・第10回研究発表	2021	3 8.26	長崎県・創成館高等学校での審査会・You-tube によるオンラインライブ配信
59	" ならびに第42回英語・第22回日本語・第11回研究発表	2022	4 8.18～19	関東合同・JICA地球ひろば・Zoomでのオンライン 中継
60	" ならびに第43回英語・第23回日本語・第12回研究発表	2023	5 8.10	愛媛県・伊予農業高校にてオンライン中継(台風 風接近により対面大会は中止)
61	" ならびに第44回英語・第24回日本語・第13回研究発表	2024	6 8.1～2	宮城県・トークネットホール仙台

令和6(2024)年度 全国国際教育研究協議会・事務局名簿

★全国事務局メールアドレス：zen@jafie.jp

※空欄の県は現在「休会」となっております。本研究会に関心のある方は、全国事務局までご連絡ください。

ブロック	長	所属	都道府県	学校名	〒	学校住所	TEL
北海道 東北			1 北海道	休会			
			2 青森県	八戸西高等学校	039-0502	三戸郡南部町下名久井字下諏訪平1	0178-76-2215
			3 岩手県	岩手県立水沢高等学校	023-0864	岩手県奥州市水沢字龍ヶ馬場5-1	0197-24-3151
	●		4 宮城県	宮城県仙台東高等学校	984-0832	宮城県仙台市若林区下飯田字高野東70	022-289-4140
			5 秋田県	休会			
			6 山形県	休会			
			7 福島県	休会			
関東 甲信 越静			8 新潟県	十日町総合高等学校	048-0055	十日町市高山461	025-752-3186
	●		9 茨城県	竜ヶ崎第一高等学校	301-0844	茨城県龍ヶ崎市平畑248	0297-62-2146
			10 栃木県	足利南高等学校	326-0334	栃木県足利市下洪垂町980	0284-72-3118
			11 【群馬県連絡先】	伊勢崎高等学校	372-0033	伊勢崎市南千木町12670	0270-40-5005
			12 【埼玉県連絡先】	和光国際高等学校	351-0106	和光市広沢4-1	048-467-1311
			13 千葉県	柏市立柏高等学校	277-0801	柏市船戸山高野325-1	04-7132-3460
			14 東京都	富士森高等学校	193-0824	東京都八王子市長房町420-2	042-661-0444
			15 山梨県	休会			
			16 長野県	更級農業高等学校	397-0001	長野県木曾郡木曾町福島1827-2	026-292-0037
		17 神奈川県	休会				
		18 【静岡県連絡先】	吉原高等学校	417-8545	富士市今泉2160	0545-52-1440	
東海 北陸			19 富山県	休会			
			20 石川県	金沢中央高等学校	921-8042	金沢市泉本町6丁目105番地	076-243-2166
			21 岐阜県	休会			
			22 愛知県	刈谷北高等学校	448-0846	刈谷市寺横町1丁目67番地	0566-21-5107
	●		23 三重県	久居農林高等学校	514-1136	三重県津市久居東鷹跡町105番地	059-255-2013
		24 福井県	若狭高等学校	917-8507	小浜市千種1-6-13	0770-52-0007	
近畿			25 滋賀県	大津清陵高等学校	520-0867	大津市大平一丁目14-1	077-537-5004
			26 京都府	綾部高等学校	623-0042	京都府綾部市岡町長田18	0773-42-0451
			27 大阪府	茨木高等学校	567-8523	茨木市新庄町12-1	072-622-3423
	●		28 奈良県	国際高等学校	631-0008	奈良市二名町1944-12	0742-46-0017
			29 和歌山県	和歌山北高等学校	640-8464	和歌山市市小路388	073-455-3528
			30 兵庫県	青雲高等学校	651-0823	神戸市長田区池田谷町2-5	078-641-4200
中国			31 鳥取県	休会			
			32 岡山県	休会			
			33 島根県	松江東高等学校	690-0823	松江市西川津510番地	0852-27-3700
			34 【広島県連絡先】	宮島工業高等学校	739-0425	廿日市市物見西2-6-1	0829-55-0143
			35 山口県	休会			
四国			36 徳島県	徳島県立名西高等学校	779-3233	名西郡石井町石井字石井21-11	088-674-2151
			37 香川県	高松第一高等学校	760-0074	高松市桜町2-5-10	087-861-0244
			38 愛媛県	伊予農業高等学校	799-3111	伊予市下吾川1433	089-982-1225
	●		39 高知県	高知県立高知東高等学校	781-8133	高知県高知市一宮徳谷23番1号	088-845-5751
九州			40 福岡県	休会			
			41 佐賀県	休会			
			42 長崎県	創成館高等学校	854-0063	諫早市貝津町621	0957-25-1225
			43 熊本県	休会			
			44 大分県	休会			
	●		45 宮崎県	宮崎学園中学・高等学校	880-8503	宮崎市昭和町3	0985-23-5318
			46 鹿児島県	屋久島高校	891-4205	熊毛郡屋久島町宮之浦2479番地1	0997-42-0013
		47 沖縄県	休会				
全国会長	大泉 昌明		東京都立昭和高高等学校	196-0033	東京都昭島市東町2-3-21	042-541-0222	
全国事務局長	中村 俊佑		東京都立五日市高等学校	190-0164	東京都あきる野市五日市894	042-596-0176	

## 同じ空の下に生きている ～世界で起きていることを主体的に考える国際理解～

◆会場 栃木県教育会館 大ホール  
〒320-0066  
栃木県宇都宮市駒生1丁目1-6  
関東バス「作新学院・駒生」行き  
(JR宇都宮駅前西口より、約20分)  
「東中丸(会館前)」下車  
TEL 028-621-7177

◆大会日程 ※大会日程は変更の場合もあります。

第1日 令和7年8月6日(水)

9:30~10:00 受付

10:00~10:30 開会行事

10:50~12:00 第45回高校生英語弁論大会

13:10~14:00 第25回高校生日本語弁論大会

14:20~16:00 記念講演会

16:10~17:00 講評・審査結果発表・表彰式

第2日 令和7年8月7日(木)

8:30~9:00 受付

9:10~10:20 第14回高校生国際理解・国際協力  
に関する生徒研究発表会

10:30~11:30 分科会(教員による研究発表)

11:40~12:40 講評・審査結果発表・表彰式・閉会行事

◆問合せ先

第62回全国国際教育研究大会 栃木大会事務局

(栃木県立足利南高等学校内)

担当 亀山 雅弘

TEL 0284-72-3118

FAX 0284-73-2772

Mail kameyama-m01@tochigi-edu.ed.jp

※「英語弁論大会」、「日本語弁論大会」、「国際理解・国際協力に関する研究発表会」に参加して、自分の意見や考えを発表しませんか。

興味のある方は各都道府県の事務局までお問い合わせください。

## <あとがき>

2024年は世界でも不安定の状況が続き、国内でもさまざまな課題に直面した年となりました。世界ではウクライナ戦争の長期化と気候変動の深刻化、国内では少子高齢化/労働力不足と経済低迷とインフレ、学校では生徒数減少と教員の負担の課題について挙げられると思います。

今回の全国大会ではさまざまな切り口からの発表があり、生徒の皆さんがそれぞれの視点で課題に取り組んでいる状況が見られました。何人かの方は日本に来る外国人の方にごう魅力を発信するかについて議論し、地域の活性化について考える姿はとても頼もしく感じられました。首都に人口が集中しているという問題点がクローズアップされることが多いですが、同時に地域でも若い世代が自分たちの街を盛り上げようと考え、奮闘しているということについては今回の発表だけではなく、さまざまなメディアで取り上げ、活躍の場になればいいなと思います。

また、生徒の発表は年々、多様な形で他国とつながり、その経験を共有している発表が多くなっているように思います。海外と通話することで英語による会話を楽しんだり、AIについて議論したりしている姿を見ると、言語も大事ですが、何を喋るかということが重要になるなど感じます。若いうちに「のめり込んで話ができるもの」「好きで続けられるもの」に出会うことが大事なのかなと改めて感じました。このように海外とのつながりは私たちに振り返る機会を与え、より良い教育やより良い生き方はどのようなものかを考えることにつながるなど感じます。

最後になりましたが、今回の報告書を発行するにあたり、国際協力機構 JICA 地球ひろば様には、多大なるご支援・ご協力をいただきましたことを心から感謝申し上げます。ありがとうございました。また、日本国際協力センター様、国際交流基金様、全国国際教育協会様から事業紹介をご寄稿いただき、ありがとうございました。更なる国際教育・開発教育が発展のために今後ともご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

NPO 法人全国国際教育協会 木村 光宏  
表紙の絵 東京都立五日市高等学校 3年 田野倉 萌香

## 2024年度 全国国際教育研究大会報告書

### 国際教育・開発教育インフォメーション

2025年3月

**発行**

**全国国際教育研究協議会**

会長

大泉 昌明

事務局長

中村 俊佑

TEL: 042-596-0176

